

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成十九年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九六五号



日川協加盟

No. 965

平成十九年度六賞発表

十月号

第13回 川柳塔まつり

《同人総会》

と き 10月8日(祝) 午前10時～11時
ところ ホテル・アウイーナ大阪 3F 生 駒
(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車・TEL 06-6772-1441)
議 事 平成18年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成19年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

と き 同 日 午前11時開場・午後1時開会
ところ ホテル・アウイーナ大阪 4F 金 剛 中・西
表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・
各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。
おはなし 「お笑い趣味オ々」 小 島 笑 司 氏
兼 題 「ハンドル」 (大 阪) 籠 島 恵 子 選
「 炎 」 (大 阪) 池 森 子 選
「 あ ま い 」 (愛 知) 早 川 遡 行 選
「 鳥 」 (香 川) 川 崎 ひかり 選
「 の び る 」 (鳥 取) 岸 本 宏 章 選
「 空 気 」 (締切りました) 河 内 天 笑 選

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正午(午後4時半終了予定)
会 費 2,000円(記念品呈)・当日いただきます。

《懇 親 宴》

と き 同 日 午後5時～7時
ところ ホテル・アウイーナ大阪 3F 葛 城
会 費 7,000円
宿 泊 ホテル・アウイーナ大阪 8,000円(朝食付き)
翌日観光 観劇「吉本新喜劇」 4,000円 30人締切

事前投句および懇親宴・宿泊・翌日観光の申込みは締切りました。
同人総会(同人のみ)・記念句会の当日参加を歓迎しますので、ふる
ってご出席下さいますようお願い致します。

主催 川 柳 塔 社 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号201
〒543-0052 ☎06-6779-3490

「五感にシヨックを」

河内 天笑

七月号のこの欄「句会でどきどき」へ便りをいただいた。内容の一部を借用してもよろしいかの事で二つ返事でOKする。やはり見てくれている人が居るのだと知って毎月の苦勞も忘れる。そこでいい気になって「五感にシヨック」という題目を思いついて七月号を少し書き加える事とする。

おおよそ「いい句会だった」と感じられるのは選者が入選句を①立派に披露し、間髪を入れず②立派に呼名し、選者が二回目を詠み終えれば脇取が③しつかりと呼名を返す。ただこれだけの作業だが、雰囲気壊すのは大概②の呼名で声が小さく脇取に届かないから、再度呼名を要求され句会のリズムが崩れてしまう。うつとりと披露に聴き入っていた皆さんの「五感」がいちばん被害を受ける事になる。

本社句会は十月より三月まで昼の句会で平均一一〇人、四月から九月まで夜の会で平均九五人程。年平均一〇〇人というところだが音響効果、照明共に抜群。こんないい雰囲気毎句句会を持てる事は大きな喜びだ。

百人百態いろんな人が一つの目的の為に集い、川柳に興じることの出来る平和に感謝せねばなるまい。百人の会には百の人生があり、一つの題に百の魂がぶつかり合う。投句も入れて二三〇句より入選は四〇句、平拔にもいい作品が埋れており、六分の一の節にかけられた発表句は珠玉揃いだ。その中でもさら

りと光る玉と出くわすのが最大の楽しみ。つまり、自分の脳回路や五感ではどこを押しても出てこない、特別な発想や粋な表現に出くわすと強烈なシヨックを受けるのだ。それは何とも言い難い心地よいシヨックだ。これが全身に伝わり、特に心を打つ何句かを出来る限り正確に書きとめて、帰路のたのしみにする。いつもこんなくり返しで句会からおみやげを頂き、私の川柳の栄養源にさせて貰っている。

本社に限らず各地の句会も全く同じで自分の作品の発表のみならず、仲間のいい作品に感動したりシヨックを受けたりして、作句の守備範囲を拡げ共に感じ合える句会にしたいものです。その昔シヨックを受けた中尾藻介さんの句を紹介致します。

狼だからネクタイを締めている

逢えたので正倉院は見なくても

親分の女にしては威張らない

友達のくせして怖い目をするな

ヨーロッパ旅行は犬が死んでから

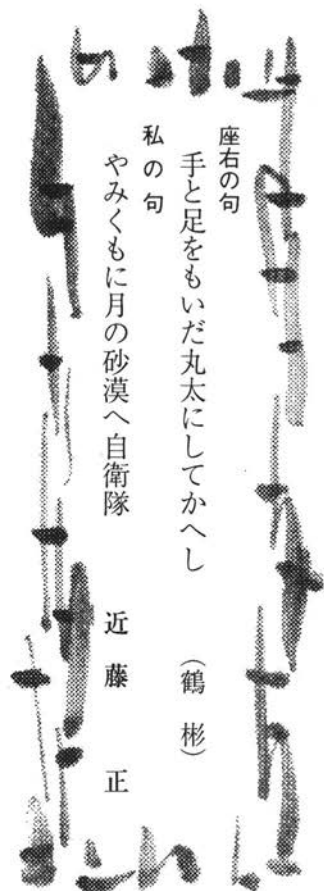
私の初心の頃ずつと堺の句会に遊びに来られ、舞鶴へ転動される際、「につぼんのどこかに藻介さんが居る」を短冊にしたためてお渡ししたところ、友達に自慢されたそうである。

自選句

雲を抜け出る満月のストリップ
月の謎解きに出かけたかぐや姫
ビール飲む席でも恩を売る男
落しても破れない皿と仲よしに
特権階級に番台のおやじ

天笑

ク ク ク ク



座右の句

手と足をもいだ丸太にしてかへし

(鶴彬)

私の句

やみくもに月の砂漠へ自衛隊

近藤 正

川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「竹を編む」

■巻頭言 「五感にシヨックを」

天 敵

河内 天笑 …… (1)
遠山 可住 …… (2)

川柳塔 (同人吟)

河内 天笑 …… (4)

川柳塔の川柳讃歌 (34)

木津川 計 …… (49)

自選集

(50)

温故知新

(53)

水煙抄

西出 楓楽選 …… (54)

愛染帖

新家 完司選 …… (78)

平成十九年度

路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞

(82)

檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

俳風柳多留 一 一篇研究 26

(92)

天 敵

遠山 可住

自然界には一つの種が天下を独占しないように、天敵という存在が奇妙に仕組まれているものだ。猫と鼠、蛇と蛙の例だが、一つ狂うと蝗の大発生や、蟬の異状発生など、世界には突発的なニュースも数年の間隔で報道されている。私は過疎の農山村に住んでいるが、身近で一番気がかりなのは山の松枯れである。今年は特にその被害が大きく目に映る。この松枯れの犯人はマツノダイセンチュウという目に見えぬ小さな線虫が導管に寄生するのだが、暖冬で生き残りが多いせいらしい。

松は松材としての利用は勿論だが、副産物としての松茸の姿が消えてゆくのが何とも大きな痛手である。松茸で一年分の家計が賄われた農家や、運営費を賄って来た集落組織の姿が過去のものとなってしまったことである。

関西地方では中国縦貫自動車道の開通によって被害が広がったようだが、これは夜行の自動車の明かりで線虫の運び屋であるカミキリムシの移動が活発になったという説である。

不思議なのはこれだけの被害が何十年も続いていて天敵が現れないことだ。

線虫は松材の中に寄生するもので、それ自体

檸檬抄「ばちばち」……………鈴木公弘・西口いわゑ共選…(94)

一路集

「それから」……………中原諷人選…(96)

「囁む」……………今愁女選…(96)

「引」……………播本充子選…(97)

初步教室「音」……………三宅保州…(98)

秀句鑑賞「同人吟」……………小島蘭幸…(100)

「水煙抄」……………川端一步…(102)

■句集紹介 井上桂著作『時をつかむ』……………西出楓楽…(103)

九月本社句会……………飛永ふりこ…(104)

■エッセー 和歌山の海……………飛永ふりこ…(108)

各地柳壇(佳句地十選／川久保睦子)……………(110)

柳界展望……………(125)

十月各地句会案内……………(126)

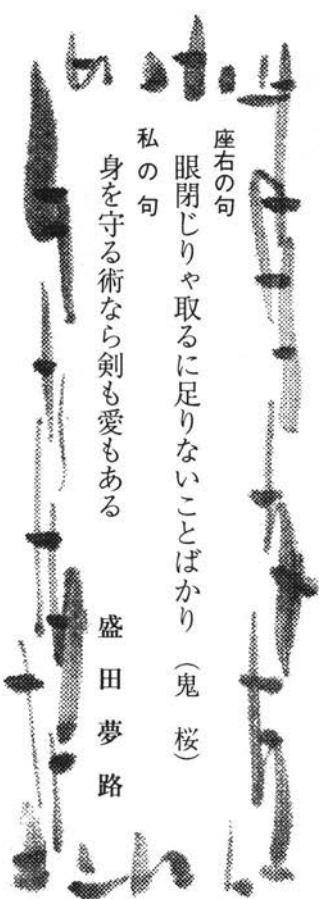
■編集後記(ひとこと／小島笑司)……………希久子・朱夏…(128)

座右の句

眼閉じりや取るに足りないことばかり (鬼 桜)

私の句

身を守る術なら剣も愛もある 盛田 夢路



は移動出来ず、冬の寒さによる死滅が頼りである。昔は枯れた松は台所の貴重な焚物で見つけ次第伐採して利用していたので線虫移動の心配はなかった。その生活循環が消えてなくなった。あとはこの線虫の運び屋であるカミキリ虫の防除であるが、これがまた厄介者で一時は航空防除という農薬散布が試みられたが、広大な山地管理は手に負えない事業である。こうして天敵待望論を進めて行くと、第一に生活様式の変化にたどりつく。線虫の一番の天敵は実は私達人間だったようである。自然を利活用しない限り自然は天敵という循環の恵みを与えてくれないように出来ていることを、私たちは知らなければならぬ。そう遠くないいつの日か、日本の山山から松の緑が消える姿は如何にも淋しい思いだ。これからの期待は、この線虫の寄生に免疫を持つ新しい松の改良品種の育成だろう。これは天敵復活にかける人間の自然への恩返しになるかもしれない。天敵——実は極く身近に私たちはこの天敵と素敵なくらしを展開しています。天敵に妻という字を加えとく 大輪 うん・うんと頷く顔が見えます。平和な庶民の生活が其処に強い根を張っているのが日本の家庭だと改めて知らされます。天敵万歳。



河内天笑選

鳥取県 石谷 美恵子

雨乞いに河童も来たか濡れている

儚くて強いものだと思ふいのち

私の良心欲が混ぜかえす

唄うから踊れと父が酔うている

雑巾も乾いて妻は外が好き

外聞が悪いと踊らせてくれぬ

堺市 柿花 和夫

捨て石になる気だ眉が動かない

深読みをされて慌てる半可通

煩惱のままに生きたら現在地

恐竜は化石となって町おこし

人間のエゴに堪えてる百度石

衣食住足りて悩みの深くなる

鳥取県 佐伯 やえ

原爆忌 還らぬ人の歳を読む

泣いたペン今うつくしい秋をかく

花あかり めったなことに泣きはせぬ

じゃませぬよう百まで生きるつもりです

やがてくる終の日までの花づくり

逝きしものみな美しき遠花火

島根県 伊藤 寿美

振り向けば影も曲って従いてくる

一輛のローカル線に湖の風

遺産指定銀山ロード陽が当たる

矯められた枝の話も聞いてやる

澄んできた川で寝返りうつ目高

臍出しルック着た巫女さんに逢う浜辺

八尾市 吉村 一風

生きるっていい格好はせんことだ

献血にも行けない老いを蚊が攻める

生きてるぞ生きているぞとセミは鳴く

約束を果してビールうまく飲む

人生の裏目裏目にじつと耐え

跡継ぎはいるぞと見せる鯉のぼり

竹原市 石原 淑子

瘦せた魂入道雲に笑われる

総理そうり笑顔の稽古なさいませ

初盆のおまいり心抗うて

心だけはいつも一緒にいたい友

狭まって来たな二人の車間距離

雨水を溜めて我家のダム作る

松山市 古手川 光

選挙結果へ想う平家物語

テンポの悪い打ち上げ花火ストレスに

しんがりはつくつくほうし夏終る

豊漁へ漁師が山に木を植える

物忘れがひどい茗荷は食べてない

男ひとりの自由はとても不自由だ

鳥取市 夏目 一 粹

サンガラスかけて優しい顔隠す

徘徊のような旅ならしてみたい

貧しくもみんなで唄う赤トンボ

割る勇気ないとコップに嘗められる

ああ無情こころを開ける鍵がない

人間は在庫の一つ使い捨て

海門市 三宅 保州

私の骨は自分で拾いたい

退職の日も一列に並ばされ

拙宅のビヤガーデンは物干し場

欠席は無言の抵抗かも知れぬ

目薬をさしてあなたを確かめる

金持ちは現金なんか持つてねえ

弘前市 高瀬 霜石

こうやって人は死ぬのか手術台

歳ひとつとるたび昔近くなる

恋愛は下手くそ夢も現実も

草餅と一緒に食べるお月さま

割り勘じゃなければ飲んだ気がしない

町内の猫はどいつも肥えている

寝屋川市 籠島 恵子

晩年になって多忙とは誤算

背水の陣とは破れかぶれなり

美意識はない箱入りのみかんたち

五分五分になるとニンマリしてしまう

風のたよりだけでうれしいシャボン玉

ひまわりを貸し農園にうえてはる

堺市 志田 千代

大臣にならねばボロはでなかった

省エネのショートカットにしています

退院を早めてほしい猫がいる

泣き虫の児に手こずって見た銀河

ダンゴ鼻甘く見られているようだ

老妻は逆らわずでも従わず

生駒市 飛 永 ふりこ

そこはかと自分の軸を持つセンス
生ビール二杯で治る軽いうつ

ありがとうお墓洗うと父母の声

高らかな修羅の叫びか蟬時雨

悪友を振り阿久悠さん悼む

消えかかる恋の揺らぎか大文字

鳥取市 近 藤 佳 子

お下げ髪の頃の写真を大事がり

道祖神時空を越えて笑み給う

月見草と里の堤で再会す

尿コップ誰とも会わずほっとする

助かったいのち何でも越えられる

縫い針に救われた日をなつかしむ

富田林市 藤 田 泰 子

祭囃子が過去から聞えてくるようだ

欲の無い方にはとても勝てません

何しても許してくれる怖い妻

蓮の花底無し沼に咲いている

風吹けばすぐに外れる蝶番

ダイエツトしていないのに痩せてくる

鳥取市 岸 本 宏 章

人並みという物差しがよく狂う

虐待としつけは子供でも分かる

ひとりっ子に重い家族の総がかり

好きなこととしている背なが隙だらけ

惚けのことと思うと老いが怖くなる

この命大地へ還すまで研く

海南市 堂 上 泰 女

原点に戻れば見える虹の橋

満面の笑顔でまいていく野心

純情な道案内はキセキレイ

遠慮せずばつといってくる友

朱のカンナ家の印になった夏

失恋をとむらうような蟬しぐれ

枚方市 海老池 洋

母逝って漬物石もただの石

乾パンの味を忘れぬ第九条

結束の中にくすぶる反主流

駅ができ不毛の土地が物を言う

新聞を束ねて過去をもう忘れ

父に似た味で山菜はろ苦し

大阪市 星 野 きらり

もうあかん茶柱までが寝てしま

歳月に追われて忙しい八十路

一と仕事終えクーラーとご対面

今日もまたお茶漬け美味しありがたし

さいならと酷暑へ消える夏帽子

天神さんをびっくりさせる大花火

鳥取市 鈴木 公弘

河豚に似た体を持つている暑さ
ホルモンを肴に過ぎた話など
首相には問われないのか心技体
ふるりのホタルころした自民党
働き蜂の怒りを軽くみるなかれ

鳥取市 植田 一京

絵手紙をくれる友いて有難い
日々多忙今日も満足して暮らす
欠点はみんな遺伝のせいにする
お互いのルール守って続く仲
元氣出すためにしてます若づくり

鳥取市 倉益 一瑠

前髪に隠す意外な火傷跡
ピーチクバーチク口のブレーキきません
切られ役だけどでっかい夢がある
余生まだチヨロチヨロ残り火が燃える
彼岸花鬼籍の男に逢いにゆく

鳥取市 春木 圭一郎

世の中にもうにもならぬこともある
心配りがお節介では浮かばれぬ
やさしさは皆が同じと限らない
余裕持ち相手のことを考える
ちゅうちょなくお先にどうぞいいいな

鳥取市 福田 登美

秋近く今朝も大きく深呼吸吸
嫁が吹く笛にわが家は活気づく
傘踊りゆかた美人が街を練る
白足袋が祭りの暮色引き締める
公園のほたるゆめゆめつかまるな

鳥取市 中村 金祥

脛に傷あつて大臣にはなれぬ
賃金カット慣れてくるのが恐ろしい
大自然またも宿題つきつける
もううまで安心出来ぬ年金だ
担い手はないが田んぼを守り抜く

鳥取市 西川 和子

食べ方も添えて山菜届けられ
よろよろと踊り続けている七十路
息切れをしながら終えまっしぐら
豆絞り祭ばやしを盛り上げる
エコバッグ持ってポイント一貰う

鳥取市 奥谷 彩子

母の章 子への切り取り線を引く
霧晴れて父の山からかすみ立つ
祭りばやし幼なじみと酒を酌む
ほめ言葉けずり本音を日に晒す
無位無冠心は矯めぬい余生

鳥取市 永原 昌 鼓

姿見に背中の丸さ暴かれる

こっそりと入れたシリコン愚図りだす

国籍もビザも不問で鳥渡る

寝て起きてまた寝て起きて季は巡る

年金の投げた波紋が国揺すり

鳥取市 平尾 菜 美

軒先をうろうろ父の用心棒

邪気を吐く生気静かに蘇る

痒み止め塗って脇役こなしてる

風になり陽になる男に陰がある

豊作へ貧乏汗は無駄にせぬ

鳥取市 山 宮 愛 恵

帰省子ヘリズムできざむ朝のネギ

バイキング先ずはメロンを食べてから

遣族年金内助の功は捨てられる

神経の栄養剤に詩を吟じ

一行の漢詩にやどる心意気

鳥取市 富 山 檳榔樹

騒がれて大臣辞職選挙負け

千の風空を駆け足抜けてゆく

梅雨空に冴えた青空夢を描く

自我捨てて入道雲に乗って見る

苦勞なめ妻とゆっくり老い日和

鳥取市 杉 本 孝 男

身内でも票になるとは限らない

決断へ身内意識は邪魔になる

攻めの策まだまだ余力貯めておく

悔しさに出逢う限りは生きられる

迷い子札老母に持たせるやるせなさ

鳥取市 太 田 幸 枝

仲居さんサービス良くてチップ増え

傷つけた恋人今は灰と消え

傘寿きて腹も立たない器なり

豆袋腰に泳いだ里の海

認知症の友に昔の話する

鳥取市 福 西 茶 子

他国籍ばかり着るもの食べるもの

わたしの血無断で吸ったから叩く

純米酒みると酒蒸ししたくなる

相棒も元氣しばらく遊ぼうか

歳かなあ怒る元氣が失せている

鳥取市 池 原 天 馬

土下座して六年間の禄を食む

年金を鼻で笑っていくさ負け

喜寿すぎた心身機能大破知る

甲子園夢あるドラマ今年また

長雨で葱自給率ゼロとなる

鳥取市 山 本 益 子

人生の大波小波不意に来る
賃金の男女格差は是正乞う
七十路まだまだ早い認知症
永らえて遊び心の転換を
旅支度先ずは小錢を用意する

鳥取市 宮 脇 道 子

ばあちゃんの弱音も愚痴も言つた顔
負け方や悲しみ耐えた春の水
ごまかしのきかぬ友持ち温かい
あの人に会つて心を洗います
うしろ姿に若さがあつて過去を知る

鳥取市 中 宇 地 秀 四

風鈴もぐったりしてる熱帯夜
長話猫も欠伸をして逃げる
九条で何時か来た道通せんぼ
腹の底見える眼鏡が売つてない
八月だ地獄を生んだきのこ雲

鳥取市 岸 本 孝 子

仏さんが迷わぬように盆支度
今日もまた昨日と同じ顔作る
ついそこにコンビニがある暮し向き
もう少し瘦せればどれも着れる服
ぼちぼちともみじマークを付けてみる

鳥取市 土 橋 はるお

寺参りしては心の錆おとす
悪いことせずにはつぼつ生きるだけ
往復の軒サービスくれる妻
あこがれて天を目指すも竹とんぼ
あれ以来おしやれは次の次のこと

鳥取市 土 橋 睦 子

蝉しぐれ残暑見舞の返事書く
渋滞と聞けば少しと慰さめる
仏飯を供え我が身を想いやる
少子化に小切れで売つてある西瓜
空眺め射手座生まれと言うロマン

鳥取市 有 沢 せつ子

傷つけぬ言葉を選び手をつなぐ
ニユース見て非常袋を入れ替える
瘦身の悩み厚手の服を着る
ひまわりのよう豪快な女高生
土石流森を返せと言うように

鳥取市 録 沢 風 花

台風に地震セットで来る不気味
釈明は絆創膏を貼ってから
うろろうと過して早やも盆の月
オートロックなのに一度は確かめる
約束の日はうきうきと服選ぶ

鳥取市 吉田 弘子

人生の実りの秋と知る七十路坂
プラス思考五体満足よしとする
人並みの群れにいて格差気にせぬ
聞かないであなたと踊りたい理由を
マネキンが一足先に秋を着る

鳥取市 田中 瞳子

何枚目までがキャベツの皮なのか
夢の中まで追って来る蟬時雨
省エネへ電源切れぬ冷蔵庫
脳のため手間かけること惜しまない
欠席に丸してほっとお欠伸

鳥取市 田村 邦昭

ぶちあたる壁がだんだん強くする
約束の小指はなにも忘れてる
錦など飾れないまま故郷帰り
ゆるやかな道を選んで平和です
欲望を引きずってきた長い道

鳥取市 加藤 茶人

生かされて生きて性善説信ず
ぎこちない仕草が隠すほど目立ち
故郷に出世払いがまだ未納
トンネルの向こうは異文化の匂い
まあ上がれ飲めや飛びかう国訛り

鳥取市 垆 寛子

恨み票集めて強し夏の陣
美しい国身内の掃除終えてから
流星群に逢えぬ砂丘の夜明け雲
心して老いの冷水飲んでます
熱中症寝ててもしのび寄るらしい

鳥取市 下田 茂登子

匿名で福祉に電話入れた訳
猜疑心起こさせていたこの乳房
検診もどうでも良いが行く八十路
過去覗く鏡わたしの胸にあり
播いた種生えて来ました古希の背に

倉吉市 松本 よしえ

似顔絵がそっくりに出来不満そう
MRI脳の中味をさらけ出す
小さな奢り税金付きの缶ビール
近道でやたら茨に引つ掻かれ
わが街の銀座通りに雨が洩る

倉吉市 山本 玲子

たんぼの綿毛自立の風を待つ
雨露を受けて紫陽花七変化
婆ちゃんの話は骨が折れたこと
聞き流すことにも慣れてひとり立ち
隠し事ないが自慢の種もない

倉吉市 最上和枝

飾りもの知らない母の太い指

枕木も朽ちて廃線花が咲く

はにかみとハンカチ王子若い星

いい匂いどうやら豆が煮上った

水族館あらゆる魚泳がせる

倉吉市 牧野芳光

町なかへ広い田舎を捨てて行く

体力は失せ経験で食っている

飛び石を飛んで明日へかけ抜ける

先が見えてくると優しくなりたがる

顔は知れてるどんな帽子を被っても

倉吉市 猪川由美子

風鈴が錆びたハートをノックする

ウツ時には鳴き砂聞きに浜へ行く

外人横綱帰郷のたんび揉め事だ

涙目で誓う統投風厳し

名が売れてすぐに選挙へ出たがり屋

倉吉市 山中康子

泣き叫ぶ急患同じ立場です

主の傍で転ばぬ先の杖となり

正直な瞳やんわり包みます

示さねば風来坊になるおそれ

交代も役に立ちます嫁びいき

米子市 政岡日枝子

逢うて別れてたびたび判子いそがしい

あちこちの家に長居をしてる傘

絶頂にある屋根だから人が寄る

ご主人のリズムに金魚合わせられ

艶消して法事の席に座ってる

米子市 白根ふみ

昨日のよう八月六日反芻す

八月の記憶ラジオのノイズだけ

岩清水靴にも吞ませ峻岳へ

汗だくを微塵も見せぬ紐をまとい

聞き流すこと巧者になって快眠す

米子市 青戸田鶴

夾竹桃炎えて記念日やってくる

早回りのシネマのような六十年

頼りない私を頼る父の老い

好奇心あるうち旅も続けよう

早起きをして漬物をつけて置く

米子市 中井ゆき

ワンちゃんにすだれ新調猛暑です

真剣に生きて来たから悔いはない

大食いのテレビよ飢餓の国もある

眉かいてバイオリズムが動きだす

有料化ゴミはギョウギウウ押し込める

米子市 光井玲子

鳥取県 谷口次男

何回も壁にぶつかり今日がある

白寿まで生きるつもりで米を研ぐ

何事も中弛みだな活入れる

押し入れの中で過去らがうずくまる

迷わずに残り時間を歩きます

鳥取県 竹信照彦

新聞を読んで黙祷原爆忌

原爆が二度も炸裂した日本

母よ子よ降らしてならぬ黒い雨

次世代が語り継ぎたい原爆忌

遺産にはしない九条生きている

鳥取県 盛田夢路

年金の台帳消したシュレッダー

赤いバラ刺を隠してワルツ舞う

何時からか妻が天下を取り出した

廃線ツアー郷愁さそうひつじ雲

冷静になれば妬心が萎み出す

鳥取県 深田俱久

トンネルでミシシッピーをくぐる夢

力戦奮闘綱はすぐそこ琴光喜

服装に似合っただらしな政治

もういいぞ領収証は準備した

ふんどし姿で女走らすコマーシヤル

ゴキブリとカラスの知恵に負けられぬ

平成の甘えん坊將軍か

水浴びのスズメ横目に花売り屋

おお寒いこんな日本に誰がした

高齢者グンと増えたぞ喫茶店

鳥取県 山下節子

臍の緒をカットしてから自己主張

無理はせぬきのうと同じ今日がある

母介護まだまだ腰は曲げれない

月下美人開花まだまだ夜が更ける

大欠伸喉の奥までさらけ出す

鳥取県 松川行男

現世を君はうつちやり蓮華の座

消えるかな美しい国内輪もめ

縄のれん転んで行った三次会

暑いんだ蟻さん無口すれ違う

アルコール無しの研修やればでき

松江市 三島淞丘

草臥れた羽根を休める縄のれん

マメ知識たつぷり食べて子は育つ

たつぷりと墨ふくませて愛と書く

ゴッホにも負けぬ向日葵クレヨン画

ひょうきんな男がひとり居て和む

松江市 小川 注 湖

年々にマンガ食器用納め

地藏さん会釈する人顔なじみ

方言を聞いて交渉動き出す

前売り券確保した席がら空きだ

初恋は翼を持って飛んでいる

松江市 川 本 畔

画面みな盆のラッシュで大騒ぎ

熱帯夜事故のニュースに脳パチリ

孫達が順番に鉦鳴らすなり

白桃を二つ包んで送り盆

仏さまおはぎに団子お赤飯

松江市 松 本 知恵子

サリサリの朝漬け嚙んで出すパワー

開府四百みずの都が燃えている

夏の夜八雲の怪談たまらない

飛魚の翼かりたい逃避行

たつぷりとゴーヤが成らぬ夏のウツ

松江市 安 食 友 子

棧敷での和服が日毎変わるママ

乞うのではさらさらないが派手好み

さあ意欲鈴虫さんの呼び掛けだ

ガソリンが心細いと誘われる

年金を攫うがごとく口車

松江市 銭 山 昌 枝

絵手紙をトイレに吊って自画自讃

人並の文化家中電子音

菌並びは悪いが噛める蛸栄螺

百均の風鈴威勢良い音色

物置に回せぬままのフラフープ

松江市 津 川 紫 晃

手のひらにある長編の私小説

鳴き砂のロマンを聴いている素足

人間の角とれてくる物忘れ

笑っても泣いても同じ飯を食う

風鈴が昔の風を連れてくる

松江市 佐野木 み え

同じ柄着ている若い人を見る

出目金の優雅な泳ぎ涼を呼ぶ

台風がそれて私の海も風ぎ

空港に降りて迷わずバスに乗る

麦わら帽ゆつくり時間過ぎてゆく

出雲市 竹 治 ちかし

すべて良しひらき直って見る手相

死の美学崩れ還暦まで越える

長生きの決意をさせる妻娘孫

運の良い兆し他人には語らない

美しい国が日本の良さを消す

出雲市 小白金 房子

太陽の恵みトマトの丸かじり
豆腐屋の灯りが届く朝の音
陽と泥の匂いで生きた農の詩
敵味方持たぬ円座の笑い声
山門を潜って心の錯おとす

出雲市 森 茂美

言いたい事はつきり言えば楽になる
本物はハッピーエンドとはゆかず
カタカナの文字が多くて難しい
鶯が鳴き声競う里は夏
九条が百年前にあったなら

出雲市 富田 蘭水

長梅雨で心の海も曇り果て
無常感知らずに終わる人偉い
人間の勝手でうなぎ御難の日
腹に持つ人間なんて弱い者
通帳の残高ばかり確かめる

出雲市 園山 多賀子

満ち足りて無神論者が多くなる
蕎麦枕昨夜の夢の続き見る
輪をつくる味方は多い方がよい
ある弾み女身辺整理する
長生きも程ほどと言うお節介

出雲市 多久和 敬子

名も無い花はそつと咲きそつと散り
価値観の違う二人が旅の宿
ローカルのニュース懐かし旅帰り
ふかふかの布団楽しい夢を見る
電話口漬物談義花が咲く

出雲市 岸 桂子

揚げ花火ふつと会いたい顔が浮く
カレンダー予定通りに消してゆく
迎え灯に南無の提灯揺れやまず
雀の子泣く孤独は慣れるもの
悲しみを残さぬように顔洗う

出雲市 佐藤 治代

痛いところ支える足も手も老いる
まだ若いそう思ってる七十五
どこかいそうんとこしよつと陽が沈む
私のために手摺りのあるトイレ
駆け足でのびる手の爪足の爪

出雲市 伊藤 玲子

躓いてしばし初心を噛みしめる
こりこりを解す項の蒸しタオル
箸落す夫を抱えて救急車
安静の夫の髭が伸びている
雑音もあつて暮しも丸くなる

出雲市 持田 多輝子

心から信頼できる医のカルテ
雲行きのあやしい訳に気がつかぬ
似て欲しい所が似ない子の巣立ち
知らぬ振りするのも老いの思いやり
老い二人話とぎれていわし焼く

出雲市 石倉 美佐子

わたくしと話すムードに溺れそう
二人歩いた渚を私一人ぼち
お訣れは急そして哀しさも急
皇后様の御心じんとくる或る日
一生をお守りしますと言うた人

出雲市 小豆澤 歌子

立ち止る前も後も見えるから
一束の藁が昔を語り出す
結び目も次第に弛む遠い糸
ゆっくりと星座と話する今宵
誘われて遠くへいった紙風船

雲南市 毛利 幸

山坂で流した汗が報われる
中元の品を景気が左右する
釣り自慢逃げた魚を誇大する
蛭狩り幼時の頃の夏の夢
夏休み蟬が宿題せきたてる

倉敷市 撰 喜子

投げやりな言葉悪ぶる娘が一人
道徳にそむいた人のかい声
水浴びのちさなプールにある宇宙
沐浴の桶にストレス浮かばせる
屑籠に捨てた恋文発火する

真庭市 国米 さくゑ

野心などありませんよと丸い石
百度石母の願いが詰ってる
泣き事は言うまい青い空の下
半世紀前の約束胸の底
故郷の味懐しい芋煮会

真庭市 福岡 智恵子

七夕の短冊飾り戯れる
仲秋の醍醐味星と酌みかわす
雨宿り自然に会話はすむ老い
勝組のじっくり見たいこれからを
いつからか父に似てきた加齢臭

美作市 小林 妻子

石油高騰これもやっぱりしようがない
赤紙一枚でしようがなく戦地
美しい平和日本がする軍備
運転免許返すかえさん思案中
盆の仏も休耕田を見て帰る

美作市 山本 玉恵

美祿市 安平次 弘道

露を踏む子達に朝の輝きを

放つ機を狙う二の矢も三の矢も

女ひとりを守る運命の男下駄

泣いて笑うた一日だった顔洗う

夫婦茶碗抱いてひとりで帰ります

美作市 大石 あすなろ

壁の絵を替えて明るくなった部屋

携帯が自由にわたし使います

平等に太郎次郎にのし袋

よく軋む椅子に一喝くれてやる

働き蜂の中にニートもいるらしい

竹原市 岩本 笑子

八月の雲にいくつも顔があり

命さわさわ稲の花です黄金です

ソーマンが伸びると降りてくる二階

猫無心雨が降ろうと降るまいと

振り向いてほしい人なら念力で

竹原市 時 広 一路

虹を書く絵具はだれも持っている

医者通いこれも余生の一頁

太陽が好き日の丸の丸が好き

日に一度花と話をしてごらん

願うこと何も無くてもお賽銭

階段の向こうはいつも火の車

コンバクト開けば勝負ついていた

耳たぶの奥にひらめくものをみた

霧晴れて少し演技がうまくなり

温度差があつてバズルが解けません

宇部市 平田 実男

自責点を他人のせいにする総理

角隠ししても隠せぬお腹の子

粗大ゴミより厄介な元議員

体より先に財布がダイエツト

私のサブリメントは五七五

東かがわ市 伊勢 八重子

小細工をするから余計ボロが出る

敗戦忌語り継がれる修羅の道

失言で大事な椅子をすべり落ち

触れ合つて初めて知った人間味

老いたとて心に元氣持ち続け

東かがわ市 原 賢

身の丈で暮らせば風が凪いでくる

旅カバンひとつ呑気な無人駅

口出さず控え目で居て恐れられ

脇役も先に楽しい夢がある

福の神と仲良くなれたことがない

東かがわ市 神保坊太郎

松山市 高橋宏臣

巡り来し鬼も哭いてる原爆忌

四面楚歌鬼が手を出す口を出す

一人だと暑いと言わぬこの暑さ

影法師まで置去りにしたくなる

平成を洗えば浮いて出る昭和

東かがわ市 清川玲子

まだ若い若いと思ひ生きていく

自転車も犬も乗ってる渡し舟

山頭火も乗っただろうか島の舟

笑顔だけはいつも絶やさず持つて居る

深酒をするそれなりのワケがある

東かがわ市 川崎ひかり

今更に亡母の慈愛が身に沁みる

大声で泣けたらどんなに楽だろう

洋皿の出番が多くなる同居

ライフライン自由に使えてる平和

蛇口から水ほとばしる有難さ

東かがわ市 成重放任

使わない介護保険がまた値上げ

人情の厚さに絆され涙ぐみ

ハワイハワイ今はモンゴル角力界

美容院出る老妻に惚れ直し

細腕の苦勞がやっと実を結び

名演技背後に暗転するドラマ

しなやかに生きて強気に蓋をする

引き止めてくれるのを待つ後ろ髪

にぎりこぶしゆっくり開く霧の中

かけ抜けるつもり風の風と契り合う

松山市 宮尾みのり

魅力ある人にしていた久し振り

うつらうつらは解脱の境地かもしれず

風潮にはじき飛ばされそうモラル

偶然は無い必然と神の声

また元の自分の舌になるレシビ

西予市 黒田茂代

中身より返って欲しい皮財布

誇れること無いけど庭にいつも花

ツアー料金に見合うた宿に着く

脳トレにこの頃クイズ解いている

一度歪むとなかなか元に戻れない

大洲市 中居善信

妻の寝息がこの頃荒くなってきた

旗日にはちゃんと日の丸揚げている

おとうとが泣いてるそんなガン告知

惜しまずに愛嬌撒いて生きている

力にはなれぬ相槌打っている

高知市 小川 てるみ

物音を消して真昼の蟬時雨
遺伝子のせいばかりではない短気
無頓着な人で善意が届かない
到来の鮎でコップの上機嫌
酷暑日のスーパ―長居して帰る

高知県 小澤 幸泉

歩くことただそれだけの血糖値
パソコンに詰めたいのちの青春譜
自分史の隅に思い出詰め直す
彼岸花ただ美しく哀しすぎ
倅せが伸びる寿命に追いつけず

高知県 赤川 菊野

憧れの人がいるからがんばれる
きつと来る明日を信じて米を研ぐ
人生はあつと言う間の初舞台
温暖化今に地球がサウナ風呂
賞味期限切れた女にある魅力

唐津市 山口 高明

核廃の音が空しい平和像
支援した金で開発核弾頭
火遊びの少女が鬼の子を孕む
狼に成れぬおとこが物足りず
お隣は七男四女まだ産む気

唐津市 樋口 輝夫

社保庁に真面目な汗が怒ってる
冷や汗がどっと吹き出た人違い
自民党想定外の敗けいくさ
アンコール無いが総理をやると言う
しょうがない大臣選んだのもわたし

唐津市 宗 水笑

ボランティアまだ善人が大多数
お客にはうなぎかお寿司日本人
味噌汁が旨いまだまだいけそうだ
侘び寂びを削除してゆくＩＴ化
足腰の老化ヨイシヨで始動する

唐津市 坂本 蜂朗

スパルタの反動息子は甘いパバ
通信簿そつと開いてVサイン
どうせ駄目ならと書いてる絵馬の無理
ファッションショー見上げる男の顔を見る
ボランティア人の環結ぶ玉の汗

唐津市 井上 勝視

脚腰に合わせて自我の傘たたむ
浅い瀬で生きる外なし苦勞性
焦るまい俺には俺の道がある
弁解の自分にひどい嫌悪感
納得のためにソロバン入れてみる

唐津市 市丸晴翠

シドニー 坂上のり子

営業マン辛抱の二字握りしめ
村芝居父の女形にアンコール
残されて独り施設に居る長寿
脚腰の痛みは神に預けます
花マルを自分につけて今日を終え

熊本市 永田俊子

縁側に座布団二つある平和
仕方がないと何度も言える幸せ
預金ばかりお礼も言わず吞む器械
握手していて温度差の風を読む
本当の心知りたい裏表紙

熊本県 高野宵草

ケイタイを持たぬ不便でフリーの身
パンドラの箱開けさせぬ護憲する
スポーツが解かす日本の眉間皺
愚痴する器仏間の亡母が待つ
物売り車選挙の声と入れ代る

熊本県 岩切康子

病む友の愚痴永々と聞いている
顔優し終の別れに安堵する
検診を重視している歳節目
検診の結果を胸に旅仕度
告知され来月OPEに覚悟する

美しい国たわ言で作れない
見守られている丈で子はよく育つ
御先祖とお布施包んでお付き合
被爆の時を語るあなたの穏やかさ
生き物を食うわたくしが嫌になる

砂川市 大橋政良

自画像の看板を出す現在地
足止めてウイंकしてる水たまり
傘ひらくばらばら落ちる笑い声
ぬるま湯で練り上げてゆく悪だくみ
サイコロのどの目が出ても運の尽き

黒石市 佐藤古拙

ひと月で健康器具の置きどころ
金釘流どっかり家系図にすわる
帰省して浦島太郎の貌に会う
ピカドンをねじれの位置で語り出す
市になってまた遠くなる捨てた村

黒石市 相馬一花

体力も気力もあると自己暗示
妖艶にフラを続ける姥桜
餅肌の悩みを知らぬ紫外線
絶対に忘れることがない悪夢
北国に降雨を祈るあま蛙

十和田市 阿部 進

弘前市 今 愁 女

普段着の素顔美し里の母

富士山は命はぐくむ大自然

夢を追いつけて古希の坂のぼる

おとろえた背は見せたくない子等に

浴衣きてのんびりとのむ屋台酒

平川市 小 寺 花 峯

重箱の隅で幸せへばり着く

決断の出来ぬ柳は風に揺れ

どっちにも味方はしないヤジロベエ

花時計いつまで待つかわらぬ

どくだみを飲んだら知った腹の虫

弘前市 福 士 慕 情

美しい国で貧しい蟻の列

助走だけ繰り返してゐる脛かじり

飲むお金趣味のお金も湧いて出る

悪友の絆深めるはしこ酒

粗品ですと立派な土産持つてくる

弘前市 高 橋 岳 水

返せない恩を数えて寝付かれず

今日の日を反芻せよと夕焼ける

訳ありの書類を匿す貸し金庫

どう打つてみてもくの字に曲る釘

中流の家計にしのび寄る格差

立秋からほんとの夏がやってきた

よもやの雨人も田んぼも蘇る

蟪蛄のときには拝む真似もする

蓑虫や幼虫からの自立心

リセットボタン押しても少し生きてみる

弘前市 櫻 庭 順 風

大寒の雪少なくて眠れない

桜前線予想的中せぬ津軽

八十八夜過ぎても寒い播種のうつ

梅雨最中真夏日なんて危惧募る

大暑でも五月下旬という気候

弘前市 岡 本 花 匠

七十年亡母の慈愛は千の風

寺鐘聴き今朝の決断まっしぐら

食育の朝は米飯健やかに

荒療治快便の貌取り戻す

暖冬で農夫の懸念図に当たり

弘前市 須 郷 井 蛙

コンビニが深夜の太陽照りつける

いつも留守祖父の元気なカレンダー

石油危機迫っていますエタノール

旅行から帰り雑草待っている

自給率どこへ行ったか不整脈

さいたま市 星野 育子

七人の敵が居たから頑張れた
衣食住足りてはいるがハートレス
言い過ぎのひと言悔いて乾く喉
どのチャンネルにも顔出す評論家
観光地派手な看板色のゴミ

日高市 根岸 方子

路端に朝顔並ぶ町暮し
安売りの中国産で諦める
ダイケアで一日過すボランテニア
噛み易く食感残す介護食
薬草の話体が聞きたがる

柏市 河野 桃葉

安全を忘れ良心煮崩れる
目に見えぬ誤差が人生狂わせる
ビールごくり音符のような喉仏
メルヘンの園に誘われ認知症
療養の足が砂場を恋しがる

国分寺市 野崎 勝

休肝日今日がすすきり終れない
丁寧な言葉に刺を覗かせる
どくだみの花も可憐を主張する
深酒を諫めた友が先に逝き
超満員帰省気分を盛り上げる

柔らかい脳は食欲三歳児

八王子市 川名 洋子

美しい国にシャッター似合わない
少しずつパーツ壊れて老いの路
夏休み児らの声より蟬の声
検診で今年も小さい丸もらう

武蔵野市 亀井 円女

通訳か女医になりたい次の世は
孫十人彼氏彼女が出来たらし
特売のチラシ横目に車椅子
孫曾孫より犬がよろしいこれ内緒
亡夫は広島私阪神よう揉めた

東京都 岸野 あやめ

御要心命取りともなる段差
ようやくに痴漢と縁の切れた年齢
金だけの損なら埋める日も来るさ
地下鉄でせめてレディのふりをする
嘘嫌いわたし黙って席はずす

東京都 長谷川 康子

老人が前に立とうがダベる娘ら
愛敬で済まない度忘れのひどさ
ご主人とメタボのベツトいい勝負
乱れ髪傘に隠してすれ違い
遠い夏ノーゼンカズラあかく燃え

東京都 小川 賀世子

富山市 島 ひかる

一周忌あの日もカンナ燃えていた
傷癒す時間たつぷりかけて見る

聞き流す話ばかりで痒い耳

カラオケでリフレッシュなんと安上がり

監視カメラがにらむ屋敷町の散歩

東京都 清原 悦子

庭先に秋訪れる日は間近

似顔絵が個性豊かになっていく

味噌汁ができて家族を呼び起こす

流星がまるで涙のように落ち

いざという時は頼りになる絆

横浜市 菊地 政勝

衰えた分だけ妻に寄り掛かる

手を組まれ人目はばかりフルムーン

思い出を辿り老化を加速させ

雑学も入れて話題をふくらます

大臣の舌禍憂える常識度

横浜市 小野 旬多留

朝顔が咲いたゴールの良い笑顔

出るほこりすぐ対処せよ五輪まで

頃合いを熟知している子の電話

横綱に武士道の矢突きささる

被災地に背広で入る好奇心

山小屋で抜け出して見る星月夜
恋を詠むおんなの奥にある素顔
五線譜に生きた証を組み立てる
心配な人が居るから生きられる
機関車の頃想い出す無人駅

可児市 鶴留 百合

遂に來た富士山頂のご来光

天空の登山に耐えた足をほめ

今年また届いた花に夏を知り

来てほしくない台風の当たり年

引き返す決意に迷う黒い雲

可児市 板山 まみ子

酒少しあつて甘露な旅の夜

猛暑日も秋は間近な虫の声

投票を頼む頭はよく下がる

土用丑中国産はやめとこか

手の内はわかっています下手な嘘

静岡県 藺田 獏 杏

梅雨晴れて棚田ころがる青い風

髪も染めストレスを脱ぎ風青し

転んだり起きたり靴はまだ元氣

美しい国にはりつくイージス艦

写経して急に悟った顔になる

犬山市 吉田 幸子

愛知県 早川 遯行

気配りも目配りもなく自己主張
被災地の汗と涙へ月の暈

逆らわずブナは命を育ててる

まだ海馬縮んでないと医師が言う

贅沢な馳走割引券が活き

犬山市 金子 美千代

汗かいてみるとニートへハッパかけ

ルビー婚男は未だ謎である

シンブルがいいと料理のやる気失せ

カマキリに助っ人頼む虫退治

夕飯を勧めお帰り願う客

犬山市 関本 かつ子

人影のない本堂にせみの声

くしゃみだけ聞え帰省もない近所

品格を蹴って横綱うなだれる

ほおずきの赤に読経も盆の入り

筆圧も強く投票する怒り

尾張旭市 三浦 きぬ

平均寿命越えて生かされ侘しい身

教え子の絵手紙定期便で来る

世界旅行テレビで済ませ逝くことに

大洋に散骨頼み逝くことに

眼をとじて来し方辿る侘しい夜

舌を噛むメタボリックシンドローム
寒さには弱い暑さにも弱い

蚊に食われこんな腹立つことはない

ガソリンも腹も満タンいざ木曽路

携帯は無くても誰か持っている

京都市 高島 啓子

話しかけるとにんげんはおもしろい

万華鏡獅子座流星群が見え

あわだち草自然淘汰が減っている

どんと腰下ろされからだ浮きあがる

男性に合わせた網棚の高さ

京都市 榊本 宏子

遊び好き友にしてから遊び癖

携帯に囲まれひとりお茶を飲む

社内報に載らぬ秘密はたんとある

雑学をいっぱい持って聞き上手

カタカナに囲まれ肩身せまい菊

京都市 西村 益子

太陽の匂いほかほかバスタオル

温度差を感じる定退後の夫

疲れたらアンテナちよつと曲げてみる

大股でスタスタ歩く人が好き

五十歳まだママママと言うたはる

京都市 三宅満子

千の風遺影の周り吹き渡る
一筆箋五枚も書いて老親へ
少子化などどこ吹く風と蟬しぐれ
切り売りの西瓜ボンボン叩けない
ドクターの前で血圧上がる妻

亀岡市 井上森生

遺伝子に感謝を込めて墓参り
私の使命果たして神の意図
それぞれに皆背負うべきものがある
取り返しの付かぬ歳月などはない
人生の下流は好きに楽に漕ぐ

長岡京市 山田葉子

濁点がちよつと道草しろと言う
陽を浴びる隣の屋根が眩しくて
背くまでほつといたのも少し罪
漬物でさっぱり流す朝の膳
朝顔の垣根になごむ散歩道

大阪市 前 たもつ

誰よりも自慢のできる律義者
追い上げる虎の魅力に涙する
クリスチャンの妻に天国聞いてみる
葬式で会う弟も歳をとり
治癒力を堂々と言う医者えらい

大阪市 神夏磯典子

海底の石よ八月十五日
熱帯夜ひとりぼっちのお月様
苦瓜を毎日嫁に奨められ
夕方の市場で欲が深くなる
救急もコンビニもあり夜も安心

大阪市 谷口 義

にんげんの端くれとして手を洗う
にんげんに以下同文はないだろう
にんげんだから呼ばれるとハイと言っ
るいるいと吊皮持っているいのち
万華鏡幼馴染のお葬式

大阪市 川端 一歩

太陽も沈む頃には優しなり
迷うたら母だったらと考える
幸福の二重顎して貧乏性
金貯める人はやっぱり使わない
物忘れとたたかうメモをそこら中

大阪市 古今堂 蕉子

土産店まわるノルマのバス旅行
マニキュアがなくて子育て面白
優先席自然体にて座れてる
起こすまでいつも起きないうちの妻
鈍いからあんさんの妻やってます

大阪市 岩崎公誠

齒がゆいが路面電車に乗ってみる
爆笑の繁昌亭でリフレッシュ
年金の半分を待つ妻の計
デジタル化筆順知らぬ子が育ち
談合に敵も味方も泥まみれ

大阪市 川久保睦子

三叉路で決断の靴投げている
雨粒が集まり大きな虹になる
この坂を越えたらいつばい遊びたい
欠点をさがせば私いなくなる
お互いに受話器置く音待っている

大阪市 鶴田遠野

今日だけは笑っていたい誕生日
五ツ星の愛だと思ふ五十年
清算は還暦までに済ませとく
削除してハートに残す恋メール
原爆忌ちちの手帖に手を合わせ

大阪市 小泉ひさ乃

終電車一度も乗ったことがない
心地よい言葉に自分見失う
親に似る子も似ない子も持つ取柄
待合室病人らしくなってくる
住みなれた我が家故郷遠くする

大阪市 奥村五月

車椅子乗ってる人が威張ってる
頑張ると言ってもできぬ金儲け
社の愚痴は妻に聞かさぬコップ酒
米と酒地震名物おらが故郷
給食が無くて忙しい夏休み

大阪市 川原章久

せい一杯やったが見ての通りです
酔う女酒の肴になる男
コーヒーとお食事だけの淡い恋
近頃はとんと聞かれぬ河内弁
柔らかく平仮名で書くラブレター

大阪市 福岡末吉

人の世の定め自己とのせめぎ合い
床し妻見えぬところで汗をする
感情を顕に我の不甲斐なさ
京雅ふと立ち止まる老舗宿
やり遂げてぬける青空しかと見る

大阪市 熊代菜月

ハードからソフトに替える飲みくらべ
言いなりと見せて夫の操縦法
絹こしのお豆腐よりも孫の肌
鬼の面はずして喜寿の祝酒
世も平和猫もイビキをかいている

大阪市 小糸 昭子

膝や腰明日の天気がよくわかり
同志だけ集めて総理椅子守る
くるくると変る大臣達の発言
話す人の言葉態度で本音見え
コムスンが出てきて介護の品落す

大阪市 津守 なぎさ

喜寿の宴私主役に気がつかず
台風に馴らされていた那覇の友
大型のテレビが威張る狭い部屋
忘られたサンセベリアに出た新芽
もの忘れ夜中に探す大掃除

大阪市 松尾 柳右子

朝ごはん済んでばちばち昼仕度
喜寿過ぎて薬の種類ふえて来た
宴会の女性テーブル減る料理
修繕はもっぱら器用な父さんに
孫が来る大きなスイカ待っている

大阪市 森田 明子

免許証人柄までは保証せず
ひつこさと粘りの違い見誤る
酸欠の金魚のように炎天下
ラッキーカード握ったままで黄昏れる
人生を語るのは野暮今日の月

大阪市 井丸 昌紀

悩みなど無いと思われ丸い顔
口当たり良いがじわじわ酔わされる
止まり木の端でいつもの酒と愚痴
あみだくじ端ばかり引く気の弱さ
天守閣高層ビルの包囲網

大阪市 池上 清治

本日は一人ですかと冷やかされ
ご法度の鰻こつそり食べている
覚悟していた台風が逸れてくれ
新夫婦夢とリスクが待ち受ける
今のうちですと自然の旅を売り

大阪市 西川 更紗

暑気当たり通帳だけが痩せ細り
幸不幸自分が決める胸の内
気づかない振りして心病んでいる
一花を咲かせてほしい子はニート
真つ当に生きてストレス溜り出す

大阪市 小谷 集一

戦いの間合い計っている無口
孫の手に孫の名前を書いておく
アルバムヘタイムスリップして楽し
神様のデザインでした脚線美
最後まで望みを捨てぬロスタイム

大阪市 渡部 さと美

アベックの浴衣平和な水都祭
皺はしわ楽しんでます若づくり
国会のドタバタ台風がつづく
鳴き切って思い遂げたと蟬果てる
日本も偽装食品根が深い

大阪市 近藤 正

核の傘河童神話の如きもの
原発が震え上がった地震の巢
足止めがいつまで効くか消費税
九条に生きる彬の志
月冴えて空を見上げるホームレス

大阪市 伊藤 博仁

二歳でもいつちようまえなバスポート
謹慎がずたずたにした強い綱
またかいな手ぐすねひいて接骨医
失札なおしっこかけて蟬の奴
鎖骨折る飲めばチャリでも乗りません

大阪市 板東 倫子

大正の気骨墓まで持つて行く
個人情報ひとり歩きをして困る
老老介護頼るほかない赤い糸
ムカついてキレたらしいね朝青龍
究極の馳走味噌汁白ごはん

大阪市 升成 好

いい方にいいほうにとり楽天家
まだ海がたつぷり残る鰯の目
予定では楽隠居するはずだった
惚けテスト思い当りのことばかり
許す気になると声まで温かい

大阪市 榎本 舞夢

リハビリで歩けるようになりました
暗やみで光見つめて目の検査
夏祭り老人力で盛り上がり
役受けて活気づいてるお父さん
御世辞とは解っていても舞い上がる

大阪市 岩崎 玲子

還暦の喜の旅子らのプレゼント
シャンパンの音で絆の拍手わく
純粹な気持生まれる木立ち抜け
野鳥から自由な心おすそ分け
家族旅後日に笑うエピソード

大阪市 津村 志華子

お節介人の心配までしてる
何事も比べなければ気がすまぬ
法律の賞罰ナシで来て傘寿
空しさは心の裏を知ったとき
お隣はベンツ私はベダル踏む

大阪市 大川 桃花

大阪市 榎 本 日の出

花氷の花になりたい熱帯夜
開店は午後からにする老いふたり
坂道の越え方論す年の功
星の降る里にも造る四車線
玉乗りが下手なビエロの泣き笑い

大阪市 岡 本 久 峰

逆転のドラマ自公が宙に舞う
負けて勝つ奥の手もあり総理殿
白蛇が這って繁昌する店舗
チラシ配りにそっぽ向かれています落ち目
そこそこに健康守る腹八分

大阪市 中 村 れんげ

MRIお腹の内緒見透かされ
もう少し呼ぶのを待って今青春
食べるより花が好きよと茄子を植え
声美人コーラスの友九十五
広島の夏を語ろう千羽鶴

大阪市 中 村 叡 子

叔母が逝く子と孫だけで事後通知
八月は辛い話が多過ぎる
痛ましい生きてるような蟬骸
故里に待つ人がいて盆帰省
風鈴も猛暑にだれて鳴りもせず

ハイハイとええ返事され忘れられ
あばら家のとり得満月寝て見れる
老人を国の宝と言わせたい
愛される人になるにも知恵がいり
鏡にはレッドカードの肥満体

池田市 栗 田 久 子

紅葉の名所は新緑も映える
かんできで焼いた秋刀魚はうならせる
残された日々を楽しみむしやれた老い
こだわりの一つを除きみな許す
憎むのは罪でだあれも悪くない

茨木市 藤 井 正 雄

小旅行妻のセンスを着せられる
紅一点はずし割り勘集められ
雰囲気が好きで下戸だが三次会
ライバルもやる気双方目が光る
テロに飢餓青い地球が抱く悩み

和泉市 西 岡 洛 醉

鼻唄に元気が洩れる仕舞風呂
負け組も氣勢を上げる街の隅
雑学の続いて八十路坂登る
美しく生きて余生を愛おしむ
一日の歴史が明けるカレンダー

和泉市 横山捷也

手引き書の通りに行かぬ借り農園

化粧する妻が口笛吹いている

深追いをしすぎて出口狭くなる

つじつまの合わぬ夢見て悩む朝

脱ぎすてたつものの過去がじやまをする

泉佐野市 山本蛙城

あらこんな番組あつた熱帯夜

脳トレは昨日一昨日食べたもの

老の字を入れた句なんて大嫌い

案ずるなふわりとコウノトリ巢立ち

オカリナの宗次郎聞く苛立つ日

大阪狭山市 矢野梓

めばるの目見るたび思い出す恩師

耳鳴りと共に始まる蟬の声

戦争の話帰省の孫とする

孫の世も平和であれと終戦忌

卒寿なおボーチにルージュ忘れてず

交野市 森本弘風

核は悪無差別空襲もつと悪

六甲を越えたグラマン機銃撃つ

焼け跡で肥桶担ぐ十二歳

玉音を余所のお宅で正座して

揚げパンに敗戦を知る闇市場

交野市 田岡九好

ウォーキング思い立ったら雨が降り

お詫びして起立礼してはい終り

忍ぶれど色に出にけり留守居酒

日本で首相の味方ばく一人

太極拳みなそれぞれに下手である

交野市 山川日出子

カーテンの代りにゴーヤ植えました

故郷の川の鰻は今いずこ

ケイタイがすぐに写した産後の子

山歩き道に迷って夜を明かす

偽食品たちごっこ中国製

河内長野市 村上直樹

ぼろぼろの心に沁みるホーホケキョ

ごめんごめん詫びるが勝ちのマイペース

限りなき未来を語る白い画布

五感みな鈍い心眼冴えてくる

ぼつねんとただぼつねんと雨の中

河内長野市 山岡富美子

人の世はあつという間の万華鏡

靴よりも下駄を履きたいクールビズ

バリアフリー視野にぼつぼつ模様替え

モノクロの青春がある名画館

不用意な口が火の粉をかき混ぜる

河内長野市 井上喜醉

魂を抜いて大仏おみぬぐい
女房に相手にされぬ二日酔
戦中も今でも好きなコッペパン
小遣いが続くと妻が不思議がり
死のロード今年の虎は武者ぶるい

河内長野市 水谷正子

社会党昔天下を取ったけど
蛸がうるさく鳴いて秋を呼ぶ
貯金する根性嬉しタイガース
認知症校長はんもそれらしい
甲子園決勝戦に血が騒ぐ

河内長野市 坂上淳司

転けたのが転機視線を下げてみる
眼を病んでよく見え出した人の情
インテリの九官鳥がよく喋る
播き時を違えうら生り育てて
叔母の名はとめ乃子沢山の時代

河内長野市 植村喜代

七月の空思い出す焼夷弾（焼死友数人）
迷惑を掛けても理屈付けるひと
喋る人あって元気をもらってる
沢山のセレブもあって国貧乏
老いの身はぐうっと眠って短時間

岸和田市 岩佐ダン吉

多数派に入り萎んだ僕がいる
失敗談中に手柄をちりばめる
几帳面な男の電池切れている
九条を守る鉛筆尖らせる
理不尽な言葉九条浴びている

岸和田市 雪本珠子

距離おいて見れば互いの良さわかり
ときめきの心が若さ作りだす
湯豆腐でひっそり過ごす京の宿
移りゆく季節にわたし育てられ
句作りの言葉剪定しています

岸和田市 井伊東吉

青春へ回帰促がす雲の峰
盆帰り口数減って孫成長
苛立ちを覚える古希はまだ若い
脚光を浴びる軽四キャンプカー
加工食安全性に悩む主婦

岸和田市 小島笑司

公私とも忙し過ぎて死ぬ間ない
朝青龍プロレスの方似合いそう
雷が馳せ参じます臍ルック
人間の愛は一番エゴイズム
そのうちに爺ちゃんポスト出来るかも

岸和田市 原

さよ子

堺市 奥

時 雄

遅刻した汗矢印が目につかず

溜息をついて見とれるニューモード

団体にまぎれ説明聞いている

三歳へママは月謝を出したがる

原爆忌語りつづける人も老い

岸和田市 堤

檜 代

性分やまたもたげるお節介

百均で時を忘れる好奇心

腹の立つことも押える気の弱さ

泣きごとは言わないことにしています

まあいいわ思い出すまで待つことに

岸和田市

土 橋 房 枝

残り時間女でいよう輝いて

迷惑をかけられてから知った仲

ブランドのうつわ値を聞きそつと置く

もったいない口癖にして子に伝え

ゆらゆらと私を揺らす千の風

岸和田市

森 元 ふみよ

夏が去り孫も帰って静かすぎ

嫁が言う一郎さんは億稼ぐ

ちよい悪が酒の肴に寄って来る

夏休み三度三度をようたべる

蟬の声子供の吠え声大合奏

順に注ぐ社長を正座して待機

お互いに注いで欲しくて向かい合う

のんべえは空のコップを見逃さず

息つまる客が帰って力抜け

新入りがお流れなどと猪口才な

堺市 宮 本 かりん

何事もすぐに信じる素直な目

ばあちゃんがうつとり過去を見ています

ストレスをいっぱい溜めている笑顔

腹の中見えないままで押し黙る

とうさんの耳と口には蓋がある

堺市 源 田 八千代

大会の名物になるフラダンス

ドア開けた所が蟬のユートピア

政治家の驕りにお灸据えています

コテージの予約溢れる夏休み

帰省客へ猛暑の中の大掃除

堺市 西 村 りつえ

ひまわりも裏で吐息の炎天下

美しさも怖さも自然見せてくれ

父の地図はみ出して行く次男坊

朝と晩南無阿弥陀仏だけとなえ

死ぬよりも長患いになる怖さ

堺市加島由一

スーパ一の寿司半額を待つ散歩
節目節目で子に見せておく夫婦愛
さては読んだか机の奥の日記帳
仕事なら休む雨だが釣り日和
夫婦また二人になった どうしよう

堺市近藤豊子

女生徒のダンスはじまる万華鏡
七いろの北斗七星 万華鏡
笑顔ぶかぶか被災地のテント風呂
にんげんも蛙も田んぼなつかしむ
避難所にてひとときひとり便所の灯

堺市石堂潤子

電話掛けながら電話の塵払う
藍染めのブラウス七万誰が買う
嫌な人わたしもきつといやな人
雑穀と粗食で元気もろてます
ブツンと未だ使えます糸切り歯

堺市矢倉五月

婆ちゃんも年金分割調べ出す
無理しなや言われて怠け心出る
甘い点つけられたなと身構える
越えぬ杵やはり気になる嫁と姑
三人も兎乗せママチャリ曲芸師

堺市和田つづや

愛という絆にもある震度六
葛藤が生んだ明日への道しるべ
生きたのと生かされるとが判りだし
よく眠りのちに油さしてやる
朽ちていた出世払いにきためし屋

堺市齋藤さくら

にがりのイボ夏バテに効きそうだ
持ち帰るメロン目当てのバスツアー
お土産の蕎麦を待つてのお父さん
バイキング食欲だけは衰えず
一斉に鳴きやむ蟬を不思議がり

堺市村上玄也

酔っているらしい臭いのする電話
夏になると冬がいいなと思いだす
エアコンの温度差がある僕と妻
根掘り葉掘り聞くと機嫌の悪い医者
昼食をしながら晩は何します

四條畷市吉岡修

窓いっぱい風の便りに開けてある
芋版のマニフェストだなすぐ消える
下戸ひとり耳ほじくって聞いている
やすやすと金太郎飴にはならぬ
土壇場で息切れがするもうあかん

八月の空は広島長崎へ

吹田市 木下 敏子

吹田市 須磨 活恵

満ち足りた顔で出てくる美容院
自信ない足で踊りの輪にはいる
いい年をして踊ってるおつきあい
ゴミ袋提げた夫を見直そう

吹田市 瀬戸 まさよ

お若いと言われシニアは磨きます
長生きのコツは孤独に勝つ力
三食にパン麵米のバラエティー
真つ先にウニを注文ボーナス日
隠されるよりも情報過多が増し

吹田市 早川 清生

まだ死ぬ旅の予定も二三ある
妻がまだ女に見えぬのに退院
モラルフリー大阪の住みやすさ
千万の挫折優勝する一校
宗教校やはり相手のミス歓喜

吹田市 太田 昭

やる気無い自分の影に撒飛ばす
未だ生きるための電池を買いにゆく
子の目線で語る言葉を飾らない
抜け道を探し六法読みまくる
主張する野草に水を汲んでやる

怒ってるふりをしているのもんだ
いつの世も絶えぬ政治と金のこと
美しい国ポロポロにされていく
ちさい義理促すように蟬が啼く
有難や見えて聞こえて声も出る

吹田市 大谷 篤子

脇役に徹すわたしの流儀です
骨太で動く五体に感謝する
ジャケットのれもんの染みは消えぬまま
じつくりと考えること嫌いな子
筋書きの通りに育ち反抗期

吹田市 野下 之男

先生も有為転変が身に沁みる
言わぬだけ胸の内ではそうれ見ろ
愛情を測る機械は無いものか
久し振る妻の短パン眩しいな
悲しみを慰めている千の風

吹田市 穴吹 尚士

肩書きが消えて凡人だと知れる
上手ではないがお義理のアンコール
差しかけた傘を美人に断われ
ワーキングプアと勝手に名を付ける
神さまにそろそろ近い認知症

吹田市 山本 希久子

運動不足解消十月の予定表

シルバー席ひとつふたと鬱溜まる

与えては奪ういじわるな天だ

今日一日をすべて捧げて老母の側

鈍感力噂の風をやり過ごす

高槻市 指宿 千枝子

携帯はオフにしている日曜日

時時は景気つけですイクラドン

なるようになるで心配止めにする

いつ時を無心になれる庭いじり

風まかせのタンポポと旅しています

高槻市 佐甲 昭二

退屈と思われ電話よくかかる

動揺を読まれぬようにサン格拉斯

勘違いしたまま絆細くなり

前書に囚われて買う本の虫

相性がよくてばろ靴捨て切れず

高槻市 富田 美義

青蛙ボクの鉄砲届く距離

ミス・チョンボ葉になつて甦る

肌ばかり磨いて心ほっとかれ

咳払い一つで魔法かけている

鮮やかも過ぎれば人は遠くなり

(高)高槻市 瀧本 きよし

仏壇の父と吸い込む吟醸酒

治りますきつと治ると暗示かけ

点滴が治る治ると落ち続け

病院の午後九時ライト消えて闇

そこそこでは妥協できない立呑み屋

高槻市 乙倉 武史

早起きの蟬に過酷なスケジュール

炎天下青春燃やす甲子園

勝敗と別感激のドラマ渦

品格を問う横綱のていたらく

追う夢があるうち惚けちゃいられない

高槻市 大崎 侑子

鈍なので目先の利には迷わない

冗談と分かりながらも乗せられて

必要な電波以外は逃れたい

発信機背負って熊が里に出る

ダイエット気にしながらのつまみ食い

高槻市 西谷 治三郎

よばよばがとぼとぼ歩く過疎の町

七三に分けたことなく禿となる

安定感あるのは二階の便座だけ

今日よりも若い日はない歩調とる

健診後大きな顔で酒を飲む

高槻市 峯村 勲 弘

高槻市 執行 稲子

暑いから寒いからとて家の中
出不精もサマージャンボは買いに出る
昼下り呼吸ためらうこの猛暑
燃える紅元氣振りまく猿滑
美術には疎いがゴッホみておこう

高槻市 傍島 克治

過去知りすぎた古い鏡を取り替える
食べ放題オバチャンファイト發揮する
何気ない素振りで探り入れる母
腹きめたらし友が真実語り出す
月下美人賞でる人なく咲き終える

高槻市 井上 照子

占いは晩年よろし言ったのに
八十路坂きびしい日々を無に出来ぬ
婿定年暮らしの道をさがさねば
辛い検査受けても生きたいの私
幼なじみ六十年振りの仲直り

高槻市 左右田 泰雄

雨続き夢は畑を馳けめぐる
朝刊は先ず広告に目を通す
雨上りへちまのような胡瓜とり
無人駅車掌がとてせわしそ
う
筆ペンも老眼鏡も百均で

穴あきのジーンズ若さの膝笑う
視野検査賑やか蚊が飛ぶ星も飛ぶ
ちゃっかりは母親譲りそっけない
泣くことは止めると決めたバースデイ
故里のがばいばあちゃんの好い話

高槻市 生田 義一

子を増やせ産科不足のミスマツチ
歩こう会杖つく友にはげまされ
意気上がる校歌合唱フィナーレ
夏本番若虎やつと目を覚まし
あら不思議野地蔵さんの姿ない

豊中市 江見 清

大きくはなつてはならぬ苔の性
宮仕え終えて自分の時計持つ
大自然の中で懺悔をしてしまう
貧困の影をより濃くする格差
老妻へ饅頭ひとつ多く買い

豊中市 藤井 則彦

スリッパのまま役人が出す許可書
心配の種が蠢く永田町
言い訳をすらすら遅刻常習者
温暖化も核も知らない深海魚
青い目も感じ入ってる薪金

豊中市 吉田 あずき

豊中市 岸田 知香子

四コマ目何を書こうと自由です
ビッグニュース昨日の事件もう忘れ
褒めといて一本釘をさしてくる
影法師だんだん薄くなってゆく
発車ベル何故か動悸を深くする

豊中市 安藤 寿美子

森消えて地名のロマン忘れられ
謝って人間らしい顔になる
神さまにお礼を言つて寝るのです
にんげんや下剤下痢止風邪薬
ビルラッシュ狭斜の巷も立体化

豊中市 水野 黒兔

夏の雲象と鯨が昼寝する
飲むほどに弾むましゅまろ妻の酒
探検の気分で覗く子供部屋
実業と思えぬファンドしゃぼん玉
苦勞人本音はいつもかくれんぼ

豊中市 坂上 高栄

仕舞梅雨台風連れた大嵐
陸橋がさながら川の橋になり
内憂で満身創痍の自民党
身が病めば前頭葉も隙だらけ
無蓋貨車延延高度成長期

息子に頼む力仕事で五万円
息子が頼むハイ・ミシンかけ二万円
ユーモアのキャッチボールで和ませる
出歩けずテレビ湯けむり宿の膳
孫が出来元気な老いはほっとかれ

豊中市 山門 タミ

お月さん私の心お見通し
億ションにも橋の下にも人は住む
パステキおだてに乗った赤いシャツ
玄海のイカ釣る漁父の深い皺
診察券あれこれ選つて病院へ

富田林市 中井 アキ

無器用な生き方だから愛してる
ひと晩を語り尽した瓶ビール
裏表ない友がいてほっとする
表しか見ていなかった超迂闊
許される気がする靴音のリズム

富田林市 大橋 鐘造

目を閉じて闇に心を遊ばせる
控え目な素顔に魅力こぼれ落ち
夢だけを抱いて別れる臘月
誘われて財布の中身たしかめる
結ばれた頃は天使であった妻

富田林市 片岡 智恵子

壺から手が抜けぬまだまだ欲がある

笑顔の面付けて保っている平和

便利さが人の交流奪い去り

山びこが未だかえらない地震村

勘違いと偶然金婚への道

寝屋川市 森 茜

美しく見たい景色へ距離をおく

年嵩になつたらあなたにも解る

一歩引くおしやれあなたのためたずまい

お祈りの仲間に子蜘蛛下りてくる

ぼろぼろになつてジーンズ添うてくる

寝屋川市 平松 かすみ

ご近所に春ちゃん夏ちゃん秋子ちゃん

ジャングルになつたゴーヤの頼もしさ

五十年連れて何んでも半分個

思ひ出は草履で駆けた丸木橋

竹筒で野苺ジュース出来ました

寝屋川市 太田 とし子

若者の世代みつめる忠魂碑

地獄から仏出てきた露天風呂

型枠の中でコンニャク震えてる

迎え火を焚いて詣でる空の墓

石仏の胸にとび込む赤とんぼ

寝屋川市 富山 ルイ子

かけがえのない財産家族みな元氣

偽善者の仮面死ぬまで外せない

甘く見ないで根性しかと持つ

頸腰の痛み納得していない

銭別を渡して追加する土産

寝屋川市 江口 度

喫煙室へ大きな灰皿そなえとく

靴磨き出先を向けて置いておく

カレンダーに出先赤で書いておく

前の夜にカバンの中を確かめる

宿題はチャンと書いとく句帖には

羽曳野市 徳山 みつこ

カメラにはいい顔だけを見せる癖

虎の子で国債なんぞよう買わん

朗報がひよいと弾いた休肝日

世界遺産饅頭せんべいすぐ出来る

原発のリスク鯰に教えられ

羽曳野市 吉川 寿美

無駄骨になるなと力こめ署名

修飾語溢れる街で転びぐせ

蛇口から出るのは悔いと乱

少し汚れた足袋にわたしの自負がある

嘘少し混ぜて話を盛り上げる

羽曳野市 三好 專平

本当の恐怖となったコースター
だますのがうまい人ほど出世をし
ものさしの長い人ほどバカにされ
つううんと枕に山葵江戸落語
若いねと言われるほどの歳になり

羽曳野市 安芸田 泰子

我まが通つて深くなる孤独
出世払い貸したお金に夢がある
メモ帳に書くほど溜る願いごと
日本しか知らぬ私の旅カバン
しくじったことは書かない日記帳

羽曳野市 酒井 一壺

条件が叶いすぎだと断られ
長生きの秘訣聞かれたことはない
どう見ても人の長たる器ではない
笑顔してぐっと踏んばる尾髭骨
愚痴言わぬ夫になつてつまらない

東大阪市 北村 賢子

麦飯よりもかすみを食えと言う政治
疑うより信じて心満たされる
いくらでも騒いでいいよ蟬しぐれ
年金の枠で喘いでいる余生
媚売れず世間を狭く生きている

東大阪市 笠井 欣子

腕組んで夫と歩くビルの森
延びのびの返事書かせる青い空
のど飴とセットにしてる経袋
寿し桶はきれいに洗い返します
茶柱が立つてくじ買う最終日

東大阪市 米田 水昇

記憶もれ私の脳も社保庁も
遺影ありあふれる若さ凜として
壕の外焼ける夜空は紅に
疎開地の姉妹で歌う月の道
蟬時雨玉音今も耳底に

東大阪市 佐々木 満作

母の労涙で綴る日記帳
入道雲 一雨欲しい炎天下
鈍行の車窓稲穂が頭垂れ
無口でもお経写経に余念なし
渋滞禍それでも故郷へ帰る

東大阪市 安永 春

心あるひとにところで返さねば
座布団につまずき友の松葉杖
おしゃべりな友と出会った運の尽き
ひとりでは出来ず手繋ぐボランティア
日々つなぐよいしよこらしよと茜雲

枚方市 伊達郁夫

孫来れば婆あモードの声になる

回り寿司財布が皿を数えてる

風船の萎んだ後にある虚脱

起きるのは雨が上がつてからにする

たんぼの綿毛も持っている使命

枚方市 森本節子

つゆ明けて蟬とる子等のかまびすし

人のくる気配を風の動きで知る

何年ぶり月下美人に花三つ

数時間花の香りに浸る夜

土用丑の予約は早々すませてる

枚方市 丹後屋 肇

汐騒のリズムに寝入るテント村

憂鬱の八月が来る蒼い天

美辞麗句政治の季節駆け抜ける

街路樹の蟬とバイクのせめぎ合い

同窓会端居しているいじめっこ

枚方市 寺川弘一

初恋の人が再婚した噂

人生の余分にあらず余生とは

年取って皺が無いのも恥ずかしい

貧乏くさい人に天使は寄りつかぬ

ハイチーズ別におかしいわけでない

枚方市 二宮山久

蟬ないて暑さますますかき氷

夏祭り孫は浴衣でハイポーズ

宅急便届き味わう里の味

一芸に徹しきつて趣味の道

言い訳が過ぎた女が座を外す

藤井寺市 高田美代子

大本営は嘘つきだった負けた

いい格好いつまで続くものでなし

陸海空未だ還らぬ戦友よ

選挙戦勝った負けたは何事ぞ

打って出よ川柳党は全国区

藤井寺市 若松雅枝

草叢へ蜥蜴が走る炎天下

大木になった亡夫の木槿咲く

着る機会無い晴着だが手離せぬ

病癒え雑魚寝楽しい三姉妹

捨てるのが惜しくて溜めた赤い箱

藤井寺市 太田扶美代

ときめきが欲しくて影がポーズする

ここですここです茗荷が主張する

私に一任されたブルベリー酒

踏み台にされたと思う事もある

百円シヨップで変装用グッズ

藤井寺市 中島志洋

澄んだ目に出かけた嘘を引つ込める
熱燗のお代わり欲しい秋の冷え
一票の欲しい笑顔が手を握る
大臣の指名待つてるモーニング
美しく描けば似顔画喜ばれ

藤井寺市 鴨谷瑠美子

風格のある赤ちゃんを知っている
レシートはまさかの時においておく
捨てがたい薔薇の花束逆さ吊り
上品な噂茶托に載ってくる
ご馳走になつて詮索などしない

藤井寺市 鈴木いさお

双方が少しずつ惚け惹なし
ウインクに気付かず妻に叱られる
得心がいくまで鏡離れない
じいちゃんの甘さを孫は見抜いてる
嘘だらう悔い無い人生だなんて

箕面市 広島巴子

フラダンスサンバも愉快盆踊り
炭坑の景気懐かし盆踊り
猛暑日と聞くだけで汗流れ出す
万灯のゆらめき亡父に会えそうな
アキアカネ追いつ追われつ里ぶらり

箕面市 出口セツ子

子の夢を応援できる金が無い
子の夢のために淋しさ我慢する
世話やけるうちが華です親の価値
入院の知らせに想い馳せるタイ
来年は夫婦で時間組み直す

守口市 井上桂作

故郷の名前懐かし酒を飲む
銀杏並木こかげ嬉しや夏の午後
譲られて急いで座る歳悲し
年金で誰気がねなく長生し
たくましく老いて死ねとは殺生な

八尾市 山本宏至

満天の星に抱かれて眠る海
母の愛刻みこんでる朝の菜
粘つてた理由が何か忘れてる
生きる欲わいて仕事に張りが出る
晩学が昼寝に変わる夏の午後

八尾市 生嶋ますみ

これ以上脱げぬ姿で風呂掃除
蟻の汗知らないだろうニート族
平熱に戻りご飯の味になる
傘立ての亡夫の杖がまだ喋る
ハイハイと素直で時に頼りない

八尾市 宮崎 シマ子

合併に中味変らぬ村暮し

リハビリを励ます方の肩が凝り

朝顔の元気を絵手紙で送る

酒の居場所を酒が教える妻の留守

古いぬれば便利な街に籍を置く

八尾市 高杉 千歩

執着はないがもつたないので

間違っていたのはわたし送り仮名

立ち直る勇気を倍に茄子の棘

真夏日の午後百均を散歩する

畳に椅子ベッドにも馴れ夏三たび

八尾市 村上 ミツ子

愚痴きいてくれるロボットいません

ちよっぴりの酒にもらったいい眠り

追い風がだんだんこわくなってる

過半数もう鬼の首取ったよう

コスモスの風がやすらぎつれてくる

大阪府 桑田 ゆきの

絵日記の向日葵もネともゴッホとも

手と足でリズム取ってる車椅子

はちばちと人生航路の帆を替える

父母の魂なすびの馬で送り出す

永田町大波小波国の鬱

大阪府 野田 栄呼

屋根裏を運動場にする鼠

大汗に一気冷水生き心地

古くても通じればいいダイヤルで

遠近を問わないハガキ好きになり

電源を抜く習慣を子に教え

大阪府 米澤 俣子

加熱した頭だったと悔い残る

疑うほどに深くなる嫉妬心

鈍感をおっとり型とほめておく

ワンランク下げれば自由マイライフ

奥の方で揺れているのは欲の皮

大阪府 澤田 和重

鈍感なふりして敵を作らない

意地張った分だけ味方逃げてゆく

低音で話すと秘密めいてくる

銀行の帰りバイクに身構える

どん底を這って人間取り戻す

大阪府 初山 隆盛

凜として闊歩している喜寿の夏

ひまわりにパワーを貰い湧くファイト

約束が重たく詰まる備忘録

喪に服す虚飾の喪服美しい

悠久の流れの点に浮いている

神戸市 田中 章子

小は大兼ねて小さい旅かばん
アバウトなおんな器用なのはおとこ
発車ベル走ってるのに走れない
泣いている孫の写真もアルバムに
梅干しで締めるいつもの朝ご飯

神戸市 両川 無限

こっそりと飲み込んでおく癪の種
好きなだけ食べてやせたいジャズダンス
引越したらしいこの世に籍がない
お祭りの後は静かな朝が来る
その先はカット涙をこぼすから

神戸市 山田 婦美子

錠で繋げられない距離がある
赤い糸少し緩めて生きてみる
氷山を崩すと怖いものばかり
ささやかな嘘に元気をもらう朝
風に背を押されて重い腰をあげ

神戸市 伊勢田 毅

広島菜夏の食欲助けられ
喪が明けた女がすぐに翔びたがる
原爆忌忘れはせぬと蟬時雨
政治家が風化したがるきのこ雲
視野狭くアンテナ少し高くする

神戸市 山口 光久

石塊が玉を夢みて流す汗
名利の歴史の中に酔っている
泣き虫もやんちゃも描く未来像
お点前に和菓子がそつと寄り添うて
晩酌のために昼飯抜いている

神戸市 山口 美穂

万歩計に歩け歩けと叱咤され
この顔が本人なのに保険証
若づくりシルバースhirtへ遠慮せず
鈍感力味方につけてまだ生きる
土産話はオーロラ見たと熱が入り

相生市 中塚 礎石

卵割る音もわびしい独り者
流れてる川に水鳥止まってる
禁煙を家の中まで孫が言う
八十路坂舞台に立った女振り
ここかしこ虫食い増えた日記帳

芦屋市 黒田 能子

暑い日は熱いお茶のむ暑気払い
恐ろしいニュースまたかと聞き馴れる
戦争の歴史カットはしてならぬ
持ってからだんだん重くなる荷物
アルプスの少女になってハイキング

尼崎市 春城 武庫坊

夏の陽をくつきり弾く茄子の艶
庭の蟬老いを励ますように鳴く
揺れ動く世間に耐えて生きてゆく
ひからびた頭耕す電子辞書
原爆忌鐘に合わせて蟬しぐれ

尼崎市 春城 年代

お隣に座った人も戦中派
談尽きぬは同じ時代を生きたから
脱ぎ捨てた母の温もり恋しくて
壊れ出すこの世に曾孫誕生す
蟬鳴いてせかせかせかと日が暮れる

尼崎市 林 昭三

今咲いているのは私百日紅
ゆつくりと花を眺める年になり
帰省する山山迫り川光る
案外に冷静だったのは彼女
ひとり住む団地の扉重い音

尼崎市 長浜 美籠

報告がたとえありますお迎え火
成長の手応え感じとる握手
昨日はきのう朝顔一つ咲きました
再会に恥じらいがあるかき氷
暑さから逃げ出し二人行くシネマ

尼崎市 軸丸 勝巳

思い出は歳をとらない同期会
細いけど長いつき合い真の友
節目節目を生きて米寿に手を伸ばす
加齢料があれば診察券が減る
台風の仁義関西避けてゆく

伊丹市 山崎 君子

台風一過蘇鉄の緑朝の空
一夜泊り話は夜明けまで続く
余震続く里の幸せさらつて
ちぎり絵の里寂しくて星を描く
呆けたなと思えば哀し今日のこと

川西市 西内 朋月

かき氷の幟恋しい炎天下
オンザロック片手に電話する深夜
亡妻のゴーヤチャンプルには遠し
陰口を肴に飲んでる酒場
妻逝つて一日もない休肝日

川西市 米原 雪子

産声に緊張解けて拍手する
無事出産感動の波打ち寄せる
赤ちゃんに指握られてえびす顔
パソコンにてこずり孫に助けられ
八月は昼夜を問わず野球見る

三田市 北野哲男

ケータイで居場所が判るなら持たぬ

退院し先ずへそくりを確める

失業中酒を欠かしたことはない

前立腺命の次に要る器官

予想紙と四季報睨む友見舞う

三田市 堀 正和

いい話探し新聞とばし読み

無料バス抱いて自転車漕いでいる

ブランドのTシャツだから外出着

近頃のプール僕には歩くところ

訃報欄きつとほんとの年だろう

三田市 石原 歳子

実家でも勝手に開けぬ冷蔵庫

ガサガサもツルツルの手もみな温い

寄付金は一口だけと決めている

買物物をすませ出口に迷う地下

仕草まで亡母のコピーと言われてる

姫路市 古川 奮水

盆おどりマツケンサンバ数にする

六甲の汗は有馬の湯で流す

庭掃除引受けてからギクリ腰

シヨウウインドウマネキンはもう秋だ

念押しに一言加え揉めはじめ

西宮市 西口 いわゑ

生も死も楽しく語る本と会う

日本人ゆかた姿はやはり粋

つくづくと鏡に見られうるたえる

なんとなく星と話していたい夜

簡単に許すと後々にひびく

西宮市 牧 潤 富喜子

何事ならむ頭の上をへリコプター

ひつたくり注意の辻に成り下る

蟬絶叫何を知らせているのだろう

夜の間にポストにひそと宗教誌

出来る事やつてるだけの日が過ぎる

西宮市 山本 義子

公園の静けさ子無しでもわかる

空元氣軋みの音が漏れてくる

夕焼けの丘で小粒になるわたし

玉手箱の軽さ重さよ人間は

にんげんもカマキリもまた戦好き

西宮市 緒方 美津子

金木犀ひとと咲くこと許されず

鬼灯が高くて母に詫げる盆

朝ドラにやきもちどつと蟬は啼く

ややを起さない明珍の風鈴

欲の皮剥けば私はボケそうだ

西宮市 坪井孝一

嘘つけない朝日はなんと素晴らしい
齢のせいか友がザイルを投げて来た
不得手とは絶対見せぬ自尊心
歯車が少し遊んで軋まない
一人旅駅で酒販機まず探す

西宮市 秋元てる

桑田選手ボールで勝負との悟り
ひとり住む苦と楽友の長距離電
国債の兆より怖い妻の万
何かして居ないと保たぬ鍋磨く
前向きは看板倒ればれちゃった

西宮市 亀岡哲子

また一軒馴染が転居黄昏る
丹精の庭が重荷と言う別れ
一昔震災越えた仲間たち
瓢箪と朝顔垣へ競い合い
ケイタイへ写真を詰めて旅終る

西宮市 菊池トミエ

鶴折って老女一人の原爆忌
暑い午後蟬のなきがら蟻が引く
風鈴の音色で解る空模様
風鈴のやさしい音に目が覚める
医者通い午後は昼寝ときめている

西宮市 片山忠

葬式で泣いて償いたつもり
後輩に席を取られた挫折感
戸締まりは妻の役目と決めてある
再確認ばかりしている電話口
ワンパターンばかりで男腐りそう

西宮市 井上松煙

もう帰る目配せに妻知らん顔
父の背を見ない息子の自我意識
孫が来ていつものように飛び付かれ
日日好日万事を自然体で生き
鈍なれど露な肌にはさとい

奈良市 米田恭昌

切れ者のスピーチジョーク冴えている
年金問題しばし離婚をひき延ばす
ばらの風呂まるで柩に寝るような
出張を思い出させて乗る夜汽車(東北の旅 2句)
ラッセララッセラねぶた跳人の躍動美

奈良市 天正千梢

人生は数学だよと岡潔
にせ物の葉はいやと北の国
王子焼き好きな男はたよりない
赤い爪切って育児に立ちむかう
私のえらんだ人がわるさする

檀原市 安土理恵

相剋の姑に似てくるおばんざい
ホカ弁を買ってテレビと食べている
六十余年まだにじみ出る黒い汗
賑やかにご先祖様おいでませ
たいくつで順路ときどき裏返す

檀原市 居谷真理子

暴れ川ただまっすぐに生きたくて
使命などとうに忘れた鬼瓦
地下足袋の哲学情に智を積んで
増殖の痛ごと君を抱きしめる
青い夢きっぱり捨てて喪主の席

香芝市 大内朝子

石橋を叩く男でももの足りぬ
限りなく原石の抱く可能性
誕生日来るたび母にありがとね
晩年を静かに飾るラストラブ
おおらかな夕日だったな三丁目

大和郡山市 坊農柳弘

よろめかず媚びずマイペースの月夜
香焚いて待つ人が居る星月夜
エビローグせめて月見の差し向かえ
静けさや読経しんみり萩の寺
念ずれば通ずる流れ星ひとつ

奈良県 渡辺富子

大ジョッキ泡立つ言葉溢れ出る
脳バズル前頭葉があくびする
口ポットを作った男首になり
名を伏せて届いたバラが発火する
永らえて想定外の認知症

和歌山市 福本英子

ひやかしの客と見抜いた自動ドア
ダイエット決めた日に来たモンブラン
百点で怖い約束孫とする
もてなしに困るコーヒー飲まぬ客
一瞬の不注意彼が消えている

和歌山市 松原寿子

母のほほ両手で撫でる抱くように
哭きながらひたすら走る夏の毬
ある目醒め思想を変えて策を練る
冴えている五感疑惑をはじき出す
菌向かえば酒の味さえにがくなる

和歌山市 古久保和子

炎天のポストに最敬礼しよう
日照り続きで知恵の泉も干上がった
一人暮らしにも一人暮らしの音がある
リサイクル効かぬ頑固を持て余す
大皿へてんこ盛りした母の味

和歌山市 田 中 み ね

想定外のドラマもあって人生譜

またごろり猛暑の砌許されよ

イケメンの僧侶むかえる盆供養

大へんですね介護きづかう他人事

いただきまぢゅ祈りわすれぬもみじの手

和歌山市 玉 置 当 代

炎天下ど忘れ多くなり申し

貴重品仕舞った所もう忘れ

炎天下プラス思考で軽い靴

手間かけた以上に答えくれる花

立板に水で信用そこなわれ

和歌山市 松 尾 和 香

世の無常糧に生きてる沙羅双樹

コンドルの翼も風に乗り損ね

戦争を知らぬ世代の夏休み

風化させぬ命の祈り被爆の日

若い日の僕の勲章玉の汗

和歌山市 細 川 稚 代

久々のかたい握手にキヤッチされ

灰汁ぬけて魅力半減した男

弱点を平気でついてくる人だ

夏野菜あくもにがみも里の味

現ナマにひかれ墓穴を掘っている

和歌山市 楠 見 章 子

ジーパンに白シャツ青い風を呼ぶ

Tシャツの型じりじり夏が染む

疑いが晴れて真っ直ぐ大ジョッキ

墓参り蟬が歓迎してくれる

炎天を帰り麦茶の美味いこと

和歌山市 武 本 碧

人生は五風十雨といきたいね

二人には遣らずの雨がキューピッド

輪の中に例外という隠れ蓑

白混せて繕う傷の浅い内

経机今日一日へ手を合わす

和歌山市 喜 田 准 一

折角の話だひとつ乗ってみる

今ここで退けばずるずる侵される

凜として時に脆さも覗かせる

横車押しても無駄と悟らせる

ひと先ずは世間話にして帰る

和歌山市 堀 畑 靖 子

ああこれは軽いイジメと笑むゆとり

ダメッぷり認めて夫婦しています

美味いもんだなとも目星つけていた

ホームレス襲う少年いる都会

信州のすこーんと空も水も澄み

会議延び無駄金使う国会が
議員さん日頃の事が試される
のぼせてる党首達がおかしいね
ぼろを出す災害時でのお粗末ね
罪つくる母親哀れ甘やかす

平成19年度川柳塔碑合祀祭実施要項 於 高野山大霊園

日 時 11月10日(土) 雨天決行
集合場所 南海電車「なんば駅」3階中央改札前
集合時間 午前9時30分(10時発特急に乗車)
会 費 5000円(交通費、昼食費)
申し込み 10月5日までに本社事務所宛

○別の交通手段で参拝される方は、その旨川柳塔社へご連絡の上、12時までに直接大霊園川柳塔碑前(奥の院下車)にお越し下さい。(大霊園事務所 TEL0736-56-2966)

到着後すぐ法要を営みます(12時10分より約30分)

○遠方の方で宿泊希望の方はお申し出下さい。

○帰りは16時15分発に乗車予定

合 祀 者 (敬称略)

(18年8月～19年7月に逝去された方)

黒川 紫香・澤 裕子・安本 晃授・沖浜 正宏
乾 喜与志・門谷たず子・井上 直次・石川侃流洞
田中 正坊

第22回国民文化祭・とくしま2007

渦 藍 踊り 文化ふれあう阿波の里

日 時 10月28日(日) 10時30分～16時

会 場 徳島県教育会館大ホール

当日投句の部(未発表作品 一人各題二句)

「遍 路」 平田 朝子 選

「徳」 進藤すきの 選

「わくわく」 島田 駱舟 選

第二次選者

磯野いさむ・今川乱魚・定本広文・西出楓楽・山倉洋子
賞 文部科学大臣賞・国民文化祭実行委員会会長賞・徳島県

知事賞 他

入賞作品は作品集として刊行し、応募者全員に無料配布します。(小・中・高校生は入選者)

事前投句は締切済み

問い合わせ

〒770-8571 徳島市幸町2-5

徳島市文化振興課内

第22回国民文化祭実行委員会事務局宛

TEL 088-621-5178

FAX 088-624-1128

主催

文化庁・徳島県・徳島県教育委員会・(社)全日本川柳協会
徳島県川柳作家連盟・徳島市 他

川柳塔の

川柳讃歌

(34)

木津川

計

一匹と思えば案になる余生

高橋 岳水

「女一匹」とは言わなかった。あくまでも「男一匹」で、広辞苑の「一人前の男子の意を強めていう語」と解すれば、岳水さん、周りは「案になる」どころか、一人前の強い男一匹には振り回されるのです。

そんなまともな意味で使われたのではありませんまい。「裸」貫たつた一人じゃござんせんか」の番場の忠太郎のように、孤独な一羽鳥になぞらえ、しがねえ境涯に身をやつせば世間体を構うことはござんせん心の心境です。

水に浮く一円ほどの我が余命

坂上 高栄

岳水さんという高栄さんという、川柳塔の同人は身を鴻毛の軽さに比した自嘲の達人です。だから川柳であつて、自賛の御仁ばかりに出てこられて何が面白いのか。

そうか、一円は水に浮くのか。で、実際に試して水に浮かべたから僕もバカです。すると、

一円は水に沈んだのだ。一円と雖も水に浮ばないとなると、右の句は成り立たない。そうではない。浮こうが浮くまいが、所詮僕も高栄さんも吹けば飛ぶほどの余命という訳。

ゴミ捨てで出会う男と喋らない

岩崎 公誠

「関白宣言」で物議を醸したさだまさしは、のち「関白失脚」で女性方の「機嫌をうかがい、こう歌った。そして今日も君たちの笑顔を守る為に、仕事という名の戦場へ往く。右に定期券、左に生ゴミ」。そのゴミ捨て場で毎朝顔を合わす男がいる。なんともバツが悪く、ものも言わず離れる、という男は公誠さんの世代で終りだ。嫁さん以上に赤ん坊を世話する若い亭主が一杯いる。旧世代は父権の失脚を嘆き、新世代は母権の復権を受入れる。

言い訳に出かける靴も揃えられ

高橋 宏臣

片足ずつ伸ばしたご亭主の足に靴下をはかせる奥様が一言前までの京都にはいた。だから靴は無論夫人が磨いて揃える。僕はどうか。玄関に腰をおろし、グサツと拭くだけのシューズクリナー「くつヒカル」で何回も靴を勿論自分でこする。「両面使えてお得」とあるのが切ないなあ。そんな僕が言い訳に出るのは似つかわしいが、句の御仁は先方で平伏。借りた十萬円の返済がなげできないのか

を言い訳する。宏臣さんの炯眼である。

駐車場線引くだけでよく儲け

藤井 正雄

四十年前も昔の文化住宅という長屋が廃屋になって十年、やつと壊されて、さて「何にならまつしやる?」「マンションだつしやるか」「それにしては奥行きが足りまへんがな」と隣近所の口さがない爺さん達が案じている。するとある日、線が8本も引かれて駐車場になったから、「もつと早うやつときゃあよかつたのに」「ほつときなはれ、ひとさんの懐具合なんか」と、わが家の辺りも持たざる者の羨望と嫉妬の渦が巻いている。

古い曲聴いてみようか雨の午後

奥 時雄

時雄さん、あなたの手を握ります。僕も真実ディック・ミネが好きで、書齋でよく聴くのです。「ダイナ」「上海リル」「黒い瞳」「アイルランドの村娘」「踊る今宵」「モダンエイジ」「私の青空」「小さな竹の橋の下で」、そして「雨が降ってたし」と／或る日の午後のご道だった／君と僕は寄り添って／雨の舗道を濡れながら／二人愉しく歩いたね。「或る雨の午後」から七十年。愉しく歩いた二人も九十代だが、歌は永遠の青春である。

〔上方芸能〕誌代表

自選集

川 上 大 輪

煩惱を消すとのつべらぼうになる
 先手必勝おはようさんと言うておく
 受け流すだけの耳なら貸してやる
 ひらがなと遊び漢字に叱られる
 夏が過ぎネジ一本が手に残る

木 村 あきら

瀬戸の浜借景にして句碑が建つ
 コップから出たがっている水中花
 歓待をされると酸欠気味になる
 ベランダに満艦飾の秋日和
 趣味ひとつライバルがあり燃えている

小 島 蘭 幸

水平線ギリリと孫の名は航^な
 孫が来た夜だ寿司でも取りますか
 孫の鼻山脈の如眠っている
 孫を抱くバイオリズムがひたひた合う
 じいちゃんの乳房を探しているのかい

運命と悟り笑顔を絶やさない
 老斑を落した海が荒れている
 原子炉でもめる平和な国に棲む
 バッカスに叛かぬ程度酒を酌む
 亡母の影さつとよぎった落椿

小 林 由多香

万札が入ってないかポスト見る
 裸でも身の置き所ない暑さ
 一粒の種が努力を实らせる
 口開けて夜空の花火見とれてる
 一円の不足ぐらいいは自腹切る

斎 藤 嘉

苦い過去などは語らぬりんご達
 もう少し歩こう並木続くから
 月見草の道で出合った野苺だ
 真心を購う朝露の野菜市
 晴天に鍬の一丁あればいい

塩 満 敏

九月十四日を鶴彬忌にしませんか
 久しぶり句会に出れば生きてたか
 一坪の棚に胡瓜が良く出来た
 テレビ席野球送り火見せられる
 モンゴルと仲良くしなさい綱不調

小 西 雄 々

新家完司

耐えられぬほど暑くあれ原爆忌
焼け死んだ人を偲べと油照り
炎天の道を歩けば犬の糞
悪党と知った蜥蜴が逃げ惑う
生臭い獣のいのち満ちる夏

玉置重人

季は巡るそれぞれの花それぞれに咲く
まだまだの思いは捨てぬ夕茜
いつまでも元気で錯覚の極み
錆ついた脳で小さくなった語彙
命きさらば煩惱が捨てられぬ

恒松町紅

足音も聞かない町の夏休み
食うものもなかった記憶夏が逝く
傑作でドラマのようないい出逢い
たつぷりと注がせ嬉しい話聞く
まだ燃える火種は少し持っている

津守柳伸

八月の空忘れられぬ鎮魂歌
忘れられぬ昭和と一桁黒い雨
龍の目を見つめ一周無のころ
圏外の携帯がある蟬しぐれ
クーラーをつけぬ頑固に長い夜

遠山可住

ケータイは持っていないません臍まがり
キャラメルがあり百歳に今日が暮れ
名月の窓に団子が忘れられ
エプロンに言いたいことがある政治
太陽にいのち頂く四季の恩

都倉求芽

強行採決関所破りのツケがくる
逆転が転り込んだ敵のミス
行儀よく食べては不味いかき氷
仏壇に涼しさ少し蓮の花
送り火のテレビリビングの浄土

土橋螢

走らねば負けると知っている體からだ
信念を貫く桔梗紫に
霧晴れてここにも源氏物語
逃げ道がある九条の自衛権
少しぐらいの貧乏がちょうどよい

西出楓楽

八十二年昭和は時をまだ刻む
物忘れしないと脳がパンクする
咲いて散るこれがたやすいことでない
反省会の反省会で本音言う
頬ゆるむ偶数月の十五日

仁部四郎

宮西弥生

しぶいのだ屑屋お払い江戸景色
鉋屑大工の腕の証明書

人間の屑と判事は言いません

人間の屑に近いと鏡言

屑鉄を停められ十二月八日

波多野五楽庵

森下愛論

極限の苦悩を海は語らない

風の盆指のしなりがせつなくて

笑窪持つ少女に告知など出来ぬ

病葉よ友の一人がみまかりぬ

不眠症月が益々冴えてくる

林瑞枝

八十田洞庵

陽には陽を月には月の影と住む

舞い終えて思惟のただよう蝶になる

福祉かも知れない鶴の恩返し

海を見て海の言葉で書く手紙

風呂敷に大きな愛を包み生き

宮口笛生

両川洋々

ひとりでは何も出来ないのも男

八十二歳二泊三日の北海道

食べ放題の蟹が真夏の北海道

もうこれが最後と思う旅にいる

旅帰り土産着いてた宅急便

保証ないのち神さま仏さま

お隣と仲よく住んでます独り

幸せの保証掴むまで燃えず

流されて赤いルージュだけ燃える

無になろうなると視界を広くする

明暗は厳しい選挙の夜が明ける

いいところ来たと酒好き手伝わせ

丹精の朝顔涼しく咲き誇る

ポケットの一円玉は忘れられ

まだ人間していますとかしこまり

猛暑にも蟻は汗拭くひまもない

大胆になれず羊の輪に入る

先生のカバン生徒に負けぬきず

宵待草そんなおひとももういない

供養なき無縁仏に蟬時雨

迷い抜く夢に未完の絵が乾く

式典の敬語ばかりに疲れ果て

ニコチンが切れると真人間になる

やがて政府が長生き税を取るだろう

君の裏切りきつと過去形にはさせぬ

阿 萬 萬 的

要領がよ過ぎることがつくる罪
また同じとこで躓くこれも老い
陰口を気にせぬ頑固な自己主張
そうやそうやとすぐ合槌も歳のせい
妻の勘に頼る自分に老いを知る

板 尾 岳 人

雲に手が届く高さにある祈り（大観峰）
全身を緑と水に抱かれしか（菊池溪谷）
千人の千人灯籠灯がゆれる（山鹿まつり）
土石流命奪ったことわすれ（平成新山）
清正に相談したいことがある（熊本新山）

奥 田 みつ子

ローズ句集手に送り火と旅立たれ（悼吉田笑女さん）
アメンボの波紋見ているうだる午後
苛立ちに風鈴暑く聞いている
自分のこと何も知らずに生きている
あるがままに独りまた佳しまた楽し

河 井 庸 佑

納得をさせて非を説く祖父の知恵
セールスに買う気読まれたのが不覚
二人三脚待望の家建ち上げる
山頂へ一歩一歩の重さ知る
閃いた一手逆転した基盤

温 故 知 新

年上の女とくづるてつちり屋
何時の日の俺に後光のさすことか
このくらし啄木ならば歌詠まん

菊沢小松園

もう妻は肩を叩かすようになり
大阪へ来た団体は走らされ
老いらくの恋マフラーが派手になり

小池しげお

恩を知る点では犬にさえおとり
古本屋暗い所で何か書き
手錠とる方が悪人臭いなり

後藤 梅志

恋すればこそコスモスの線が好き
菊活けて一ト時欲を忘れたり
雨の日ははく靴が無く本を読み

清水白柳子

— 合同句集「私達」 —
昭和三年発行 選者麻生路郎

水煙砂

西 出 楓 楽 選

池田市 上 嶋 幸 雀

蟬の声聞いて五感も夏季休暇

民主主義数は力か蟬しぐれ

真夏日の立秋暦へ八つ当たり

格差などない日盛りの冷奴

ぜいたくの極致風呂上がりのビール

エアコンの部屋で原爆忌のニュース

鳥取県 齊 尾 くにこ

お手洗いわたしの小さい美術館

シャキシャキとレタスサラダのような友

レジ袋ひときわ響く宿の夜

ひまわりの疎ましい日もありゴロ寝

四面楚歌今は静かに寝となる

お出かけへ顔もただ今衣替え

西宮市 藤 本 直

辛抱と読めた親父の背番号

人生の知恵の輪解けずまだ解けず

本当の怒り笑顔の裏に燃え

心には小さくていい丸い窓

ちぎれ雲別れて会えぬ友想う

深呼吸妻に溜息かと問われ

寝屋川市 岡 本

勲

朝の空気吸ってようしと捻子を巻く

ふるさとの風逢いたくて汽車に乗る

少年が大志いだいて過疎進み

誤解とく酒で誤解がなおつのり

命守るための酒だと飲んでいる

人に世話かけずにそつと逝くつもり

豊中市 谷 川 勇 治

菊一輪わたしの部屋になりました

ばあちゃんにもつたいないがこびりつく

円空の笑う仏に救われる

折り紙が鶴に変身原爆忌

片思い石投げていた少年期

一輪草口下手らしいひとり居る

檀原市 藤永実千代

穫れ過ぎて嬉し恨めし夏野菜
柏手が弱くて神に届かない
頼み事項合をみて少しずつ
年寄りの病は凡そ引き受ける
ナビ指示につつまみ入れて走つてる
野球帽男を俄然若くする

西宮市 石野照代

親も子も意味なく切れる夏休み
ひまわりの後姿にすぎがあり
花の寺一日無欲ですごしてる
風にのりうわさ話はひとめぐり
るす電につまりながらも伝言す
秋空にわか絵かきの白い雲

大阪市 中井 萌

溺れないように犬かき続けてる
美しい才女は神のえこひいき
不安など何も無いのもまた不安
氷山の一角だけに陽が当たり
雲上の夕焼け旅のおまけ付き
大自然人のおごりを見逃さず

堺市 大久保 伸子

一言のセリフに心救われる
夏が逝く余白の多い旅日記
達筆でないが心のみえる文

夢のない話この頃多すぎる

夢ばかり大きくなって終りそう
大空に大きな虹を書いてみる

八尾市 赤木 妙子

紙一枚あれば平和の鶴を折る
海山の幸で暑さに立ち向かう
童歌うたうロボットなら欲しい
海ゆかば六十余たび鎮魂歌
安心が欲しいコロッケ好きだから
ロボットのようにな不死身でも困る

紀の川市 宇野 幹子

吃水線越えた重しへ詫びている
狼狼の嘘早口でまくしたて
望郷の海へと帰りたい魚拓
千切れ雲バズルさりと解くように
完敗のハートへ燃えてきた闘志
地下足袋を履くと輝く顔になる

香南市 桑名 孝雄

農五身体操二日酒七日
缶ビール所詮は酒の露払い
ご先祖は酒の逸話に事欠かぬ
雑草へ獅子奮迅の草刈り機
忠魂碑あの日に戻る草いきれ
胸襟はたつぷり開けたクールビズ

札幌市 三浦 強 一

マニフェストうつとり聞いて騙される

団塊へ飛んでごらんと流れ雲

逆風を満帆にして再起の背

メンデルもあつと驚く産む機械

バツカスの寝息が洩れるワイン蔵

取手市 葛西 清

月末に家計簿閉めて青い空

弁慶の袖が散つて菊人形

限界とばかり会つて慌てない

手伝えば妻は昼寝の高軒

待つていた甲斐ありました二分割

栃木市 岡野 すみれ

痴呆とは思いたくないこぼれ飯

拾われた犬幸せを願う顔

幾千の星が輝く生きなさい

サービスのつもり冷房強すぎる

大の字になってこれから先のこと

東京都 井上 つよし

ジリジリと猛暑静かに街を焼き

暑中見舞年賀状ほど来ぬ返事

広重の雨に暑さを救われる

核の傘の中で九条何処へ行く

聞こえない振りして聞き直す誉め言葉

昭島市 野口 忠

板前の手捌きを食う夏料理

朝露が転がるたびに自己主張

古稀を過ぎ汗の蛇口も細くなる

懺悔してまだある嘘が脂汗

嫁ぐ子に往復切符持たす父

立川市 柏野 遊花

ゆつくりと美学に触れる平和な世

疑問符はまずパソコンに教え乞う

好きな花咲かせ足し算楽しもう

コップでも大らかに咲く水中花

ピオーネがふる里の風連れてくる

横浜市 巖田 かず枝

年金の迷子を探す長い列

お任せと言つて注文つけている

ストレスになつてゐるのか心技体

健康とお金があれば文句なし

子も孫も夫も犬も甘やかashi

横浜市 長島 亜希子

明治生まれ亡父の日記は現代史

読む気なかつた亡父の日記に引き込まれ

博識は亡父にかなわぬ日記帳

井戸端も食卓も選挙の話題

トップ当選だから言いたいことが言え

横浜市 金森 徳三

北名古屋 片岡 文男

頑張るぞ平均寿命超えました

筋書きの無い感動の甲子園

箸休めある食卓に気がなごむ

夏バテの句帳ににじむ汗のあと

モーレツな暑さと予報あおりたて

藤沢市 加藤 スズコ

弱点を労り合つて古い仲間

都会にもふれる人情お裾分け

美しい夕日を染める介護バス

八月忌つなぐドラマの白い雲

腕白子日焼けの色にある未来

佐渡市 高野 不二

電話での孫はやつぱりそつけない

クールビズでなくネクタイに用がない

捨て切れぬものを調べる大掃除

どの店も半額という花火の値

バツイチを一寸自慢のように言う

岐阜市 平野 あずま

町内の掃除手より口忙し

不器用な靴で幾度も迷い道

お守りが揺れてる泥のユニフォーム

マウンドの孤影五万の眼が囲む

雨宿り斜め読みする週刊誌

雑草はもう実をつけて秋を向き

夏休み入るとシニア留守居役

冷房でホット飲んでる贅沢さ

番茶でもやつぱり欲しい菓子一つ

レジ前の渋滞客はシニアさま

京都市 清水 英旺

原爆忌被爆マリアの目が悲し

金持ちになれないけれど時間持ち

当選を出した売り場でジャンボ買う

人生は光と影の縞模様

おしなべて世の数式は不等式

大阪市 太田 としお

デパ地下で一日探すコンタクト

カビ生えた良心ならばなんぼでも

恋人募集年金あつて杖つかず

おしりから煙でるほど吸つてガン

慌てるなもうすぐ総理かわるから

大阪市 尾崎 黄紅

父逝つてから七十年を生きている

電話では俺と言つても通じない

おなじこと老いのど忘れもの忘れ

さる歳といぬ歳仲のいい夫婦

大と小中味は小にある仕組み

大阪市 田 浦 實

すずなりに鳴くクマゼミの気味悪さ

鯛のいのちもらつて旨い活け造り

淑女の指良い別名をもつオクラ

三度笠かぶつてくれと都落ち

雨だれも真珠に変えるシヨパン聴く

大阪市 寺 井 弘 子

派手目着て同窓会という見せ場

うっかりと賞めた料理がずつと出る

自分らしく生きて行くためエゴ通す

しっかりと覚えた漢字薄れゆく

店仕舞いばつばつ思案老い二人

大阪市 原 田 すみ子

子を産んでいとも自然に母の顔

夏祭り幟を揺らす呱呱の声

家中の網戸を洗い夏化粧

一人っ子囲む大人が多すぎる

万華鏡くるり回して別の顔

大阪市 平 嶋 美智子

鈍行をおりたこの地に五十年

浪速好きざつくばらんと人情と

ごはん好き梅干一つあれば良い

満月に聞いてもらつた愚痴一つ

九条を守る署名にヤングママ

大阪市 伏 見 雅 明

黒枠に使う写真は決めてある

三人の子育てをして孫一人

妻の出すサイン通りに生きてます

帰国子女ハグの仕草も板につき

目を閉じてはるか昔の花火聴く

大阪市 山 本 加お里

生き甲斐を持つているから忙しい

川柳のご縁思わぬ友が出来

何げない心配りが温かい

息子には家系の話伝えとく

健康で無理する癖が直らない

大阪市 吉 内 福 世

持て成しもそのままの座が温かい

ストレスを靴に詰めて旅にでる

相棒と仏に成れる露天風呂

不器用で笑われ役が楽でいい

孫帰り夫婦膳には箸の音

大阪市 吉 田 富 美

頬杖に虫聞く余生はこんなもの

青空のこの色が好き平和です

残暑なお箸より逃げるごまとうふ

辞書重く一字を拾う夜の秋

ゆらゆらと樹のてっぺんは空席だ

泉大津市 助川和美

夫婦愛子育て終えて振り返る

卓上になんでも置いて手を伸ばす

芸能人恋の噂もある人気

新聞紙畳の下に歴史あり

大丈夫母の笑顔が特効薬

泉佐野市 稲葉洋

流れ星君も本意でない定め

あの人に会うかもしれないぬ背を伸ばそ

世捨てではないが一人の目刺焼く

究極の構図授乳の母子像

老夫婦絵になっている寺の坂

茨木市 島田誠一

アメリカに魂までも抜きとられ

重すぎる期待はいつも若芽摘む

新婚のままが続くと勘違い

お祝いの都度金づるで声かかる

呑んべえのだしになっている祝う会

河内長野市 内海綾乃

年金問題選挙後静か何処へいく

住民税ハガキ開いて仰天す

アメリカンチェリー早く買つてと光っている

ウグイスとセミの交代森の中

横になって花火大会テレビ見る

河内長野市 黒岩靖博

一目惚れともに気が合い夫婦坂

老い御免しかし年金はよ欲しい

幼い日遊んだ池が消えている

セレモニミニの水車が色を添え

母さんが静かに歌う童歌

岸和田市 坂口英雄

蟬を取る子供の声が聞こえない

それとなく美人を探す阿波踊り

外人さん見様見真似の盆踊り

秋まつり結束かたい街の衆

一日中遊んでいても愚痴を言う

堺市 荻野像山

人間を美しくして来た鏡

古漬を刻んで母を思い出し

軒で待つ母がいるので帰省する

安全を保障されない青信号

再検査びっくりさせて検査料

吹田市 藏田光子

囲いもの立てて楽しいおままごと

人間味苦勞の跡が見えかくれ

静寂に水琴窟の音涼し

コーラスの和声がびびく夏木立

古里で眺めた北斗まなうらに

吹田市 二宮 栄子

気をつけて歩いていてもけつまずく

切り捨てた四捨がこの頃光り出す

思い出をたどると何時も母が居る

公園の遊具のあくび見てしまふ

ごみ捨てて拾うて嫁に笑われる

吹田市 早 泉 早 人

夢破れまたシナリオを書き替える

凡庸が肌に馴染んで心地良い

颯爽と歩きなさいと影法師

ときどきはわたしに還る喫煙所

帰省客溢れて道が遠くなる

高槻市 笠 原 乃りこ

定年後家事分担のせめぎ合い

品格を云云される国に居る

美しい国を磨いた老いの衆

銘柄に騙されたのねお生憎

視野の隅親を認めてテーブル切る

高槻市 片 山 かずお

お互いにあなたの留守がよいと言う

生きてるよと待合室へ顔を出し

週一度女医と二分のデートする

脇役は神から受けたキャスティング

円満へ付かず離れず争わず

豊中市 荒 卷 夢

ジーパンの穴から抜けるエチケツト

重心を下げて可もなし不可もなし

川柳ではやく程度の正義感

散歩道ベツト寝そべる長話

竿竹の売り声に聞く今昔

豊中市 源 田 啓 生

逆転の野党元氣な暑い夏

ヒロシマの空の青さに祈るのみ

メール打つ指七色の恋をする

残り火を吹いて燃やして掻き立てる

春の危惧忘れ秋には秋の危惧

豊中市 神 野 宇乃子

八月は嫌いな月だ今もなお

おかつぱの髪にも降った黒い雨

今行けば街になつて疎開先

来年はようこんかもと墓に告げ

スイトンを真つ白な粉で作る幸

豊中市 松 尾 美智代

早起きを競って友と露天風呂

競う事やめてのんびり自分流

深い霧晴れても山は孤独です

ロゼワイン旅の最後を盛り上げる

神に感謝旅の天気はスイス晴れ

富田林市 古田 千華

仰ぐ枝ひっそり笑みの残り花

エレベーター軋みて嫌な予感する

砂山が崩されている月曜日

満月に砂の声聞くピラミッド

頬杖について授業の小学生

寝屋川市 北田 ただよし

けいさつのシェパードだけはうまく合わぬ

お行儀の良い盲導犬はいじらしい

教えとく人のルールを子や犬に

雑種にも子孫へ遺す夢がある

お隣の柴犬へするゴアイサツ

寝屋川市 小嶋 みさと

サスペンス心理描写が念入りだ

ひと夏のドラマ夢みて帽子買う

原爆忌心の傷は癒えぬまま

生きている証しの如き蟬しぐれ

しっかりと食べて夏バテやり過す

羽曳野市 永田 章司

良心にチクリ刺さった見ない振り

原爆忌しようがないでは済まぬ傷

古希の宴老父の好物毛蟹添え

大器晩成棺の中へ持っていく

自分史に心の傷は書いてない

羽曳野市 森 下一知

九回の裏に女神が舞い降りる

ふる里を詰め込む父の丸結び

なにがしか包んで腹を読みに来る

爪先に故郷を蹴った残り疵

悪友が寄って貸し切る縄のれん

羽曳野市 吉村 久仁雄

ご無沙汰の言い訳並べ墓参り

カラスの目盗んでそつとゴミを出す

どつぷりと浸り幸せ気付かない

歓待を受けて頼みを言い出せず

考える葦の悩みは今日のメシ

枚方市 小川 良吉

肉よりも魚すすめる処方箋

出世魚鱈に縁なく喜寿のぼく

農業でメダカの学校消えました

長官が詐欺師と組んだ国の品

昼寝どき猫と目があい無視される

枚方市 小林 わこ

宿題ができないままの熱帯夜

誰よりも日傘欲しいと泣く地球

祝い日に鯛の尾頭鮑さもせず

世界の料理食べていないが和食党

ゆつくりと歩を揃わせて見る夕陽

枚方市 二宮 紫鳳

てこずった分だけ大きな花をつけ

ふるさとの海に重ねる父母の愛

孫達者何より嬉しいプレゼント

夏バテも孫のパワーでどこへやら

ウォーキング汗ふき飛ばす生ビール

藤井寺市 増井 ヨシ枝

目に見えぬ痛み眉間の深いシワ

私と同じ顔して昼の月

四季の花絵手紙にして師を見舞う

早馬を胡瓜で仕立て亡夫待つ

誕生日孫が覚えていてくれた

箕面市 寺井 柳童

金魚売り子に伝えたい風物詩

近道を考えながらウォーキング

黙禱に静まり返る蟬しぐれ

気づかないことが幸せかもしれぬ

聞く耳を持たぬ政治へNOの票

八尾市 笹倉 ひろし

み仏の慈愛を受けて今日も生き

不器用なくせに話題に入りたがる

古稀過ぎて暦に増えた医のマーク

終戦の腹ペコ思う暑い夏

紺碧の空から酷暑降り注ぐ

八尾市 田邊 浩三

垂れ流す河に怒りの大津波

昇進もリストラも紙一枚で

二日酔い妻には風邪と言っておく

痒くない所ばかりに手が届く

年金が解こうとする赤い糸

八尾市 中島 春江

ちよつとした温い言葉に癒される

気晴しにおいてよ鍵は開けておく

辛かった昔のことはささり言う

ジュース缶炎暑の高を見る思い

ドッコイシヨ言うが五体がみなうごく

八尾市 西川 義明

先の世で父子が妙にウマが合う

先輩に恵まれ両の手に宝

久し振り浴衣で孫とする火花

九条の一枚岩にある平和

百年も千年先も妻となら

八尾市 松葉 君江

豊かさになれて勤勉失われ

ポリシーを曲げず一人の海守る

好奇心痩せる右脳の栄養に

足腰を鍛え子供への荷にならぬ

将来へ三つ子の嫉たたきこむ

八尾市 脇 俊子

音痴でも心に音符奏でてる
完熟のトマトに夏の音合わせ
風向きに刃向かってみる雑魚の意地
現実と夢の境界身構える
振り出しに戻る夫婦の時間割

大阪府 小 栢 こずえ

世話かかる言うて買ってる鉢の花
傍目には幸せ苦労ある同居
疎まれても品格だけは持つて生き
閑人にもひまじんなりのいそがしさ
予定終え魂ぬいて湯につかり

大阪府 神 野 千恵子

赤ちゃんが寝ている泳ぐ形して
最後には帳尻の合う自然体
旬音痴イチゴ年中顔を出す
膝小僧撫でて機嫌を取っている
そのうちに季語が無くなる温暖化

大阪府 西 川 冷子

そよ風にくるくるはぜの葉のリズム
高速道事故ではじまる盆休暇
一瞬の怪我で狂った設計図
縫る杖我を氣遣う人の居て
元氣者病んで人情身にしみる

神戸市 木村 忠義

悪いことせずに来られてよしとする
入院時確かめておく非常口
入院で家庭の良さがよく分かり
わたくしの心の医者はお月さま
うどん食う音は平和だなと思う

神戸市 武 田 恵美子

お茶いこう孫に声かけ友の店
やめようかもうすこしだけやってみよ
この時間上と下とが仲良くす
しみじみと手のシワながめ感謝する
電話口次の言葉をわすれたよ

尼崎市 加 川 靖 鬼

青丹よし奈良をみどりの風と往く
森林浴都会の毒を抜いてくる
外国人からもつたいないが評価され
紹の衣脱げば青年らしい顔
ビフィズス菌腹の黒さも融けますか

尼崎市 河 津 正 治

朗読もさわりの部分熱を入れ
山門に睨みを利かす蝦蟇
人情に触れる同行二人旅
歳月は人の心を丸くする
乾杯のコップの底が拗ねている

尼崎市 藤岡りこ

乳のみ児を抱く母ザルの誇らしげ
ゆすら梅小鳥が運び命継ぐ
買っちゃったお目が高いとおだてられ
トランプのババ来て孫の目は泳ぎ
おやじ株未だ健在父の日に

篠山市 永井かほる

いっせいに稲穂出揃い盆なんだ
菜園は教えられたり教えたり
忘れ物探す時間の無駄ふえる
忘れたとたまに武器として使ってる
菜園で満ちたりた汗流れ出る

三田市 上垣キヨミ

胸こがす人も無いのに寝つかれず
てっぺんに住んで花火を独り占め
指輪褒め予約をされた形見分け
舟盛りが氷のゲタを履いて来る
川柳に飽きたら地球離れます

宝塚市 丸山孔一

段々と沸騰点が高くなり
おい犬よテレビ見ながら何想う
葉の露が霜に変わって衣更え
将来と過去の天秤釣り合わず
私利私欲党利党略国破れ

西脇市 七反田順子

氷山が悲鳴をあげる温暖化
かき氷ツーンと右脳刺激する
熱帯夜素直に汗を滲ませる
円高で株価の下落眉上がる
国訛友の顔にはえくぼある

奈良市 阿部茶々

コンチキチン足もと弾む下駄の音
十九歳大和と共に散華した
呉港を見下ろす丘に戦死の碑
あるがままですがままです自然流
若者が未来描けぬこの時代

奈良市 乾春雄

風船の旅へひろがる青い空
邪心一つ抱くとはじけるシャボン玉
詫びる手が鉢に水やる旅帰
鹿寄せの笛が鳴ってる奈良慕情
背番号大きく見えたホームラン

奈良市 尾畑なを江

感動が薄れて来たら見る写真
立ち直れそうだ私に味方いる
心にも無いこと言って喜こばす
待たされて点と線とが交わらず
仕方なく満足とする不満足

奈良市 田中賢治

良心も垢落しする座禪堂

良心の充電中と滝の前

失った議席の数はお灸跡

国敗れ大和魂欧米化

秋祭り年寄りが待つ子等と孫

寡黙な人と一日長い海の底

人脈があるかないかの結果論

悔しさをバネにしますと着く便り

衝撃を与えて本音みえてくる

公平に朝が来ました目を覚ます

和歌山市 田中すず

和歌山市 柏原夕胡

病気です恋患いをしています

ダイエットするにはちょうど良い悩み

ふと消えてしまいたくなる夜の雨

愛憎の狭間で揺れている私

傷心へ時の流れはやさしくて

紀の川市 木村徑子

追っかける夢まだあつてまっしぐら

友情の檄がわたしに捻子を巻く

仁王さん闇夜はほっとしてますか

悔しいが思考力から萎えてくる

なにくそと百まで雀踊りたい

和歌山市 坂部かずみ

クマ蟬に呼ばれたような墓参り

ミーンミン今年の蟬の選挙戦

一億人テレビの色に染まりだす

クーラーで冷やしお風呂で暖める

詰め込んで押さえて夏の冷蔵庫

和歌山市 たむら あきこ

納骨の日の父を抱く膝の上

聞くことを拒み続ける耳がある

色のない未来へ虹を溶いている

半径をちぢめて恋を遠ざける

新しいおもちゃを探さねばならぬ

和歌山市 根田 よしこ

丁度良い惚けた振りつて難しい

片付けたつもりが場所を変えただけ

定年で飛んでる真似をする余裕

趣味なのに毎日何か焦ってる

一日をしつかり生きて散る木樫

和歌山市 堀 富美子

雑草の花の可憐さ摘みとれず

誘う人のない日も何故か満ちている

風を読む嗅覚未だ衰えず

行きずりの方に惹かれる身のこなし

身心のリセット浮き草のわたし

海南市 小谷小雪

押しくらまんじゅう巢箱の中に居る温さ

コンビにの隅に寂しい鬼が居る

見た目こそ第一ですと医者が言う

ひと言を控えておけば波静か

明日の朝また話そうね地蔵さん

田辺市 大峠可動

原爆忌挽歌は重い石を抱く

有事立法海を距てて海へ墜ち

盛運と衰運二兎の鬼ごっこ

蟻よ笑え紳士淑女の医者通い

旅ひとつ終えてはちほち自我の遺書

和歌山県 森下よりこ

カーテンを替えてわが家を夏にする

笑ったら急に明るくなった部屋

欲が出てそのうち好きになる仕事

明るすぎてもしっくりしない古い家

徒長枝を伐って明るくなった庭

鳥取市 近藤秋星

世界から核廃絶の日はいつぞ

八月は世界の平和祈る月

頑張ろう今日という日は二度と無い

人生は強気で俺のモットーだ

有夫恋出してあなたを偲びます

鳥取市 津村律子

米朝は核の怖さを知って無い

平和の祈り永遠に伝える被爆国

梅雨明けて障子のすべり軽くなる

夕立三日自然はちゃんと動いてる

宵の口ホタルの舞いに癒される

鳥取市 松岡照美

純真な眼が見てるまっすぐさ

どしゃぶりの雨にワイパーからまれる

深呼吸フイトンチャッドが走り込む

残り物ゴミに出すなら食べておく

土用の日干せないものか腹脂肪

鳥取市 山岡紀子

たのもししい夫に見える給料日

男三人会話がとんと弾まない

ひとつずつ利口になって生きている

旅プラン雨も予定に入れておく

マネキンのおだて上手に紅を買う

鳥取市 横田春名

巡りくる四季に文句を言っている

匙投げてみても友情捨てられぬ

価値観がすれ違っても夫婦愛

原爆忌我が生しかと問い正す

往年の食通実は好き嫌い

倉吉市 梶谷 和郎

もめるなら鞘は収めず抜いておく
俺に合う風が吹くまで待つている
雑念を除くと脳が消えてゆく
脱皮するたびに器が丸くなる
迷うたび元に戻って風をみる

米子市 猪森 スミエ

洗い髪艶さらさらとセーラ服
色艶もよくなり医者のお鼓判
羽衣の舞い見せてる金魚鉢
クレヨンのみどりが禿びる夏景色
未来図はどのクレヨンも皆使う

米子市 小塩 智加恵

父逝きて三十五回盆迎う
喜寿の妻一家束ねる才をもつ
ちぎり絵に絵筆を握り句を作る
人並みの背丈も縮み背の曲がり
七十五根気が消えて眠くなる

鳥取県 大塚 美代子

少子化に子供キラキラ光り出す
腕白な子には大器の夢がある
チャレンジデー今日の体力使い切る
酌み交わす酒でしこりが取れた仲
忍び寄る年に弱音を叱り付け

鳥取県 岡本 幸枝

元教師 得意の歴史説くガイド
バラソルに潮の香りが声かける
天高し太らぬメニユー考える
平穏が崩れる時も来る覚悟
短ざくに夢大空を舞いたいと

鳥取県 北村 稔

修身が無くなつてから世がみだれ
酒タバコ値上げされてもすぐなれる
サーピスにつられ財布がカラになる
米づくりコストを下げるころない
心ない飾り言葉は通じない

松江市 相見 柳歩

まだ傘が開かないから雨宿り
ホステスが聞き上手なら文句ない
年毎に生まれ変わりが近くなる
善人は三途の川を泳がない
よく当たる午後から雨と言っていた

松江市 松浦 登志子

長雨のあとの日照りで蛙やせ
俗っぽい話は一度凍らせる
両ひざにサポートをしてまで歩く
サスペンス見ながらパンをたいらげる
うなずいて後を歩いて平和なり

松江市 山根 邦代

想い出を捨てず大事に重ねてる
愚痴るのをやめた風から爽やかさ
希望があるから元氣持続する
ふるさとに案じてくれる友がいる
もうでなくまだまだですと挫けない

出雲市 川島 和歌子

わいわいと騒いで橋を踏み外す
逝つた子の面影浮かぶ地蔵盆
ぬるぬるとつかみどころのない男
マイホーム建てた積木の新世界
人生に歳月がある足の跡

雲南市 菅田 かつ子

はなし家のほんに旨げに呑む身振り
こんな日は頭もペンも夏休み
多数決中で鳥の無表情
ふんわりと風が運んで来た香り
已むを得ず花野を借りて用を足し

雲南市 武島 ちよえ

先走る暦に季節追い付けず
お氣遣い恐縮してる膝小僧
貸し借りのないお付き合ひ続けてる
血圧が日毎私を弄ぶ
声かけてからは垣根が取れていた

雲南市 福岡 博利

ここへ来てまだ神まかせには出来ぬ
わからぬがお経の席に心なく
一病に負わせて今日も先に去に
自民負け老人いびり終るかな
百薬の長のお陰で生きすぎた

雲南市 渡部 好栄

テレシヨップ疑いたくなるおまけつき
私にもまだ残つてた若さです
物忘れ笑つてごまかす事も知り
女には自由があつてないような
バランスが崩れて魅力たつぷりに

府中市 馬場 利子

したたかに生きて恥じない夏帽子
梅ぼしの塩が足りぬとほやく義父
何一つ手抜き出来ずに七十年
躓ずいた小石に悩み飛んでゆく
捨て切れぬものに囲まれ雨ひと日

府中市 藤岡 ヒデコ

私が病むより痛む娘の病
手術日が決まり成功だけ祈る
母さんの居ない淋しい夏休み
先生から見ればよくある手術でも
点滴のしずくを信じ明日を待つ

東かがわ市 中塚 寿々女

そうそうと口先だけで加勢する

シャボン玉虫歯のいたみ乗せて飛ぶ

不利だとは分かっているでも断われず

留守にする熱燭一本添えてある

十六夜に故友と語って酒を呑む

今治市 塩路 よしみ

真っ白い明日へ虹の彩を溶く

人並に生きる五欲をひきずって

築三十余年庭石主の貌をする

紆余曲折生きた明治のおだやかさ

駆け引きはいらぬ裸のコップ酒

大洲市 花岡 順子

石橋を叩いて的を外さない

脳の錆び堂堂回りばかりする

一歩引く分家の家風だと思ふ

咲いた日が最後と花火知っている

寺巡りながら終章考える

香南市 近森 功

お年ですからねとナース笑みをくれ

ねたきりを孫子が祝う誕生日

クラス会老人会で揃う顔

食べ残り勿体ないと妻の箸

半額と言うから二つ買ってくる

北九州市 岡田 幸生

飽食の腹を叱っている散歩

一冊の本から広くなる視界

古傷に触れだす妻の低気圧

呼びだされ待つ税務署の固い椅子

亡友に手招きされた夢枕

メルボルン 藤原 ポン吉

雲ひとつ追いかけて時間過ぎてゆく

はくしよんで車線もちよつとくしやみした

アクセルを踏むと後ろを気にします

暗闇のテールランプに招かれる

コーヒーの甘さが疲れ溶かしてく

シドニー 三谷 たん吉

日本丸舵取る奴が見当らぬ

国の事忘れ自分と党の事

人というウイルス抜く地球病む

病める星美しい国寝言だら

大男揃う協会小心者

シドニー 森本クックバラ

粘りつく安倍川餅に業にやし

三振がなおもベースにしがみ付き

座布団も飛ばぬ首相の負け戦

埒あかぬ拉致を主張し蚊帳の外

言い換えよ恥かしい国日本と

札幌市 小沢 淳

トーキビを車も食べる世の移り
ビルを縫う風に心を奪われる
美談にはいわく因縁後でつき
いい人にされて素直に喜べぬ

日立市 加藤 権 悟

今もなお蛍知覧の母を恋い
妥協することも覚えた鬼の面
勝ち組も負け組もない土に生き
リベンジの明日へ早寝すると決め

草加市 飯土井 健 夫

努力した汗が老後にする笑顔
人のため尽せる内が華と知り
口よりも実力積んでいる強み
暇のない一日だった本の山

横浜市 中尾 哲 代

パパ抜きでマンションもあり嫁が来ぬ
智恵の輪を解けない脳が焦れている
ブランドのバッグも持たず恙ない
幸せを七分で押さえボランテニア

大阪市 安藤 なつこ

年金の大事な大事な領収証
お金より愛とも一度言いたいな
アリさんもホントは仕事きらいです
かわいくていじめたくなるかんにんな

大阪市 江島谷 勝 弘

はちばちと身辺整理かんがえる
たくさんの縁起かつぐが幸来ない
嫁はんに情けもらって生きてます
天六街中身知らぬが元氣ある

大阪市 坂 裕 之

跳ねる鮎床にかかせぬ夏の味
冷酒あり湯引の鱧を縁台で
何ひとつ無駄のない世に生かされる
優先席緊張します譲る方

大阪市 平井 露 芳

同窓会誰が残るか五年先
のらくろとサイタサイタのお年です
戒名はオレも真似して釋露芳
震災のお陰で逢えた両陛下

大阪市 吉川 弘 泰

骨董品磨いて時を偲びつつ
朱字墓早すぎたかな眠れない
秋近し滝の音聞き松花堂
飛鳥路の稲穂がゆれる午後の風

池田市 多田 契 子

六甲山飛ばした帽子雲となり
気まずさを救う言葉に母の事
それなりに地球を救う熱意ある
クラス会イタズラ話置いてくる

泉佐野市 備後 三代子

生がある死がある八十路ど真ん中
泣き皺を笑ってかくす老いの知恵
永らえて見たくないもの見てしまふ
釘ひとつはずしわたしのクールビズ

門真市 矢阪 英雄

嘘をつき冷えたタオルで顔静め
さっぱりと結論が出て手をにぎる
岩よりも強い力士がいなくなり
はしゃいでる子をなだめてるかき氷

河内長野市 木太久 正一

三杯酢初めて作る目分量
走り終えあとはゆっくり散歩する
雷に愛犬側に寄ってくる
愛犬に癒されている老い二人

河内長野市 針生 和代

好きだった人も老いてる同期会
サブリメント色いろあつて飲み比べ
義理ひとつ縛られにゆく遠い里
お地藏に願をかけてる万歩計

岸和田市 中岡 香代

ゆずれない頑固さもあるいい加減
努力せずお金儲けること祈り
マラソンのトップよりビリ人気者
妻よりも飴がこわいと血糖値

岸和田市 米富 淳風

娘の言葉ストンと胸に落ちてくる
慣れちゃった二人暮しの緩テンポ
夏痩せもせぬまま肥ゆる秋が来る
よく眠る私は若いのでしょうか

堺市 羽田野 洋介

引受けてやつと分かったその重さ
心配ないと言われて余計心配に
雨宿り右も左も携帯を
鈍感も研ぎ澄まされた年の功

高槻市 安田 忠子

路線バス園児の絵画頬ゆるむ
どうしても昭和に直す癖がある
晩酌に梅酒ロックで暑気払い
銀山が宝の山になりました

寝屋川市 森田 麗

火垂の墓へドロップたんとしあがれ
鎮魂の鐘の音響く原爆忌
タイガースの帽子離せぬ夏休み
茶柱ににんまり今日も騙された

羽曳野市 仲谷 真一

原発の安全神話どこ行つた
横網の暴走行為に灸をすえ
ハワイから戦争の道始まつた
戦争の風化さけたい原爆忌

羽曳野市 松本 静子

暑い夏がぶがぶ食べる西瓜です
友禅で作ったアロハ素敵です
蓮の葉に七色そえて迎えます
古里は心に残ることばかり

枚方市 坂本 ミヨノ

朝夕に拝む鐘の音日々変わり
嫁姑と嫉妬と笑みで顔ゆがみ
フラワー好きアレンジメント夢叶う
美しい嘘でドラマを描く癖

藤井寺市 伊藤 アヤ子

水打てば冷やこい風が寄ってくる
洗濯の回数ふえる蟬しぐれ
九条を守ろ私も署名する
廃絶を観音様に願掛ける

藤井寺市 俣野 登志子

想い出を繋ぎ合わせて手繰り寄せ
マイペースケセラセラで転ばない
孫一歳女サスケの素養あり
下手な慰め心に届くはずがない

藤井寺市 吉田 喜代子

配達人に冷茶一杯暑い夏
プランターでトマトにオクラ出来ました
家計簿が真っ赤になった夏休み
台風通過下ろした鉢の重い事

八尾市 梅原 莊治

初恋の面影追って独り旅
口喧嘩あつさり敗けて妻に詫び
天下り切られた紐を直ぐ繋ぐ
人生で迷い迷って早や古希に

八尾市 田中 トシエ

本棚の埃になった記憶力
朝顔の蕾数えて祖母早寝
西瓜買う音の弾きをたたき見て
真実と語る勇氣を持つ勇氣

八尾市 前田 紀雄

福祉とは社会保障の原点だ
心技体バランス失う朝青龍
婆ちゃんの煮ころがしにはコクがある
万歩計目指すは富士の初日の出

大阪府 高木 道子

商品の大事な文字は見えない
風鈴が今日吹く風を待ちかねる
思ひ出を時々呼び込む渋うちわ
奔放に曲がるキュウリのレジスタンス

大阪府 畑中 節子

譲られて優先座席で自覚する
蒔かぬ種生えて毎日草むしり
手馴れたる急須撫でつつ昼一人
かばちゃ取り代用食を思い出し

大阪府 若月 祐作

八十路坂考えぬいて夜がしらむ
悩みぬきながら遺言したためる
朝まだきウオークの仲間会釈して
早起きはしたくないのに目が覚める

尼崎市 小池 幸子

風鈴を昼寝の友とする平和
金銭の管理が出来て一人住む
土用干し梅取り入れて盆近し
譲られて素直に受ける歳となる

尼崎市 桑原 東園

人の来ぬ花壇は風に色映える
政界を巧みに泳ぐトップ達
短針にとんぼをとめた花時計
いまいまし握手された掌よく洗う

加東市 岩本 美緒子

冷蔵庫わたし用もつ捨てられず
小休止ほんやりも良い窓の外
何処よりもアトリエ冷やり川の風
吾の名残り手形団扇は古希の風

加東市 黒崎 美紗子

青空と草も仲良く球ころぶ
役があり三途の川をあともどり
虫食いの野菜も味を自慢する
幸運に晴れた往復富士が見え

篠山市 谷田 多美子

国中がなりをひそめて投票日
家中をゆるがせ孫の初笑い
こうのとり愛の交歓監視され
一服に新茶の香りかみしめる

三田市 臼井 二英

空元気だけでも人を和ませる
旋回のゆるい頭に打つ山葵
燃えるのかどうか分からんゴミもあり
大汗をかくのもストレス飛ばす法

三田市 阪本 藤朗

藤椅子のきしみが夢に終止符を
髪染めた友も同じおじいさん
芋のつる食べた話をまだして
焼け跡に赤いカンナの遠い夏

三田市 辻 開子

カラフルな洗濯干せる孫を待つ
旅帰り茶漬けでとった旅疲れ
自家菜園ジョッキ片手で会話増え
トンネルをくぐりいつかはみるあかり

西宮市 緒方 悦子

万華鏡宇宙の旅へ夢心地
宝石の魔術師が住む万華鏡
忘れな草あの日の歌が聞こえ来る
天命と自然の中で生きている

三木市 広瀬房江

威勢よく吉川太鼓を打つ法被
私利私欲色々あつてせまい道
照れている浴衣姿が色っぽい
花いっぱい咲かせ淋しさまぎらわす

奈良市 辻内 げんえい

十字星見える南へ旅したい
星占い信じないけど気にかかる
消灯の静けさ破りメール来る
医者への婿怪我の時には頼もしい

奈良市 矢野良一

時々思うどこか遠くへひとり旅
吹く風に故郷匂う古い路地
故郷の朝コケコッコで目を覚ます
灯籠の明かりが癒す古都の夏

生駒市 小西 稔

良心を叫ぶ声にもうそがある
表示には良心信じ物を買う
この世から良心消えてごみ増える
戦争で心失う避難民

和歌山市 山田 侃太

介護ロボ姫様抱っこしてくれる
鉛筆を舐めたら解けそうな答
いつまでも砂と遊んでいたい波
安穩とソファの足の無表情

岩出市 村中悦男

安物のみやげに残る旅の悔い
これ以上どう詰めようか旅土産
煮物ぶた長い電話をたしなめる
意地っ張りどちらと言えぬ妻も老い

紀の川市 辻内 次根

美しい国に要ります領収書
大国が偉いわけではない世界
新しい発見をする古本屋
パソコンの分からぬままにはいを押す

鳥取市 大前安子

一言が騒ぎの火種消されない
心奥流れる景色古里よ
両の手で白玉丸く丸くする
どう生きる生き抜くための命受け

鳥取市 山口 千代子

浴衣着てホッと寛ぐ旅の宿
泣く虫よりも黙って蜚身を焦がす
昔を説けば時代の差だと現代っ子
燃えた恋今は思い出だけを抱く

倉吉市 酒井 芙美子

耐えること少なくなつてすぐ切れる
茶目つけがあつてみんなを楽しませ
退職し趣味の人生幕あける
栄光の陰に妻子の助力あり

台風の予告か樹木騒ぎ出す

倉吉市 前田 喜美子

コスト割り目玉商品客を呼ぶ

少子化に身内も減って行く恐さ

料理好き今日も父さん腕ふるう

境港市 遠藤 那珂子

教習所一番前で老眼鏡

一番より三番あたり楽しそう

人並に陰もひなたも持つ私

満足を押し付けられて不平わく

境港市 中井 虎尾

サングラスはずせばやさし目に出合う

夏なのに安倍様の椅子薄氷

しゃあないは今長崎じゃ禁語です

声にはれ顔を見たのがまずかった

米子市 見山 温子

殿の留守テレビ占領高笑い

居なくても居ても気になる殿の位置

嘘ひとつ嘘から嘘へ嘘をつく

魚屋の活気に満ちた声が好き

米子市 吉田 陽子

いい風に出合い残り火燃えている

好き嫌い言わずに盛るあずき飯

泣き止んだ時ハッキリとあきらめる

夕焼けで洗う汚れた色眼鏡

コストより育つ野菜に元気づく

めでたいな親の年まで生きてきた

すっかりと夕日落ちても野良にいる

運賃を切符買うたび確かめる

鳥取県 岩崎 和子

朝顔が幸せそうに軒に咲く

陽がそそぎ万物みんな感謝する

お陽さまのにおいを嗅いでシャツ疊む

夕食の一皿レモン引き立てる

鳥取県 坂本 智子

焼き窯に作る喜び夢かけて

お互いに心開いて見つめ合う

熱燗に今日の仕事を癒される

国民に政治の道も祭りごと

鳥取県 鳥越 鬼一

さようなら瀬戸内少年野球団

輪の中に亡者も入れて盆踊り

ヒトもまた絶滅危惧種になるさだめ

やがてまた欲しがりません勝つまでは

鳥取県 橋谷 静江

懐かしい友と出合った墓参り

一粒の種でお墓を満たす花

千の風聞いてお盆の灯をともす

暑い日は木陰を選び風を待つ

安来市 原 煩惱児

満足に生まれ不満足で逝くはめに
どの道を行こか日本道路網

お宝はないがへそくりなら少々
お疲れさんそのひと言で丸く住む

尾道市 木 曾 一 徳

甚平と浴衣揃いし揚花火

肩ぐるま父と息子の遠花火

命継ぐ四隅を照らす線香花火

花火師の終了ゴング汗と煤

府中市 岩 本 雅 代

雨の日はピリツと辛口カレー食べ

盆踊り母の形見で輪に入り

楽しみはスポーツテレビプラス唄

良き友とビールの泡に花咲かせ

宇部市 高 山 清 子

ライバルにされてるうちが花かもね

失言を無理に引き出すインタビュ―

無添加の隣の言葉突きささり

百葉の長だと飲んで二日酔い

今治市 渡 邊 伊 津 志

若葉風明けっぱなしの硝子窓

愚痴を聞く窓が笑顔に癒される

窓の灯がチカチカ男手が欲しい

欲捨てた心の窓に虹が射す

高知県 い の 静 草

相性はいいというけど耐えている

不退転ここは四股踏み耐える時

傷つけて傷つき丸うなった石

ぐらつかぬ簡素な暮らし身について

唐津市 岩 崎 實

高校総体一人一役佐賀の風

祝日に日の丸たてて目立ちおり

すぐ戻る中途半端の戸締りです

小さくて読めない記事の但し書き

山鹿市 阿 部 ミツ子

右左向き十人十色面白き

湯の町を花嫁さんが人力で

泣く顔も笑った顔もあなたです

人の支え人の繋がり涙する

前月分 取手市 葛 西 清

亭主に押させカーナビします車椅子

お新香でストレス噛んでお茶にする

恨みつらみ桶に流せば梅雨晴れる

貧しいが安らぎの風頬に受け

川柳塔のぞみ
10月句会

日時 10月23日(火) 13時
場所 銀座区民館(地下鉄東銀座③出口)
宿題 「一番」「苦」「お静かに」各2句「自由吟」1句
欠席投句 10月19日必着 播本充子宛
〒193-0832 八王子市散田町2-31-3

平成20年版『全日本柳人写真名鑑』発刊について

日川協では全日本の柳人を網羅した『全日本柳人写真名鑑』を社団法人設立以来、五年ごとに発刊、好評を博してきました。

前回から五年目にあたり、川柳人口も飛躍的に増加している折から、さらに一段と内容を充実し、少なくとも三千人以上を収録する『全日本柳人写真名鑑』平成二十年版を発行したいと存じます。刊行にあたっては、出版委員会を中心として全日本川柳協会が組織をあげて取り組みますが、要は一人でも多くの柳人がこの企画にご参加くださることにあります。

資格は柳人であればなたでも結構ですので、みなさま方には一人でも多くの柳友をお誘い合わせのうえ、この画期的な名鑑に名をつらね、貴名とその作品を日本川柳史に残されるよう、お勧め申し上げる次第です。

社団法人 全日本川柳協会

会長 今川乱魚

理事長 塩見草映

一、書名

『全日本柳人写真名鑑』平成20年版
A5判・約500ページ

二、体裁

本文アート紙・美装本

三、刊行

平成20年3月(予定)全参加者に年鑑を一冊、送付いたします。

四、原稿

- ①姓・柳号 ②本名 ③生年月日
- ④職業 ⑤所属柳社 ⑥住所
- ⑦電話・FAX ⑧メールアドレス
- ⑨自選作品3句(平成15年以降の作品)
- ⑩顔写真(縦横約3cmの近影、写真の裏に氏名を記入)

五、締切

平成19年11月30日(金)当日消印有効

六、書籍発送の為、住所は必ずご記入の上、個人情報に支障のある方は、備考にその旨お書き下さい。

七、参加費

4000円(振替または小為替で申込時に納入してください)

八、申込先

〒530-0041 大阪市北区天神橋

社団法人 全日本川柳協会

〒(06) 6352-2210
FAX (06) 6352-2433

郵便振替口座 00970-9-3575

愛染帖

新家 完司 選

鳥取県 竹信 照彦

涼求めうろうろしても二十坪
(評) 動物園の熊のように、あっちへ行ったりこっちへ来たり。ちよつとでも涼しい所を探すのだが、小さな家にそんな穴場はない。

鹿児島市 五反田 榎子

白無垢を着たことがあるまた着たい

(評) 遠い昔に一度着たことがある白無垢。「また着たい」というのは「また結婚したい」ではない。純粹に「着てみたい」だけ。

大阪府 谷口 義

お茶漬を食べるところがあれば良い

(評) 井物は重すぎる、鰯は大層、そんなと

き、おいしい漬物と梅干でお茶漬けサラサラ

できる店があれば、繁盛するのではないか。

香南市 桑名 孝雄

そう言えば友は半分ほど死んだ

(評) ふと気がつく、友の半分は平均寿命

に達せずにあの世。サバイバルゲームに勝ち

残ったという実感はなく、ただ、寂しいだけ。

倉敷市 撰 喜子

全没の句を大切に持ち帰る

(評) 一週間も前からがらばって作った大切

な句。残念ながら、どの選者にもふられてし

まったが、捨てることなど出来るわけがない。

黒石市 相馬 一花

鳩に似た目をして食べる豆ご飯

カルメンも楊貴妃もいる大浴場

大坂市 板東 倫子

これがまあ論語の国の人たちか

京都府 高島 啓子

ケータイの飽きることない万華鏡

紀の川市 辻内 次根

おいしいと言つて店主を喜ばす

七十歳スポーツ新聞卒業す

ご先祖と監視カメラが僕を見る

海南市 三宅 保州

フランスパン或いは武器でなかりしか

スクランブルになつてしまった目玉焼

ご期待に応えて消える角砂糖

鳥取市 岸本 宏章

かばちや切るときだけ妻が呼びに来る

採算を無視して風車よく休む

手間と金かけて自然が護られる

唐津市 樋口 輝夫

初盆にお供えをする愚痴の山

レシートに明日特売と書いてある

大坂市 北村 賢子

チャン付けで呼ばす孫居てまだ若い

わたくしの余生彩るフラダンス

香芝市 大内 朝子

タイミング 気合を入れて言うゴメン

毎日が楽しいガンに勝たんや

大坂市 坂 裕之

里帰り大阪の夏粘っこい

癌切除後は素直に生きてます

若い娘を見たくてフラリ街へ出る

(評) 正直この上なし。このように、自分

のころのままに、素直に生きたい。深刻と

した若者を見ているだけで元気が出てくる。

弘前市 高瀬 霜石

外人の知り合いがいて自慢する

(評) 「珍しいでしょ!」と珍品を自慢する

のと同じ心理。珍品は本人のものだから自慢

しても構わないが、外人さんはね!..。

吹田市 早泉 早人

自慢話聞いてあげてるボランティヤ

(評) とかく聞き苦しい自慢話。家族も友

人も辟易して敬遠しているのを、フンフンと

聞いてあげるのは立派なボランティヤ。

和歌山市 楠見 章子

昼寝から覚めて西瓜のうまいこと

(評) 平和である。健康である。紺碧の空

で入道雲が笑っている。戦争で焼け爛れた夏

があり、そして今、このような夏がある。

橿原市 居谷真理子

腕組みを解かず言いたいこと言わず
淋しさも痒い程度になって夏

枚方市 海老池 洋

ライバルより一寸頑張ることにする

パン好きな僕と知ってるパン屋さん

和歌山市 古久保和子

打ち水に溺れる蟻もあるのです

栄養は大事見た目はなお大事

八尾市 田邊 浩三

一枚の暑中見舞いが嵐呼ぶ

休み明け獣医の前も長い列

八尾市 宮崎シマ子

足踏ミシンふんで暑さをふっとばす

皆勤賞もらえるほどの医者通い

豊中市 水野 黒兎

天然の素材を誇るわが白髪

まだ傷は浅い単なる物忘れ

鳥取県 山下 節子

こっそりはいや堂々と酒をのむ

くじら幕古い身内が寄って来る

堺市 村上 玄也

押入れがトラウマ閉所恐怖症

身分証明するための免許証

八尾市 村上ミツ子

海の日も海はいつもと同じ顔

堺市 加島 由一

誕生日母に感謝をする日です

弘前市 福士 慕情

葬儀では誰より偉いお坊さん

和歌山市 木本 朱夏

許さない許すと枕裏返す

スコールのような浪費を知らず死ぬ

年金がケチの哲学引き寄せる

鳥取市 夏目 一粋

こんな日もあるさゆつくり髪洗う

野地蔵のどこかが亡父の顔に似て

富田林市 片岡智恵子

子が住めば左遷地だつて懐かしい

愛のある嘘はウソだとすぐわかる

三田市 堀 正和

ねんごろに焼いた鯛から睨まれる

黙祷に次は私の番かいな

寝屋川市 太田とし子

Vサイン妻が三日も留守という

釣つたのか釣られたのかなまた夫婦

河内長野市 村上 直樹

議事堂のドラマから目がはなせない

一人酔い二人酔いしてみな一緒

米子市 政岡日枝子

神様に全部任せてある余生

本気だな握手に左手も添える

大阪市 小谷 集一

スランプと思う実力かと思う

七十を若いと思う歳になり

加東市 中上千代子

大阪市 奥村 五月

杖なしで歩いて酒も他人の倍

粗茶ですと酒より高いお茶がでる

鳥取市 永原 昌鼓

定年が欲しい主婦の座介護の座

どうせなら動いて汗をたんとかく

鳥取市 永原 昌鼓

祭囃子と母の組板リズムカル

ばあさんと歩くと腕にぶら下がる

大阪府 初山 隆盛

泣いている顔へ非情のマイク向け

ホテルよりやはり我が家の青畳

藤井寺市 中島 志洋

うろうろと動き逢えない待ち合わせ

暇だから金と便秘に気を遣う

鳥取県 石谷美恵子

真つ当に生きてるそれが楽だから

蝉しぐれこんな馬力で生きようよ

西宮市 片山 忠

羨ましい家だポストが家の前

美まじしい家だポストが家の前

和歌山県 森下よりこ

ど忘れを競えば妻に勝っている

食べ頃サイイン見逃されたメロン

尼崎市 春城武庫坊

ごめんねと言えたら三日良い天気

寝屋川市 籠島 恵子

大阪府 前 たもつ

大阪府 米澤 淑子

鳥取市 中宇地秀四

和歌山市 たむらあきこ

入室禁止 脱皮しているところですよ

尼崎市 春城 年代

ダンゴ虫もいも虫も踏む朝の修羅

堺市 奥 時雄

金だしてまで幻の酒要らん

八尾市 高杉 千歩

薬だと思ひ三度の箸をもつ

米子市 中井 ゆき

年金を待つてはおれぬ盆仕度

池田市 上嶋 幸雀

迎え火も送り火もせず旅行する

米子市 小塩智加恵

買ひ替えた網戸涼しい風通す

大阪市 松尾柳右子

政治家がどうあれうまいめしを食う

篠山市 円増 純子

今宵また幸せ色のシンジユース

鳥取市 山宮 愛恵

湯上がりの裸王子がつかまらぬ

高知県 いの 静草

表札が一足先に枯れている

安来市 原 煩悩児

働いて汗じつとして汗寝ても汗

大阪市 森田 明子

うっとり大金と昼寝しています

大阪市 津守 柳伸

エレベーター乗り継ぐ母の旅プラン

堺市 志田 千代

お仕置とも知らずに猫はドアの外

和歌山市 田中 みね

被災地はいかにもと思う蟬しぐれ

高槻市 左右田泰雄

どしゃ降りが叩きのめした蟬の殻

鳥取市 土橋 睦子

蟬殻を啜えて蟻も冬仕度

札幌市 三浦 強一

ヒルズから青テントまである格差

西宮市 坪井 孝一

気分変え氷川きよしを買つてみる

八王子市 播本 充子

裕次郎も好きだったコロツケパン

三田市 北野 折男

義理果たす喪服の出番メール来る

寝屋川市 北田たよし

雑種犬お金をかけて手術する

鳥取市 土橋 螢

萩桔梗母に逢いたくなつてきた

寝屋川市 富山ルイ子

何時からか他人と比べなくなつた

松原市 玉置 重人

バチンコへ行くのに車光らせる

鳥取県 羽津川公乃

年齢で選んだ服は地味過ぎる

寝屋川市 森 茜

辛すぎる煎餅腹がたつてくる

姫路市 古川 奮水

ヒマワリが一本下を向いた午後

八尾市 吉村 一風

太陽と闊歩している老いの靴

岸和田市 雪本 珠子

独り者街の灯りに癒される

河内長野市 坂上 淳司

原発のベール剥がした震度六

藤井寺市 鴨谷瑠美子

守るものいっぱいフェンス高くする

西宮市 藤本 直

Eメールときめく女文字はなし

大阪市 柴本ばつは

後半の筋書き医者言う通り

堺市 和田つづや

一匹も一人も変りないいのち

大阪市 榎本日の出

限りある命ひとつがはずまない

大阪市 近藤 正

年金の元を取るまで死ぬません

鳥取市 徳田ひろこ

潮の香のしない貝殻節踊る

羽曳野市 森下 一知

緑日の金魚を馴らすポリバケツ

堺市 矢倉 五月

夫へのつんけん亡母に詫びて寝る

武蔵野市 亀井 円女

まあええわこんなもんやと楽天家

神様はご褒美なんか下さらぬ
大阪府 高田美代子

しんどいと言つても食べる物は食べ
大阪府 小栢こずえ

どの雲も母住む村へ流れ着く
奈良県 渡辺 富子

老いるとは文字までふるえ干からびる
東かがわ市 川崎ひかり

年寄りに儲け話を持つてくる
堺市 荻野 像山

若さうに見せていますが骨粗症
豊中市 松尾美智代

百日紅今日もお暑うございます
京都市 都倉 求芽

よく忘れよく寝て老母は恵比寿さま
大阪市 津村志華子

指先に女がもどる手芸の日
大阪市 渡部さと美

何となく夏のくしゃみは間が抜ける
鳥取県 岩崎 和子

呉れてやる積りで金を用立てる
弘前市 高橋 岳水

失敗を話すとみんな活気つく
三田市 石原 歳子

鍵つ子で育てた子等が逞しい
鳥取市 福西 茶子

サプリメント飲んで粘っているいのち
高槻市 佐甲 昭二

夏やせは私にとって死語である
松江市 松浦登志子

幸運な旅です空は晴れている
池田市 栗田 久子

赤を着てまた老春の血を燃やす
松江市 三島 淞丘

だんじりに印半纏茶髪の娘
大阪市 川原 章久

百寿まで生きるつもりで辞書書右に
出雲市 園山多賀子

生きているのが不思議かな心奏え
鳥取市 田村 邦昭

慰めの言葉もらつた長電話
和歌山市 田中 すず

あたしにもバチンコ資金頂戴な
松江市 安食 友子

人並と思ひ込んだら気が軽い
倉吉市 桃谷 和郎

妥協する鉛筆折れてばかりいる
大和高田市 鍛原 千里

出る杭は打たれぬ杭腐りゆく
高槻市 富田 美義

広告の厚み曜日がわかるほど
立川市 柏野 遊花

外からは見えぬ我が家の火の車
大阪市 大川 桃花

憧れた異国に遺影連れて行く
枚方市 伊達 郁夫

口べたに良く効く葉見つからぬ
鳥取市 西川 和子

ご破算で今日もケロッと生きていく
唐津市 坂本 蜂朗

うらめしいものの極みは拉致の船
和歌山市 武本 碧

九条に反対の鳩増えてゆき
相生市 村木 信子

友達が好きで守っているけじめ
鳥取市 有沢せつ子

父さんを刑事にさせるサスペンス
大阪府 澤田 和重

リハビリへ効いてくれよと通う日々
加東市 黒崎美紗子

レトルト食おんなは強くなりました
今治市 塩路よしみ

アンコールしたら歌わぬおしゃまな児
海南市 堂上 泰女

恩師より老けた友ありクラス会
唐津市 宗 水笑

ファッションへ興味津々まだ女
鳥取市 吉田 弘子

御無沙汰を美人女将の酌に酔い
日立市 加藤 権悟

山並はるか世界遺産は祈る道
紀の川市 木村 徑子

写真判定パッチリ写る鼻の下
大阪市 太田としお

平成十九年度 路郎賞

路郎賞準優秀作第一席

羽曳野市 徳山 みつこ

吹田市



穴吹尚士

本日の事を言うから嫌われる

ストレスがあるのは呆けてない証拠

お互いに老いたな妻の笑い皺

涙腺の蛇口が甘くなっている

前科にはならないほどの罪重ね

還暦からの残る人生を、ふとした機会から川柳に託すことになりました。川柳塔に入会して、今では川柳塔とその仲間を生き甲斐としています。

この度、幸運にも路郎賞という大きな賞を頂けましたのは、定年川柳の大勢の皆様の、右代表としてであらうと思っています。

背に重い賞ではありますが、その名に恥じないように、これからも精進して参ります。

柳歴

平成十一年　そうりゆう会入会（川柳入門）
 同年　川柳塔社　誌友
 平成十二年　高槻川柳サークル卯の花入会
 同年　川柳塔社　同人
 平成十三年　川柳塔社　同人
 平成十五年　毎日川柳教室（橋高薫風師指導）入会
 豊中もくせい川柳会入会
 同年

路郎賞準優秀作第二席

藤井寺市 太田 扶美代

おみくじは大吉焦ることはない

折り紙の苦手なままで祖母になる

辛い大根嘘をついている

豊かさの中でしたたかに孤独

駐輪場ここから仰ぐ月が好き

平成十九年度 川柳塔賞

川柳塔賞準優秀作第一席

和歌山市

紀の川市 宇野 幹子



柏原 夕胡

明日からがあって決心つかぬ今日

日めくりのように捨てたい過去もある

ジャンケンポン何を出しても負けている

泳ぐのが下手な河童もいるのです

桜散る命のバトンタッチして

川柳塔賞準優秀作第二席

大阪市 原 田 すみ子

川柳塔賞をいただくことは私の夢でした。

それが現実のものとなり喜びで胸がいっぱい
です。まだまだ未熟な私ですが、皆様に支え

ていただきながら自然体でふわりふわりと楽
しく川柳を続けていきたいと思っています。

本当にありがとうございました。

柳 歴

平成七年

平成十四年

平成十五年

川柳塔わかやま吟社入会

川柳塔わかやま吟社同人

川柳塔誌友

太陽と月ほど違い夫婦です

二人から起承転結またふたり

元気なら笑い飛ばせる事なのに

油断した後ろ姿は正直だ

路 郎 賞 得 点 表 (応募総数145名)

1位=5点 2位=4点 3位=3点 4位=2点 5位=1点 (表の数字は得点)

選者	作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
河内	天笑			5				4									3	1			2
西出	楓楽	3		5		1									2						4
藪田	猿沓						4	1					2			3			5		
菊地	政勝				4			1								5	3		2		
都倉	求芽		5			4					2					1				3	
岩佐	ダン吉	2						5				4	3							1	
籠島	恵子		4		1									5				2	3		
鴨谷	瑠美子											5			2	1	3		4		
榎原	道夫		5					3	1					4					2		
瀬戸	まさよ				5			1			4						3		2		
藤村	亜成						1				2			4	5			3			
北野	哲男		3					5				4					2	1			
西内	朋月	2					3						4			5	1				
山本	義子		4				2		1							3	5				
牛尾	緑良			2							4	3		5				1			
古久保	和子				1			5					2			3		4			
岩崎	みさ江		3		1				5							2		4			
岸本	宏章	1		3							2					5			4		
倉益	一瑤			4						2				3		1			5		
武田	帆雀			5						4						1			2		3
伊藤	寿美		3							4			2			5				1	
小川	注湖						4					2	5			3		1			
森	茂美			3				2				4						5		1	
石原	淑子			5	1											4	3		2		
平田	実男			1	3								5	4		2					
市丸	晴翠		5	3				4									1	2			
高橋	宏臣				1	2					4							3		5	
合 計		8	32	36	17	7	14	31	7	10	18	22	23	23	9	44	24	27	31	15	5
	春木圭一郎	太田扶美代	徳山みつこ	山岡富美子	小泉ひさ乃	井丸 昌紀	田中 章子	石堂 潤子	奥谷 彩子	大橋 政良	村上 玄也	岸 桂子	牧野 芳光	大内 朝子	穴吹 尚士	升成 好	坂上のり子	吉岡 修	柿花 和夫	土橋 房枝	

川柳塔賞得点表 (応募総数72名)

1位=5点 2位=4点 3位=3点 4位=2点 5位=1点 (表の数字は得点)

作家 選者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
河内 天笑					5		2			4	1					3				
西出 楓楽					4					5		3				2	1			
藺田 猿沓							3				5			1	4			2		
菊地 政勝								1				3		5	4				2	
都倉 求芽							5	4		3		1		2						4
岩佐ダン吉							5			2		3	1							
籠島 恵子					4	3		1				5	2							
鴨谷瑠美子		4			3	5		2				1								
桑原 道夫			1									3	5		2			4		
瀬戸まさよ							1		2				4		3			5		
藤村 亜成					1		3	4					2			5				
北野 哲男								2				4		5					1	3
西内 朋月	1							2							3			2		5
山本 義子			4				2				3				5	1				
牛尾 緑良					4		5			1		3						2		
古久保和子		3	1		4							5						2		
岩崎みさ江							4	5			2	1	3							
岸本 宏章		1			4		3			5	2									
倉益 一瑤					4			3			2		5			1				
武田 帆雀		1						2			3		4			5				
伊藤 寿美					2			4				3	5							1
小川 注湖					3	2	5				1				4					
森 茂美							1	5				3		2			4			
石原 淑子		4								3		2	1			5				
平田 実男		1			3					4		2				5				
市丸 晴翠					4			2					3			5			1	
高橋 宏臣		4					2	5									1	3		
合 計	1	18	6	0	45	10	41	44	2	27	19	37	40	8	28	36	6	20	4	13
	木村 忠義	土屋起世子	岩崎 玲子	矢野 良一	柏原 夕胡	荻野 像山	原田すみ子	宇野 幹子	中岡 香代	三浦 強一	小沢 淳	辻内 次根	花岡 順子	川島和歌子	神野千恵子	加藤 権悟	三谷たん吉	平野あずま	神野宇乃子	笠原乃りこ

平成十九年度二賞選考委員

第一次選者（七名）

河内 天笑・西出 楓楽・奥田みつ子・小島 蘭幸
前 たもつ・木本 朱夏・山本希久子

第二次選者（二十七名）

本社関係 河内 天笑・西出 楓楽

地方関係（二十五名）（一）内は人数 ブロック内五十音順

【北海道・東北 関東 北陸ブロック（二）】

蘭田 猿香・菊地 政勝

【京都・奈良ブロック（一）】 都倉 求芽

【大阪ブロック（六）】

岩佐ダン吉・籠島 恵子・鴨谷瑠美子

桑原 道夫・瀬戸まさよ・藤村 亜成

【兵庫ブロック（三）】

北野 哲男・西内 朋月・山本 義子

【和歌山ブロック（二）】 牛尾 緑良・古久保和子

【鳥取ブロック（四）】

岩崎みさ江・岸本 宏章・倉益 一瑤・武田 帆雀

【島根ブロック（三）】

伊藤 寿美・小川 注湖・森 茂美

【岡山・広島・山形ブロック（二）】

石原 淑子・平田 実男

【四国・九州（二）】 市丸 晴翠・高橋 宏臣

昨年九月から今年八月の間に

誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を
選択して応募してください。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳
塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、
間違いないようにお願いします。

平成十九年度各賞選者

愛染帖賞 新家 完司

檸檬賞 川上 大輪 松本 文子

一路賞 小西 雄々 松原 寿子

各地柳壇賞 遠山 可住 播本 充子

受賞者の皆さんおめでとう

河内 天笑

二賞選考に臨んで八月十二日午前十時、新事務所に集う。六人で満員になった旧事務所とは打って変わって明るくゆとりのあるスペースが有難い。二賞とも最終的に二十名に上る作業は例年通り。

今年は男性群が盛り返しを見せ六賞を二分、一昨年、昨年と女性群の独走する風潮にストップをかけた事に意義がある。

路郎賞の穴吹尚士さんおめでとう。地道な作風はご本人そのものです。そんな作風が大方に受け容れられた。徳山みつこさん、太田扶美代さん来年を期待します。

柏原夕胡さん、そして僅差で準賞の宇野幹子さんおめでとう。和歌山の女性群は相変わらず強い。翠洋会の原田すみ子さん今後へ夢を持って下さい。

愛染帖賞の牧測富喜子さんおめでとう。そして檸檬賞の高瀬霜石さん、一路賞の福士慕情さん共にみちのくの男性作家が奮起されています。各地柳壇賞を三幸川柳会の木本朱夏さんが獲得おめでとう。今年、和歌山勢三人、大阪勢四人、弘前勢一人、兵庫が一人と地域的に片寄る結果になりました。また来年に力作を期待しています。

二賞選考経緯

木本 朱夏

連日気温30度以上という猛暑の八月十二日、第一次選考委員六名が移転まもなくの新事務所へ集合しました。(小島蘭幸副理事長は都合により欠席。)

平成十九年度・路郎賞には百四十五名、川柳塔賞には七十五名の応募がありました。

応募された作品から氏名を切り離し、番号を打つ作業から始め、天笑主幹・楓楽理事長以下、委員が各作品を選考。のち規定違反がないか、昨年の九月号から本年八月号までの川柳塔誌で逐一チェックしました。

最終は、主幹が路郎賞二十編・川柳塔賞二十編に絞り込み、コピーして全国の第二次選者二十五名に郵送しました。

相変わらずの猛暑の二十二日、返送された選考葉書を事務所で集計の結果、受賞者が決定しました。三年ぶりに男性が路郎賞を受賞されました。

平成十一年は、二賞選考方法が現在のようなかたちに変更された年ですが、路郎賞には二百五十五名・川柳塔賞には百二十三名応募しています。

年々応募者が減少していることを、大変残念にも、寂しくも思っております。一年間の自分の作品を見直す機会ととらえて、前向きに路郎賞・川柳塔賞に挑戦して頂きたい。

二賞候補者在住地

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
路郎賞	鳥取市	藤井寺市	羽曳野市	河内長野市	大阪府市	大阪府市	神戸市	堺市	鳥取市	砂川市	堺市	出雲市	倉吉市	香芝市	吹田市	大阪府市	シドニー	四條畷市	堺市	岸和田市
川柳塔賞	神戸市	和歌山市	大阪府市	奈良市	和歌山市	堺市	大阪府市	紀の川市	岸和田市	札幌市	札幌市	紀の川市	大洲市	出雲市	大阪府市	日立市	シドニー	岐阜市	豊中市	高槻市

受賞作品

西宮市 牧 渕 富喜子



牧渕富喜子

なる程と聞いている間に貧富の差
すり切れたものばかりなり父の部屋
切り抜いて試した事のないレシビ
玉ねぎの芽にうながされ励まされ
食いものにされてたまるか竹を踏む

評 牧渕富喜子：「なる程と」の鋭い斬り込み。「すり切れたものばかり」という比喩の巧みさ。「試した事のない」という自嘲。いずれも完成度は高く、受賞に値する。

堀正和：「さてどこへ」の川柳味を高く評価する。掲出の三句いずれも現代社会への目配りが行き届いている。

岩崎公誠：三句とも単純なユーモアではなく、面白さの底に自嘲と皮肉さが流れていて男っぽい味を出している。

穴吹尚士：妻とのかかわりをケレン味なく詠い愉快な作品になった。軽い自嘲が共感性を増している。

(新家完司)

準賞作品

三田市 堀 正和

さてどこへ片づけたのか日章旗
飽食のツケがニートの数だらう
前向きに生きて年金足りません

大阪市 岩 崎 公 誠

箱入りのメロンが届く筈がない
頃合いに寄るがビールは出てこない
焦げ過ぎのパンも齧って生きている

吹田市 穴 吹 尚 士

立法も司法も妻が取り仕切る
大声を出しても妻に敵わない
ゴミほどのダイヤで妻にありがとう

雷鳴と激しく降る雨音に、猛暑の終りをふと思い佇んでいましたら、思いがけない受賞のお知らせに驚き、身中にも稲妻が走りまわりました。思い返せば不器用な背を何時も押して下さった柳友の方々の、お蔭をしみじみと思ひ感謝の念新たに致しました。ありがとうございました。

柳 歴

平成二年四月 西宮北口川柳会

同年 川柳塔社 誌友

平成七年 川柳塔 同人

平成八年 茴香の花賞受賞

受賞作品

弘前市 高瀬 霜石

ミルクから骨壺までの消費税

評 ミルクと骨壺の対比が抜群。人の一生が凝縮されている句であるが、さらに生まれても死んでも消費税という法の網が絡み付くという強烈な風刺である。しかし句に嫌みがなくスッキリと纏められた、まさに非の打ち所のない句である。

(川上 大輪)

生れた時から死ぬまで人は税に苦しめられて生きていく。霜石さんはそういう世相・人生・世の中の諸々のことをびたり、この一句に詠まれた。これ以上もこれ以下の句もない、即一席秀句に頂いた。また年間を通して実に毎回秀作を投句され楽しませて頂いた。

(松本 文字)



高瀬 霜石

今年はツイているのです。6月は熊本・噴煙吟社の「濤明賞」に、8月は川柳展望社の「展望賞」にまぐれ当たりし、実にラッキーと思っていたら、10月はなんと「椽椽賞」ですか。この調子だと、12月は年末ジャンボ宝クジでも挑戦すべきでしょうねえ。感謝。

柳 歴

昭和六十一年 弘前川柳社入会

平成 六年 川柳塔社同人

平成 十一年 路郎賞準賞

平成 十五年 路郎賞

平成 十六年 愛染帖賞

準賞作品

他人には搔いて貰えぬ足の裏
徳田ひろこ
森英恵の水着一枚持つている
谷口 義

候補作品

痒みに耐えているのですか仁王様
三宅 保州
たんこぶを作り大人になっていく
伊藤 寿美
私を幾度押える深呼吸
政岡日枝子
一と一足せば二になる満足感
神野宇乃子
懸命にデザインしても蛙の子
樋口 輝夫
血税を吸った布団が干してある
桑田ゆきの

受賞作品

弘前市 福士 慕情

一本の薬だが友が息をつく

評 苦境の友へ何がしかの援助をしたが：

一本の薬という謙虚な上五が光る。

再起した友との再会が楽しみだ。

準賞作品は可憐に燃える女の心情も表裏一体とは別

に、現代を生きる処世術と言える。

(小西 雄々)

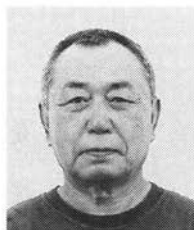
庶民の懐は、決して豊かとは言えないだろう。一本の

薬とはもちろん比喩であろうが噛みしめるほど短詩型の

命をここに見ることが出来る。人間らしさと、温かい情

を感じる。準賞作品も人間味溢れている句だと思ふ。

(松原 寿子)



福士 慕情

川柳を始めて十年、この節目に一路賞受賞の報を受け、身に余る光栄に信じられない気持ちです。「下手な鉄砲数打ちや当る」とは良く申したもので、まだ川柳の道を模索している私が栄えある賞を頂くことに面映さを感じております。私の句を拾い上げて下さった、夏目一粋氏と両選者に心から感謝。

柳 歴

平成 九年 川柳塔みちのく同人

平成 十年 川柳塔社同人

平成十二年 川柳塔社理事

平成十六年 川柳塔みちのく副主幹

準賞作品

朱と燃える女の裏に棲む阿修羅 大内 朝子

母さんのプールで聞いたセレナーデ 備後美代子

候補作品

戦国のロマンを秘めて天守閣 小池 幸子

へその緒がまだついているフリーター 高瀬 霜石

通帳をゆすつて米と灯油買う 宇野 幹子

受賞作品

和歌山市 木本 朱夏



木本 朱夏

よく弾む毬がときどき憎くなる

評 時に応じ機に思いうがままに弾む毬、常々の畏敬も羨望も時に憎くなる。このベテランにして然り。ドキリと胸を刺してウーンとうなつてしまいます。

準章二句は、男性と女性の視点の面白さです。

候補作品は、それぞれに素敵な個性が息づいています。

(遠山 可住)

年間約一万四千句(対象作品百二十句)の中で、この受賞句は、他を寄せ付けない光を放っておりました。人情の機微を端的に表した一句。惜しめない拍手を送りましょう。

準賞は繊細さと逞しさ、暮らしの中の動と静の句。

候補作品は、前向きな姿勢がすばらしい。

(播本 充子)

準賞作品

大根がおいしくなって足が冷え 鹿島 蘭

頭打ち汗流す他ないだろう 岩佐ダン吉

候補作品

一期一会歩きましようかもう少し 河原恵美子

種袋ふれば明日が踊りだす 澤田 千春

音無しの構えで鰯食べている 牧野 芳光

シンプルなセンス背筋が伸びている 福田 和子

拙い句集を出したとき、今は亡き橘高薫先生に『往きて復る』の実践を奨める』との序文をいただきました。また「厳しい道をますます厳しく歩き続けて下さい」とのお言葉は、文字通りの愛の鞭と受け止めて苦吟呻吟の日々でした。思いもかけず各地柳壇賞をいただき、あらためて私の川柳の原点を見つめ直し、精進を重ねたいと思います。ありがとうございます。

柳 歴

昭和五七年 和歌山三幸川柳会入会
昭和六二年 川柳塔社同人

誹風柳多留一篇研究 26

小栗 清吾・伊吹和男

山田 昭夫・増田忠彦

山口 由昭

清 博美

174 五十七人八あかさかさにてにげ

小栗 牛若丸が、金売り吉次と共に奥州へ下る途中、美濃青墓宿で盗賊熊坂長範を退治した話を詠んだ句。謡曲『熊坂』（観世流）には「加賀の国には熊坂の、この長範を初めてして、究竟の手柄の痴者ら、七十人は与力して……」とあって、熊坂長範総勢七〇人が牛若丸一行を襲ったが、牛若丸の奮戦で「面に進むを十三人、同じ枕に斬り伏せられ」てしまった。その結果残りの五十七人が隣の赤坂宿として逃げて行っただろうという次第。

なお、前述の『熊坂』では場所が赤坂宿になっているので、この謡曲を根拠とすると「赤坂として」が説明がつかず、一方「現在熊坂」では青墓宿になっているものの総人数

の記述がない。異本があるかも知れないが、両方を突き混ぜた句か、あるいは講釈種の類を基にしたものか。

熊坂も十三人に目を廻し

宝八 9 15

くま坂もけつまつく事十三度

宝12 満1

山田 賛。細かい詮索は不要でしょう。作者がうる覚えで作る場合もあり得る。
清 賛。

175 どこのかみさんだとなぶるかねの礼

小栗 鉄漿の礼は、女性が初めて鉄漿を付けたときに、慣習によって鉄漿を貰い集めた七軒の家へ礼に行くこと。

初めて鉄漿を付けて、面相が変わった娘をからかうという類句多数の一。もちろん悪意

ではなく、親しみを込めてなぶっているのである。

どなたかと思ひやしたとかねの礼

安一 智2

かねの礼どりや見よふぞといやがらせ

一〇 24

伊吹 賛。親しみを込めて、成る程。

清 賛。かみさん連中のなかに新しく入ってきた一人として、歓迎しているのである。

176 とまり客かしわもちでもよすぎやす

小栗 柏餅は、二つに折った敷布団にくるまつて寝ること。（江）

客を泊める家の人が、客に対して蒲団が十分でないのをわびると、客が「いえいえ、柏餅でも上等すぎるくらいです」などと恐縮している様子。

せんべいを客によぎなく柏餅
八五 33

177 あんただけでほらをふくハとのらでいひ

小栗 よくわからない。

「あんただけで」不明。「野良」とあって田舎を詠んだ句であるから、「あんただけで」（あ

れだけで、あの程度のことです）を濁って田舎を表現したものか。

「法螺を吹く」は、直接的には田舎の庄屋が村中への合図として法螺貝を吹いたことを言うのであろうが、「自慢する」の意もあるかもしれない。

そうすると句意は「あれだけのことで法螺をふいている（あるいは自慢をしている）」と野良で言っているということになるが、何のことがよくわからない。

庄屋で婚礼でもあるか。

伊吹 庄屋の婚礼に賛。

山田 あ程度の事で法螺を吹くなんて、と庄屋を非難しているように思えるが、具体的内容は分かりません。少なくとも婚礼ではないでしょう。

山口 礎説前半に引つ掛かります。召集用の合図として法螺を吹く風習があったのでしょうか。あったとすれば庄屋の大袈裟に対して後で野良の非難。

清 右のようなことか。

小栗（再説）山口様。合図として（召集用かどうかともかくとして）法螺を吹くかもしれないと思つたのは、単にそれらしい句があるだけのことです。

ほら貝をふけははたけであんだなあ

明四信 4
ほらがいもふくかと庄や下女へい、

案八宮 3

庄屋の頓死ほら貝をふきたてる

見利寛五礼 3

ほら貝の一ト村ひびく鹿鳴たち 七四 24

山口 右の例句で納得です。庄屋が大した事でないのにホラ貝を吹いたのでしょうか。人騒がせな庄屋である。

178 あつがみをへかすやうなハげびやう也

小栗 薄紙を剥くようなは、物事が少しずつはつきりしていくさま。特に病状が少しずつ日ごとによくなるさまにいう（「日」）。

病氣は薄紙を剥くように少しずつよくなるもので、厚紙を剥くようにガバツとよくなるのは仮病である。

厚紙をへがして虚病本腹し 一〇六五

清 賛。

179 へつついを直すとじきに預けられ

小栗 不明。

想像するに、竈の修理に関わる禁忌があり、それを無視して修理したため「預けられ」る

事態になったというのではないかと思うのだが、具体的にわからない。

『ことわざ大辞典』（小学館）に次の二例が上がつている。

①妊娠中には竈の修理をしない。修理をする、かまどの神をこわすことになり、安産できないという（播州赤穂地方の俗信および俚諺）。

②子供が生まれた年に竈を造ると人死ぬ（大和迷信集）。

こんな事を踏まえて、妊娠中に竈を修理したため難産で母親が死んでしまい、赤ん坊は生まれて直ぐに里子に出されたというストーリーを考えたが、もとよりどうしようもない駄作解。

増田 駄作解です。かまど直しは、家の乱れを直すといった意味ではなからうか。ドラの乱行や散財で乱れた家をどうにかつくりつつ後、直ぐにドラを伯父の家などに預けるのである。

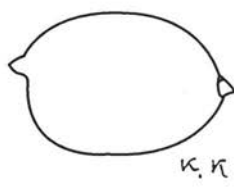
山口 同右。かまどには「一家の経済」という意味があつて、かまどを直すのは財政再建ではないか。やはりドラの散財の結果ということになる。

清 右二説なるほどと思うが、ドラを預けるがすつきり納得できない。

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)



「ほちぼち」

鈴木公弘選

お年頃ほちぼち親を煙たがり
ほちぼちと言う商人にある含み
残り火へほちほち油注いでいる
糸切り歯ほちほち愚痴が多くなり
ほちぼちとせかせかがいて波高し
平和惚けほちほち戦したくなる
大物がほちほち顔を出す時間
陽は西へほちほち花も枯れて来る
ほちぼちで金にならない向う鐘
儲けてることをこまかすほちぼちだ
飛鳥美女シミがほちほち目立ち出す
雲行きが悪いほちほち帰ろうか
存在に泣いてほちほち主婦の顔
子育ての結果ほちほち出るころだ
ほちぼちと帆は西方へ向いている
ほちぼちに言い尽くされる浪速っ子

さいたま市 星野 育子
泉佐野市 稲葉 洋
松江市 三島 崧丘
雲南市 菅田かつ子
可見市 板山まみ子
出雲市 竹治かし
大阪府 澤田 和重
鳥取市 西川 和子
美作市 小林 妻子
川西市 西内 朋月
弘前市 今 愁女
池田市 栗田 久子
橿原市 居谷真理子
奈良市 尾畑なを江
鳥取県 石谷美恵子
和歌山市 武本 碧

「ほちぼち」

西口いわゑ選

ほちぼちの声で浪速は活気つく
待ちぼうけの予感眼鏡を拭いている
慌てるなほちぼち逝こういい婆婆だ
ほちぼちと生きて桜の如く往く
北浜ではほちぼちと言う笑みの顔
マイペースほちぼち行こう花の道
ほちぼちと傷から抜けて来た笑顔
父親にほちぼち距離を置く娘
ほちぼちやれば老いてもうまく出来上る
態度変わるほちぼちクスリ利て来た
神様も手加減じよじよに親の顔
ほちぼちで良いではないか蝸牛
ほちぼちと一本指で子にメール
老犬もボク気遣って歩いてる
年金もほちぼち程度なら飲める
三代先見すえほちぼち苗木植え

河内長野市 村上 直樹
米子市 林 瑞枝
熊本県 高野 宵草
西宮市 藤本 直
姫路市 古川 奮水
米子市 澤田 千春
八尾市 宮西 弥生
京都市 高島 啓子
尼崎市 春城武庫坊
豊中市 安藤寿美子
三田市 北野 哲男
松江市 三島 崧丘
岐阜市 平野あずま
シドニー 坂上のり子
香南市 桑名 孝雄
大阪市 古今堂蕉子

人情はほちほちがよいお付き合ひ
存在感ほちほち薄れゆく不安
句読点つけたほちほちみまからう
叶わない夢をほちほち塗り替える
追伸にほちほち本音書いておく
走ったらこけるほちほち生きなはれ
長生きはほちほちやってきたおまけ
ほちほち同士よう気が合つて見る夕陽
改革の成果ほちほちでは遅い
迷子札ほちほち用意されそうだ
プチ家出ほちほち帰る謝ろう
ほちほち帰ろかと言つてからの酒
メタボからほちほちとくる果たし状
ほちほちだけど時計の針は生真面目だ
この星はほちほち滅ぶしかないか
ほちほちと女に変えてゆく鏡
衣更えほちほち捨てる物探す
夫にもほちほち料理教えとこ
ほちほちやると案外事はちゃんといく

秀句

軸吟

西脇市	七反田順子
大阪府	野田 栄呼
弘前市	櫻庭 順風
鳥取県	羽津川公乃
大阪府	川久保睦子
和歌山市	福本 英子
豊中市	藤井 則彦
西宮市	山本 義子
鳥取市	春木圭一郎
堺市	矢倉 五月
紀の川市	木村 徑子
和泉市	横山 捷也
和歌山市	楠見 章子
枚方市	寺川 弘一
羽曳野市	徳山みつこ
八尾市	生嶋ますみ
大阪府	津守なぎさ
大阪府	山本加お里
八尾市	吉村 一風
富田林市	中井 アキ
米子市	白根 ふみ
大阪市	原田すみ子

ほちほちで宣し返してくるなら
商談はほちほちにしてトラ話
仮設住宅小さな自由ほちほちと
ほちほちと袋の底が見えて来た
青春のシンボルほちほち十五歳
やり直し利かぬ旅ならほちほちと
ほちほちは関西弁と思うてた
叶わない夢をほちほち塗り替える
クレオパトラの鼻がほちほち欠けてくる
ほちほちと殯の森へ行くつもり
九条をほちほちと虫が食う
風の盆ほちほち稲の花が咲く
ほちほちと裏も表も見ています
ゆつくりでええでと母に借りたまま
どないでつかほちほちでんなぞらよろし
花道をはずれゆつくりついて行く
座敷わらしこ出そうだおほろ月だから
品格はほちほちでよし愛がある
煩惱がほちほち褪せてゆく静か

秀句

軸吟

河内長野市	山岡富美子
大阪市	鶴田 遠野
伊丹市	山崎 君子
豊中市	吉田あずき
寝屋川市	平松かすみ
弘前市	高橋 岳水
西宮市	秋元 てる
鳥取市	羽津川公乃
藤井寺市	高田美代子
奈良県	渡辺 富子
豊中市	水野 黒兎
鳥取市	土橋 螢
松原市	玉置 重人
大阪市	柴本ばつは
大阪市	井丸 昌紀
八王子市	川名 洋子
弘前市	斎藤 劼
西宮市	亀岡 哲子
香芝市	大内 朝子
大阪市	神野千恵子
寝屋川市	籠島 恵子
芦屋市	黒田 能子

ジョーカーがほちほち出番ねらつてる

それから

中原 諷人選



それからがあつて目覚める朝である
それからハッピーエンド探す旅
いつ果てたそれからそれへ日記書く
それから私の道は泥まみれ
敗戦のそれから餓鬼の青春譜
それから父の凱旋待つていた
それから人を疑う癖がつき
教科書に墨それからの文科省
それからと問われてやおら手帳出す
それからがアツという間に通り過ぎ
それからと訊ねぬ齢に子が育ち
九条のおかげそれから戦なし
父逝きてそれから主席兄となる
肝心なそれからあの指示がない
それから母の代りを負うた日日
それから距離遠くする火の噂
悩み事それから枝を切り落とす
リタイアのそれから風吹くままに
それからを許す心のスベアキー
喧騒が巣立ち平穏甦る
巣立ちから母の視線は空ばかり
駅下りてそれから長いアブローチ

照彦 茶子 喜子 那珂子 可住 シマ子 あやめ 美義 末吉 螢 四郎 東吉 智加恵 准一 康子 弥生 雄々 一のり 雅明 充子 週行

発信器つけたらおとなしくなった
それからの判断しかと目を開く
信管を抜いてそれから言う無心
欲望をみんな満たしてから砂漠
それからは愛より夢と書いてます
コウノトリそれからゆかり風に溶け
それからって何の話をしていたかな
同病と知りそれからの深い仲
それからねそれからねと母の傍
ペンノートそれから辞書も持つて来て
それからの話は明日紙芝居
母逝つて少し気にして切る夜爪
それからが欲しくて電池入れ替える
百度参りそれから付ける句読点
それからの動きに無駄がなくなった
佳
それからの天下せつせと詩磨く
それからの恋の行方は白星だ
一病を得てから点る生命の灯
千の風それから墓が遠くなる
それからの道まだ谷も山もある
人
種まいてさてそれからは手が抜けぬ
地
それからとなかなか閉じれない絵本
天
それからの僕は突然目が覚める
軸
形振りのその後のいのちの薬つかむ
重人 正雄 霜石 修 蕉子 ちかし 賢子 歳子 輝夫 慕情 幹子 順風 圭一郎 徑子 泰女 岳水 晴翠 英旺 小雪 百合 片山 忠

名句鑑賞じつくりと噛みしめて
牛乳は噛んで食べましょ保育園
鮎玉を噛む癖があり気短い
味のある話だよく噛んで聞こう
スルメ噛みストープ列車の味な旅
原爆忌今日の平和を噛みしめる
六十年平和噛みしむ戦中派
ガムを噛む選手真剣には見えぬ
ガム噛まぬ日本の方がいい野球
朝露の滴るトマトがぶり噛む
セロリーの音を楽しむ糸切り歯
青春の音響かせて噛むリング
噛み切れた事もあつた糸切歯
ネズミ歯をくれたお袋ありがとう
岩を噛む激流渡り切る安堵
榮転の陰で唇噛む左遷
温暖化悪魔の口が地球噛む
約束の指に残った噛んだあと
噛みつかれそうで仁王を遠回り
するの足噛んで脳波を刺激する
噛めるから噛むへと母の食進む
噛みついたベットの老後癒される

ミツ子 水笑 雄々 北朗 花匠 倫子 蜂朗 慕情 修 雅枝 一花 岳水 哲代 次男 順風 孔洋 鐘造 一のり 弥生 弥生

噛む

今 愁女選



生真面目があだで孤独を噛みしめる

何にでも噛みついてくる反抗期

奥歯噛んで耐えた日もある宮仕え

与野党がちよつとの事で噛み合わせ

官僚を噛む政治家を待っている

言い訳をするたび舌を噛んでいる

ドアに裾噛まれ動けぬ満員車

ファスナーよ体の一部噛むでない

気をつけよ噛んでふくめる子の巣立ち

谷底で父の一言噛みしめる

今になりあの印一つ齧る噛む

噛み合わせ話へ妻が酒を出す

盆参りかじったばかりの経唱え

金メダル噛んでカメラへ得意顔

にぎり飯ばくを男にしてくれる

佳

噛むほどに味が出てくるから名句

噛むようになったと赤子はめいている

噛みついた齧をニートが離さない

噛み砕くように論して娘を帰し

噛み潰す知恵をカラスは車借り

噛み合わせぬよう苦心する漫才師

地

病魔退散泣く子噛みつく獅子頭

天

天井の蓋がエビの尾噛んで来る

軸

彼の指噛んだ記憶が真新し

幸子

英子

順子

螢

東吉

強一

美智代

加お里

實

みつこ

章久

俊子

輝夫

政勝

霜石

久仁雄

不二

(安)泰子

かつ子

すみれ

時雄

高明

北野哲男

引 力

播本 充子選



引力に負けないようにドッコイショ

引力にアツケラカンとシャボン玉

なんとなくいつもの店で飲んでいる

引力が最高になる青春期

相思相愛あれは幻だったのか

タイミング少しずれてた赤い糸

引力を感じた事もある二人

引力の法則どおり惚れっぽい

引力がばつちり合うたゴールイン

引力の強い美人をみな取られ

引力が足りぬかチャンスまた逃がす

小商いばちばちためているらしい

引力を調整してる老夫婦

シヤラボワの美貌みたさに客が来る

夏休み孫の引力強すぎる

蒲公英を軟着させて風少し

宙に浮く月とこぼれぬ海不思議

引力のせいと高価な皿割られ

引力の強さまだ見えぬ妻

引力を信じていない木守柿

等分の引力家族でない

照彦

愛論

直

孝一

霜石

(川)洋子

不二

修

朝子

善信

活恵

権悟

歳子

哲代

英子

古拙

勝規

セツ子

庸佑

(安)泰子

美千代

究極の引力になる思いやり

年重ね帰巢本能うずきだし

おふくろの味に引かれて通う店

窓ぎわの引力少し弱くなる

盛り場の死角に甘い落とし穴

引力にドカンと炎をすえられる

フイクションを重ねて引力を裁く

引力の意味が判った金婚日

引力が迷いが消える般若経

引力のおかげ銀杏拾いする

引力が浮力に変わる温暖化

椿のようにこりと落ちること願う

引力に抗らう魔球テスト中

引力に落ちるトマトの自虐の日

引力は感じないまま添っている

佳

底無し沼もう引力も否という

どこからの引力なのか蹴蹴く

無重力神が支えている何か

反発をしても引きあう嫁姑

職探す靴引力を思い知る

引力もなくなり寂しすぎる山

地

引力に任せて無責任でいる

天

ニュートンの説に共鳴した牛蒡

軸

引力を恨む傷跡紙めている

伊津志

章司

遡行

千里

重人

可住

柳弘

(山)日出子

昌鼓

次男

徑子

恭昌

信子

ちかし

ばつは

(做)きよし

扶美代

栄呼

北朗

順風

螢

北野哲男

初歩教室

題 — 音

三宅保州

川柳はことばのつばさ

詩人サトウハチローが、詩で川柳のことをうたったのはおそらく初めてと言われている昭和四十二年に、「五・七・五で何でもよむ——川柳はことばのつばさ」と題して「川柳研究」誌に登載されています。しかも、同年のNHK総合テレビでサトウハチローと川柳六大家のひとり川上三太郎が対談し、その席でこの詩が朗読されたそうです。

この詩の中で、特に川柳家の心を打つところを抜粋してみます。

五・七・五と並べた言葉がその糸に触れると待つてましたと鳴りひびく

五・七・五の川柳は俳句とともに世界で一番短い詩の形。どこの国にもない詩の形。思いのままよむ。五・七・五でよむ。

高名なサトウハチローが川柳の良さを喝破されておられたことは心強い限りです。私も「ことばのつばさ」を駆使して佳句を詠

む努力を続けたいものです。

【俳句調の同想句】

単に情景を詠むことを主とした句は、川柳の川柳たるところの作者の思いや訴えが欠けており、俳句調の感を免れません。佳い川柳の第一条件とも言われる「作者の気持ちの存在する川柳」を心掛けたいものです。

風鈴の音色が運ぶ涼の味

孔一

風鈴が涼感を呼ぶ夕茜

光子

ほととぎす初音さやかに黄昏れる

（燭）節子

虫の音に近づく秋の気配する

周子

虫の音が涼しい夜にしてくれる

秋星

虫の音に風を求めて秋を待つ

稔

黄金の稲穂を渡る笛太鼓

裕之

夏座敷の音さく鹿威し

（附）信子

いずれも作者の思いを詠むと良くなります。

【甲子園を詠んだ同想句】

熱鬧甲子園的な発想を超えて詠みたいもの。

原 熱球打ち澄む浜風に湧く喚声

冷子

添 浜風に悲喜こもももの甲子園

義章

快音を残して球児夏終る

昇

【添削・批評句】

原 負けん気も年には勝てず息弾み 像山

「息弾み」が「音」と言えるかどうか。

添 負けん気も年には勝てず音を上げる

次の三句は中七でない句です。

原 音符など気にせず十八番で盛り上げる 道子

添 音符どうあれ私には十八番

原 音声は妻よりやさしい声で呼ぶ 賢治

添 妻よりもやさしい声の電子音

原 悪口を笑って頷く遠い耳 （吉）節子

添 悪口は聞かぬ振りの遠い耳

原 花火の音さうだ今日は夏祭り みち代

添 夏まつりと教えてくれた遠花火

原 夕立の音に気付かず傘ぬれる 柩子

「夕立」で「音」と分かります。

添 夕立に気付かなかったたた寝よ

原 敗戦の玉音語り継ぐ古老 紀雄

「敗戦」と「玉音」が重語に近い。

添 玉音を語る古老も減りました

原 風鈴の音風に揺られてきもちよい 綾乃

「風に」は不要。「風鈴の風は部屋まで通らない 与呂志」の名句を味わって下さい。

原 風鈴の金魚ひらとも動かざり 夢

添 風鈴の金魚も泳ぐ気配なし

原 靴の音電気を消して空いびき としお

添 靴の音にして寝た振りの午前様

原 寝たふりで鍵の音聞き安堵して 弘泰

添 鍵開ける音にふて寝の午前様

原 音程の外れた故母の唄が好き 寿々女

添 音程はどうあろうとも母の唄

原 足音を聞き分けて待つうちの犬 (河) 洋 子
 添 愛大は家族の音を聞き分ける
 原 離れない焼夷弾降る時の音 美紗子
 添 焼夷弾の音が今でも離れない
 原 B29の音耳底に第九条 瑛 子
 添 B29の音九条を守らねば
 原 郵便のバイクの音に子の便り トミ子
 添 郵便の音待ちわびる子の便り
 原 川柳詰屈くポストの音がする キヨミ
 添 川柳詰屈いた音は聞き分ける
 原 宮太鼓音の人呼ぶ秋祭 清
 添 宮太鼓の音が人呼ぶ秋祭
 原 ひとりこと音がなひのは達者とか 千代子
 添 音沙汰がないのは達者なのですか
 原 ジャズを聴き口笛吹いてリズムとり 實
 添 口笛でジャズのリズムをとっている
 原 地下街でラジカセの蝉鳴り続く (蘭) 洋 子
 添 地下街のラジカセの蝉鳴り止まず
 原 音楽はストレス癒す私には みさと
 添 私のストレス癒すミュージック
 原 食卓は聞き上手和を広げてる 映 子
 添 食卓の和を広げてる聞き上手
 原 洗濯機ご飯も同じ電子音 定 子
 添 電子音で指図しにくる電気器具
 原 ジェットに脳を振るわす嘉手納基地 (冊) 賢 治
 添 基地問題でこ吹く風のジェット音

原 ブルドーザーの消音造成地 り こ
 添 造成のブルががき消す蟬の声
 原 外湯廻り浴衣裾上げ下駄の音 ミヨノ
 添 裾からげ外湯廻りの下駄の音
 原 遠雷が傘を持たせる昼下がり 章 司
 添 遠雷に傘持たされる夕まぐれ
 原 時刻む音が無性に耳につき こずえ
 添 夜もすがら時刻む音耳につく
 【少し工夫すると良くなる句】
 原 遠火火音はあとからやって来る きぬ子
 良句ですが同様の既句があり残念です。
 原 音頭を取ってたはずが誰も居ず 乃りこ
 添 音頭取りしたのに誰もついて来ず
 原 鈴虫の音色団扇の手を止める 弘 子
 添 鈴虫の声に団扇の手を止める
 原 虫の音に誘われ団扇指揮を取る 律 子
 添 虫の音に誘われ指揮を取る団扇
 原 独り居の時計の音はよく響き かずお
 添 独り居に時計の音がよく響き
 原 はしこ酒つきさう靴が音を上げる 雅 明
 添 はしこ酒つきさう靴も音を上げる
 原 補聴器のはづした耳は平和です (白) 信 子
 添 補聴器を外した耳は平和なり
 原 神さんが賽銭の音聞いたはる 勇 治
 添 神様も賽銭の音聞き分ける

フルートを静かに聴いて午後のお茶 房 枝
 ジャズだって手拍子いつも演歌調 孝 子
 風向きで樽太鼓を遠く聞く 徑 子
 音のする方に歩ける足と耳 宇乃子
 まな板の音でわが家が動き出す 淳
 音立ててそば喰う日本の味がある 直
 たまに來た子がテレビの音を低くする 麗
 コマーシャル消音にしてしと見る 実千代
 金槌で叩いて音を聞く検査 堅 坊
 足音が大きい何かある予感 わ こ
 音沙汰へ母が喜ぶ電話口 照 実
 花開くとも素直な音をきく イセ
 ラーメンの中私だけの音がする 健 柳
 いやいやと音がするまで首を振る 幹 子
 プレート微かに歪む音がする 次 根
 【今月の推せん句】
 ドア閉める音に人柄見してしまう 吉村 幸
 着想と「ドア閉める音」の具象が良い。
 音楽で育てた梨を高く売る 遠藤那珂子
 果物も家畜もハイテク育ち。着眼が良い。
 極楽の朝のチャイムが鐘の音 坂本 藤朗
 「極楽のチャイム」とはまさに言い得て妙。
 【私の句】
 二千円札は音信不通なり
 音沙汰はなくても忘れられぬひと
 (登載浅れの方は役員が添削等して返送します)

秀句鑑賞

同人吟 小島蘭幸

— 9月号から —

コンビニの弁当も腕上げてきた

谷口 義

デバ地下へ行くと、弁当・物業コーナーはいつも人で溢れています。核家族になったせいか弁当はどこでもよく売れるようです。コンビニ弁当もまた然りです。便利、気軽、値段も手頃ということが受けているようです。しかしそれに胡座をかいているとすぐにお客は離れていくでしょう。最近のコンビニ弁当はいろいろと工夫がされています。女性や年配者にやさしい弁当もその一つです。この弁当当ものがとてもよく効いています。

父さんの洗車は雨乞いの儀式

志田 千代

めったに車を洗わない父さんがたまにピカピカに車を磨いた夜、雨が降ったのです。以来家族の中で「父さんが洗車すると雨が降る」という伝説が家族の中で生まれたのだと思います。平凡な着想をここまで格調高く出来たのは「雨乞いの儀式」という表現にあります。

ハッピーバースデーひ孫がうたうありがたさ

中井 ゆき

孫は可愛い、ひ孫となると尚更です。その可愛いひ孫がなんと誕生日にハッピーバースデーをうたってくれたのです。ほのぼのとしたあたたかさが伝わってきて嬉しくなります。おばあちゃんの満面の笑みと明るい家族の笑い声が聞こえてくるようです。

銀舍利をほおばり想う鶴彬

島 ひかる

プロレタリア川柳の旗手、鶴彬は石川県の生まれ。二十九歳で獄中死するまでに階級闘争と反戦主義を唱えた多くの作品を輩出しています。手と足をもいだ丸太にしてかへし、はその代表作です。せめて獄中の鶴彬に銀舍利をお腹いっぱい食べさせてあげたかったという作者の思いがしみじみと伝わってきて、思わず姿勢を正したことです。

呱呱の声もう一流のイゴツソウ

赤川 菊野

いごっそうは高知県人の気性を表す語で気骨があること、信念を曲げないの意です。呱呱の声からしかも一流とは凄いことです。きつと誰にも負けなような大きくて元気な産声だったでしょう。呱呱の声といごっそうはしっかりとつながっています。

：六・七日に広島、八日は麻生路郎の「涼み船水の深さをききたがり」を九日は長崎の原爆の句を解説掲載しました。あなたの送って下さった句や句集で石原青子さんの句とその解説に正確さが出てありがたかったです。静水さんにも句をききました。中津泰人、杉久美枝、二両人の句集も手に入れて調べたい。来る川柳人は誠に仕合わせ者です。何とか努力して読者にいい川柳への認識を持って貰えるように私は一所懸命にやっています。今後とも支援をお願いします。：これは昭和五十六年八月に頂いた薫風師のお便りです。橋高薫風著『なにわ川柳の一句』は昭和五十八年十一月に発行されました。秀句鑑賞依頼のハガキをいただいて『なにわ川柳の一句』の作品と鑑賞をもう一度じっくりと味わって読むことが出来ました。そして日本語の美しさという一字のもつ重さを再確認いたしました。薫風師の情熱、心構えには遠く及びませんが私なりに一所懸命鑑賞いたします。

襖を開けると謀がもれる

武田 帆 雀

襖の奥には一体何があるのだろうかと思像するだけでも楽しくなってくる作品です。急に来客があったりすると部屋の荷物を取り取えず襖の中へ入れておくことが我が家でもちよくよくあります。用がないとそのままにしておくこともたびたびです。ある日襖を開けるとドドッと荷崩れをして他人には見られたくないものが……。謀が面白いです。

鮎を釣る父七夕の天の川

近藤 佳子

亡父は鮎釣りの名人であつた。幼い頃一度だけ鮎釣りに連れて行つて貰つたことがあります。背筋をピンとして次々と鮎を釣り上げる父のカッコよかつたこと……。今宵は七夕満天の星が輝いています。この句は天の川で鮎を釣るという着想が素晴らしいと思います。天国のお父さんもきっと微笑んでおられることでしょう。

不老不死の薬もらいに主治医まで

池原 天馬

不老不死の薬なんてありっこないと思うのですが、妙に納得してしまうのは何故でしょうか。いつでもどこでもなんでも相談出来る主治医がおられるということはとても良いこ

とだと思ひます。無理難題を言われてもそこは主治医もちゃんと心得ていて、さりとて躲されるのです。きつと豪放磊落な主治医なのでしょう。

パソコンは推敲の跡残さない

水野 黒 兎

パソコンは便利です。便利が故にこんなところもあるのです。推敲に推敲を重ねてもその跡を微塵も残さないのです。パソコンと違つて原稿用紙には消しゴムで消したり、棒線で抹消したり推敲の跡がはつきりと残っているのです。先日「なんでも鑑定団」という番組を見ていましたら文豪の未発表の原稿が出てきました。さて本物か！というのをやつておりました。原稿用紙に万年筆で書いてあつて沢山の推敲の跡がありました。この句「推敲の跡残さない」とは実に良くいつたものです。

腕時計置いた所をすぐ忘れ

江口 度

退職をしてから私は何故か腕時計が重たくてしょうがないと思うようになりました。外出から帰ると所かまわず外してしまふのです。玄関先、洗面所、トイレ、台所等々……。先日とうとう行方不明になつてしまいました。二日ほど探したのですが、どうしても見つからないのです。諦めかけてふと机の上を

見ると置いてあるではありませんか、きつと家族の誰かが見つけてそつと置いてくれたのだと思ひます。「腕時計を置く所を一ヶ所に決めておきなさい」と妻や娘に言われるのです。が、どうしても出来ないのです。

それみてみ長寿の秘訣酒たとき

傍島 克治

いつも家で「お父さんそんなにお酒ばかり飲むと体に良くないわよ」と奥さんや子供さんに言われているのでしよう。ある日家族みんなでテレビを見ていると「長寿の秘訣は毎晩欠かさずお酒を飲むことです」と答えた人がいたのです。そこですかさず「それみてみ」ということになったのでしよう。長寿の秘訣は人それぞれ違つているのが自然なのに……。

父の日のお酒よろこぶ父が好き

緒方 美津子

父の日に大好きなお酒をプレゼントしてくれた娘さんの前でとてもおいしそうに飲んでいる風景は美しいものです。それにしてもなんと素直でやさしいお父さんであります。いつまでも長生きをして欲しいものです。

子育てが終り金魚の水をかえ

白根 ふみ

水槽でゆらゆら泳ぐ二匹の金魚は、きつと二人の娘さんなのでしょう……。

水煙抄

秀句鑑賞

— 9月号から

川端 一步

災害の地に太陽を戻したい

山根 邦代

前回の災害からまだ充分に復旧していない新潟は本当にお気の毒です。窮状は新聞テレビ以上と思います。すぐ具体的な対策を、句からそんな叫びが聞こえます。

根っからの陽気疑うこと知らず

塩路 よしみ

「陽気は美德 陰気は悪徳」宇野千代さんの口ぐせでした。どんな人生を生きるか、個人の自由ですが疑うこと知らずの人生万歳。

絵手紙に元気を載せてご挨拶

坂 裕之

印刷の便りは繰り返し読む気がしません。直筆それも絵手紙なら一日中持つて歩きたくあります。「元気を載せて」がとてもいい。

化けるのはまだ先という初な猫

北田 ただよし

作者の意図は分かりませんが、この句の暗示性に関心を持ちました。下5に他の固有名詞を入れると穿ちの効いた作品に。

この人を置いて先には逝かれない

伊藤 アヤ子

おそらく老老介護ではないかと想像します。ふと出たことばがそのまま句になった。夫婦愛が胸の奥までジーンと染みました。

温暖化病める地球の不整脈

井上 つよし

日本が世界に発信している京都議定書にガンとして拒み続けている大国有ります。草の根運動と世界の良識で、東西南北いずれの国もサインをしてもらいましょう。

猫背でもいいの歩ける嬉しさよ

増井 ヨシ枝

認知症のご主人を毎朝散歩に連れて行く少し猫背の奥さんが「私は主人のお陰で朝のステキな景色を毎日見ることができると。」と歩けるとは何とすばらしいことでしょう。

頬杖をついてよからぬ夢を見る

荒巻 夢

よからぬ夢とは何でしょう。思わずクスツと笑ってしまいました。みんな持っているが秘めておきたい想像の世界。

涙して聞く子供等へ戦禍説く

上垣 キヨミ

八月はあらゆるところで戦争の惨禍や原爆の悲惨を語り継いでいることでしょう。語り部の作者も偉いがむしろ子どもに大拍手。

参院選年金の風どこへ吹く

辻内 げんえい

とにかく暴走にストップをかけた。風を受けた党は善良な国民の声を代弁してほしい。

原石だったところが一番魅力的

田中 すず

大切なことを忘れていて頭をゴツンとたたかれた気がしました。本当に本当に。

いいパンチ貰えば幕を引き易い

いの 静草

作者の人柄にとっても魅力を感じました。私はヘボ将棋を指しますが、天狗の鼻を折られた時の心境を思い出しました。

流れ星おいでと窓を開け放つ

上嶋 幸雀

「一行の口語詩」の見本。句の情景が目に見えるようです。開け放つがいい響き。

いい雨だ一日だけのひとり言

加藤 スズコ

読んでいる本を伏せてふと出てきた言葉、そんな雰囲気を感じました。句は平易がよいと言われる。まさにそのお手本。

■句集紹介

井上桂作著

『時をつかむ』

西 出 楓 楽

世界各地を旅行しての『たびの川柳』に続く、桂作氏の第二句集である。昨年暮れに原稿の一部を見せてもらい、句集刊行の構想を聞いていたので、首を長くして待っていた。

私が講師をしている朝日カルチャーセンタ―「川柳研究」(現「楽しめる川柳」)に昨年十一月まで見えていた桂作氏は、独自の川柳を楽しんでおられた。

それは、出された課題からイメージを広げ、史実や歴史上の人物を詠む詠史川柳である。研究熱心で日本の歴史ばかりでなく、川柳の歴史にも造詣の深い桂作氏は、講師の私が教えるを乞うことがしばしばであった。

ほかに今回の句集のように、時事川柳にも並々ならぬ力量をもって発表しておられた。

「時をつかもう」として、新聞のニュース、社説(論説)などを丹念に読み、それらにた

いする私の考えを毎日欠かさず書き続け、はや五年の月日が経ちました。」

と「はじめに」にあるように、五年間毎日作句してこられた中の、昨年(平成十八年)の集大成がこの句集になったわけである。

普段は怠け、句会や投句日が迫ると、慌てて頭をひねる私には、この作句姿勢にはガツンと頭を叩かれた気分であった。

「振り返ってみると、時が経つに従って人間の思考もまた変わります。政治・経済などの複雑な諸問題も、やがては時間が解決し、アツという間に過去になってしまふ。」

と「おわりに」で述べておられる。

時事川柳は新鮮さと斬り口が勝負。移ろい易いは人の心、時の経過によっては何のことかわからなくなる句もある。その性格を桂作氏はよく弁えておられ「時をつかむ」と誠にびたりと嵌ったセンスあるタイトルをつけられた。また、時をしつかり繋ぎ止めるため、夫々の句に「行ずつの的確なコメント」がある。このペンの冴えによって過去に押しやられ、忘れ去られそうになる事件・事故なども昨日のこのように引き戻してもらえる。

睦月から師走まで月別に分けられた平成十八年を、句集からふり返ってみよう。

白い悪魔雪見などとは程遠い(一月八日)

そう言えば昨年はスキー場も閉鎖になるほどの豪雪だったのに、一転、今年は稀に見る少なさであった。この傾向は地球温暖化によるものと聞く。

いまだに宮家ふやしてどうなるの(二月三日) 皇室に四十二年間男子が誕生しないため、当時皇室典範改正が騒がしかった。折しも折り、秋篠宮妃紀子様の御懐妊の発表があった。その後、「皇位継ぐ三位の男子都合よく」と、九月六日無事悠仁親王が誕生された。

保険庁悪しき体質そのままに(五月二十五日) この句は社保庁が保険料の納付率を上げるために、勝手に操作したことを詠んでおられる。ところが今年に入ってから年金の情報が、五千万件も宙に浮いていることが発覚。追いうちをかけて保険料横領と国民は怒髪天を衝く思いである。

終戦の日深く静かに鎮魂を(八月十五日) 戦争体験は永遠に語り継いでゆかねばならないと思う。

原発の耐震性を固めよう(九月二十五日) 今年七月十六日、新潟中越沖地震が発生、多大な被害が出た。中でも柏崎刈羽原発は想定外ではすまされぬ被害が起きている。この事態を予測したような句に脱帽。

このように肩に力を入らず、たつぷり楽しませてもらえる句集である。

本社 九月旬会

九月七日(金) 午後五時半
アウイーナ大坂

残暑が殊のほか厳しい中、九二名の参加を以て、定刻通り九月旬会は開催された。

最初に9月6日亡くなった高槻市の同人、瀧本きよ子氏へ一分間の黙祷を捧げる。

お話は同人岩崎公誠氏。自己紹介風の形で始まる。写真、陸上競技、三段跳び、特に陸上は得意であったとの事。

37年間勤務した電器メーカーでは宣伝部に所属。

今日のために氏が発行した「朝読新聞」「なにわの創業者たち」が今日のお話の中心、中でも、各企業のトップ達の残した名言、格言は興味をひく。タレントやスポーツマン、そして、川柳の大家までも宣伝に駆り出し、大きく成長してゆく当時の会社の様子が、手に取るようによく解る。

体験に基づいた資料は豊富で奥が深い。各企業の会社の名前を詠みこんだ自身の川柳を披露、最後は、エアーハワイアンなる楽器を一節、披露して和やかな雰囲気の中で30分が過ぎた。

激みない滑らかな話し振りは、氏の企業戦士であった頃を思わせた。

(扶美代記)

月間賞は西宮市の山本義子さんに輝く。
(司会「昭・美籠」(協取り「月子・扶美代」
(受付「直樹・義子」(清記「直樹」)

席題「突然」 板尾 岳人選

ポツクリといきましますようにお賽銭

ベアシューズ突然妻が走り出す

突然にふわりと消えてみたくなる

突然に妻の名前がでてこない

突然に来た幸せなプロポーズ

突然のハミング母の認知症

突然に月がヒントをくれました

流れ星急に好きだと言われても

棚ぼたで遺産ころがり込んだ夢

朝起きてどなたと妻に尋ねられ

君が好きなんて突然言われた

百才で病氣もせずに突然死

仲良しを恋人にした俄雨

たましいが突然抜けたようになり

突然の名指し男の失語症

お姑様突然来ては困ります

出し抜けに尻に触れたと叫ばれる

突然の電話騙されそうになる

突然死なあって軽いいのちだな

突然の変異で咲いた青い薔薇

茶髪の娘に降って湧くよな玉の輿

幸せはあまり突然に来ない

突然にきて叱られる子の下宿

突然に美女連れてきたドラ息子

耕治

幸雀

いわあ

希久子

集一

美籠

みつ子

幸雀

賢子

則彦

潤子

舞夢

淳司

義

扶美代

楓楽

尚士

仁清

淑子

淳司

光久

時雄

正雄

シマ子

闇討ちのように飲み屋へ妻のTEL
のんびりと飲んでる時に来た計報
突然の愛錯覚を抱いたまま

突然に笑い出すから恐くなる

藪から棒に初孫ですと娘の帰省

突然で済みませんとガンが言う

どつんと突然降りてきたチャンス

突然変異妻が朝からよく笑う

佳

突然の指名アデランスがいがむ

突然にハンコ捺してと妻の乱

突然に姿くらまず論吉殿

奢られて突然好きになりました

病む社会ポツクリ寺がよう流行る

人

突然に年金半分くれと妻

突然と言うには花が赤過ぎる

天

大変な妻が突然化粧する

軸

おぼろ月突然呼びに来る棚田

兼題「わくわく」 角野 仁清選

好きな子に好きと言われた糸電話

わくわくと駆け出している酔笑客(敬)きよし

わくわくと蝶になる日を持つ毛虫

栄転の辞令わくわく足が浮く

わくわくの当てが外れたモーニング

直樹

朋月

雅文

能子

光久

尚士

修

直樹

瑠美子

理恵

昭

昭

いさお

郁夫

森子

昌紀

雅明

柳昌

正雄

東吉

わくわくと添付メールの写真開け
夕焼けに釣具揃える父の顔
火の想い抱いてわくわく恋の橋
わくわくが詰まって飛んだシャボン玉
フオーダンスあの娘だんだん近くなる
わくわくが詰って少し鳩胸に
わくわくとさせて梯子を外される
女文字の親展なんや請求書
わくわくとして顔もある羅漢
柚葉の出来栄を覗く登り窯
今聞く月下美人にときめかん
燃えるもの抱いて女は会いにゆく
忘れてた胸の高鳴り恋ですか
僕だけがわくわくしてるフルムーン
好きだよと叫びわくわく待つ筈
わくわくと女の嘘に舞い上がる
この年で心の弾み出会いです
さけ飲める彼女に逢える明日出所
わくわくを探しています秋の視野
寂聴さん今もわくわく恋綴る
付き添いの母がわくわくして見合い
期待されわくわく明日を待つ蕾
発表は明日親子の落ち着かず
お誘いの今夜はきつとフルコース
二人切りわくわくしてる部屋の中
胎動に父の自覚と喜びと
わくわくが二分でシユンとなる競馬

公 誠 雅 文 正 雄 森 子 幸 雀 扶 美 代 楓 楽 保 州 東 吉 美 代 子 柳 弘 則 彦 鐘 造 尚 士 美 智 子 天 笑 希 久 子 尚 士 叔 子 喜 子 修 舞 夢 直 樹 時 雄 蕉 子

妻の留守なぜかわくわくするのです
プロボーズされる気のする待合せ
わくわくと單身赴任送る妻
憧れの人の告白夢で聞く
人
再会へ何度も覗くコンパクト
地
再婚の話があつて眠れない
天
赴任先妻が泊りに来るといふ
軸
わくわくと老人会へ逢いに行く
兼題「闇」 亀岡 哲子選
人道支援北への物資闇の中
灯を消して妻と楽しむ遠花火
闇にいて悔いの泪は拭わない
老いてなお恋の闇路に迷い込む
試行錯誤しながら闇に落ちていく
闇の底いのちともして飛ぶ蜚
拉致の子にこの世の闇がまだ続く
闇を行く一人の声がある限り
闇の世をはのかに灯すボランテア
ほたる飛ぶ闇がやさしくなつてくる
ポエム読む心の闇に灯がともる
手暗がり恐れなかつた若かつた
救急車たらい回しの都市の闇
闇米を背負つた母を今背負う
闇夜に目天知る地知る部下が知る

和 夫 菜 月 欣 子 ア キ 賢 子 朋 月 恭 昌 美 義 雅 明 見 清 東 吉 理 恵 叔 子 耕 治 みつ子 則 彦 幸 雀 みつ子 恵 子 富 美 子 潤 子 直 樹

心の闇とかした君の聞き上手
闇なればひたすら蜚恋をする
灯台に暗闇でらす自負がある
氣宇壮大な夢を見たのは闇の中
闇市で命つないで今がある
闇市の銀シャリ味を忘れない
写経する一筆ごとに闇晴れる
暗くても必ず見えてくる明かり
重税も年金減らしも老いの闇
どの家も人には言えぬ闇がある
目を閉じて闇に心を遊ばせる
ありがとうその一言が闇を消し
闇の世をリングゴの歌に助けられ
人間の暗さを包む白い闇
燈明の明かりが闇を深くする
ひと言でわたしの闇に灯がともる
何もかも忘れた老母の白い闇
削除キー押しして宿敵闇に消す
佳
ピリオドを打つてますます深い闇
震度七あの夜の闇の月あかり
壕の中信じて生きていた絆
拉致された子が叫んでるおかあさん
自分史にひそかに埋めた闇がある
人
異次元へいざなう新能の闇
地
楽天家ですがたくさん闇も抱く
少年の闇に明かりがきつとつく
天

ダン 吉 義 子 美 籠 森 子 弘 風 東 吉 一 風 美 花 シマ 子 一 歩 鐘 造 哲 夫 桂 作 柳 弘 柳 弘 柳 弘 い わ ゑ ア キ 公 誠 美 代 子 能 子 美 花 千 枝 子 尚 士 楓 楽 月 子 たもつ

闇抜けたらしい小鳥の声がする

兼題「シヨック」

藤井 正雄選

そのシヨック隠したメガネ拭いている
泳ぎなどできなくなった膝を抱く
裏切りのシヨック真つ赤な保証印
ネジ抜けたシヨックに乗った大シヨック
頑固さがシヨックのたびに丸くなる
断崖の夕陽にこころ奪われる
頭痛嘔吐欠席がちな帰国子女
氷山の崩れる音を聞く茶の間
犬の器と俺の茶碗をまちがわれ
緩かったスボンのチャック締まらない
絵日記に夫婦喧嘩を見られている
宗教の違いで殺し合うなんて
シヨック隠した笑顔が少しきこえない
昨晩は何を食べたかもう忘れ
才媛が痴呆になったという便り
朝帰りしたら笑顔の妻で居る
本降りになって布団はとどのよう
振り向くとなぜか僕だけ影がない
早合点する癖でシヨックが多すぎる
シヨック以来無口になつているカラス
積み上げた努力は砂の城だった
ひまわりが枯れた熱中症らしい
世話をしている孫に殺される
立志伝シヨック何度も越えた顔
バーゲンで半値で出てる同じもの

美 養 螢
公 誠
光 久
義 子
千 枝 子
求 芽
保 州
孝 一
一 風
保 州
かりん
尚 士
ア キ
岳 人
篤 子
昌 紀
麗
美 籠
みつ子
美代子
蕉 子
公 誠
耕 治

政治家に電気シヨックをかけたいね
恋人が鼻毛を抜いていたシヨック
謹厳な父に女がいたシヨック
癌ですと先生事も無げに言う
おでこ打って漫画のような花火みる
一本のボルト緩んでいるシヨック
子の描いた家族へ父の顔がない

佳

シヨックかばうに飲めない酒呷る
バンドラの箱にシヨックを閉じ込める
ポケットでひねり潰していたシヨック
笑うてはいてもシヨックは隠せない
かつら取り入れ歯取るのを孫が見た
人
シヨックにも強いおんなになりました
地
焼酎とスルメでシヨック溶けてくる
天
話あると妻が真顔で正座する
軸
リストラのシヨックをバネに今がある

兼題「避ける」

鴨谷 瑠美子選

暗いニュース避けてお笑いばかり観る (做きよし)
避けられているとも知らず避けている
寿命延び老々介護避けられぬ
人妻の恋太陽の下避ける
嫌われていいるらし視線避けられる
嫌味言う男を避けているビール
修
恭 昌
仁 清
靖 鬼
哲 子
雅 文
天 笑
昭
扶美代
天 笑
見 清
月 子
集 一
孝 一
喜 子
楓 楽
楓 楽
美 花
岳 人

人の目を避け雑踏に紛れ込む
CTの影に今日だけ避ける酒
無視無言向こうも避けているらしい
青空を避けたような時もある
避けるのはやめよう敵がでかくなる
寝められた日からあなたを避けている
良心が見て見ぬ振りを許さない
失敗はいつでも部下のせいにする
身体検査避けて大臣棒に振る
人の目を避けて夜逃げるを考える
犬よりも怖い飼い主避けて去ぬ
肩書が昔を避ける顔になる
福の神わたしを避けてばかりいる
この店に人目を避けた席がある
ご近所の人目を避けて朝帰り
避けているらしい愛想の好い返事
吠えかかる気配犬から目をそらす
この猛暑お天とさんを避けてます
雷が去るまで土鍋被つとく
年寄り避けて配っているティッシュ
避けられているとも知らずついてくる
猫まで声避けるにこした事はない
妻も娘も見ようとしなない僕の顔
避けられていたんだ僕らの天邪鬼
挨拶をしたくないから回れ右
誘いたいだけあの娘は雨おんな
佳

昭
章 久
俣 子
千 恵 子
ダン 吉
扶美代
善 純
尚 士
遠 野
美代子
則 彦
求 芽
幸 雀
篤 子
い さ お
靖 鬼
直 樹
美智子
シマ子
尚 士
い わ ゑ
恭 昌
昌 紀
ダン 吉
朋 月
柳 弘
水 昇
仁 清

これ以上ときめかぬ様彼を避け
中国のものは当分避けておく
私の目避けずにあなたちゃんと見て
丁寧に挨拶をして避けている

舞夢
一歩
見清
義

人も
何もせえへんのに私を避ける妻

天笑

地
避けようと思う穴にはよく落ちる

恵子

天

子が巢立ち避けようのない差し向い

幸雀

軸

原色を避けて気楽に暮して

兼題「内助」

河内 天笑選

妻元氣内助の力あり余り

見清

お礼状いつも代筆してますの

哲男

内助なんてまづびらごめんさようなら

楓楽

内助には気付かぬ振りで感謝する

正雄

詫び状も弔辞も書いている課長

准一

母ちゃん抜きでは語れない現ポスト

郁夫

ロボットがやがて内助を買って出る

美龍

人前ではうまく私を立てる妻

好

酒の量減らせばどうと言う内助

一風

口ばかりうるさいそれが内助かい

修

旅行バッグ下着はすべてサラである

哲夫

悪妻で夫が自立できました

志千代

切り札も金も握っている内助

富美子

聞かされた内助の功が嘘っぽい

公誠

官房長官もかばい切れないことばかり
わたしが笑うと奮起するあなた
手のひらで夫踊らすのも内助
賞金の半分程は妻の知恵
気の弱い僕を支える妻の機
オイと言うからハイと答えている内助
内助など期待するから泣きを見る
皿割って我慢しているのも内助
五分五分の内助で幸せになろう
ずる休み妻が上手に電話かけ
内助の機会なくてへそくり太ります
子や孫が明るく育っている内助
内助より足を引っぱる方の方
立ち直るきっかけ妻のあの笑顔
スローライフ内助の功に甘えてる
だんじりの男を守り立てる内助
あなたの金管理してるという内助
夫の賀状は毎年書いてます
薄味に馴らす内助に寿命延び
内助という干渉うけて生きている
定年ですべて内助は終らせる

保州
理恵
千里
靖鬼
集一
恵子
昭

住
内助なんて浮気の監視されただけ
おぼはんと呼んで頼りにしています
魔女悪女そして優しいのが内助
内助よりはつたらかしがありがたい
スーパーマンのマント繕う妻でいる

修
仁清
森子
求芽
理恵

人
任せてね奥から妻の声がする

柳弘
麗
蕉子
義久
蕉子
瑠美子

人
任せてね奥から妻の声がする

柳弘
麗
蕉子
義久
蕉子
瑠美子

人
任せてね奥から妻の声がする

柳弘
麗
蕉子
義久
蕉子
瑠美子

人
任せてね奥から妻の声がする

柳弘
麗
蕉子
義久
蕉子
瑠美子

人
任せてね奥から妻の声がする

柳弘
麗
蕉子
義久
蕉子
瑠美子

人
任せてね奥から妻の声がする

柳弘
麗
蕉子
義久
蕉子
瑠美子

人
任せてね奥から妻の声がする

柳弘
麗
蕉子
義久
蕉子
瑠美子

地

休みたい日も玄関で送られる

耕治

天

七転び八起きわたしが付いてます

義子

軸

一泊へ三組も下着入れてくれ

川柳塔まつり(10月8日)

懇親宴余興出演についてお願い

まつり懇親宴では場を盛り上げるため
に例年余興のご出演を願っておりますが、
今回も実施したいと思っております。

つきましては諸準備の都合上、演目・
カラオケ曲名・所要時間・出演者名等に
つき事前に左記までお申し出願います。

企画担当 井伊東吉

Tel FAX 072-444-3227

あかつき川柳会

とき 11月9日(金) 14時から

会場 住まい情報センター
大阪くらしの今昔館

(地下鉄天神橋六丁目③出口)

兼題 指先・煙・泳ぐ 時事吟

投句先 〒599-0232 阪南市箱作

1586-14-102 森村美花

和歌山の海

飛 永 ふりこ

二年前、わたの花の吟行で、休暇村紀州加太に行った。いつふみさんの提案でもあり、八尾からバスの旅に、全員の参加である。

休暇村加太に到着、入ると目の前が、広々とした海で、無限の蒼い波にすっかり見入ってしまった。友ヶ島も、うつすら浮かぶ。

海が大好きなので、心はブカブカと舞い上がるばかり。乾杯したビールがキューツとこち良い。

宏至さんの細やかでホットな司会から、句会が始まった。没になれば、自分の下手な句を棚上げて、選者の方との相性もあるだろうとか思ったりして、自分を甘やかす。

この頃は前日にしか作句をしなくなったので、自分のコンディションとかにより、句の出来、不出来が生じ、ぐうたらな怠け癖も災いしてしまい、勉強不足を反省している。

句会が終り、近くの難流しで有名な淡嶋神

社を見学して、記念写真も、参加者全員、白い歯がこぼれている。一風会長のお人柄と、役員の方々のご尽力により、みんな和気あいあいの楽しい旅の思い出が残り、ビンゴゲームも、義明さんの野球放談(?)が、拍手喝采を浴び、きみまろさんのビデオにも、お腹が振れるほど笑い、加太の潮の香りをお土産にして、無事、帰路に着いた。

幼い頃、両親と姉と私の四人で、よく友ヶ島に行ったことがある。友ヶ島は、加太から船で十分位のところで、釣り場として知られている。父も釣りが好きで、職場の人達と友ヶ島に行き、メバルやガシラ等、たくさん持ち帰り、近所の方々に分けたり、父が自ら魚を捌いて、刺身にして、新鮮な魚の甘さを、家族みんなで味わった思い出がある。

当時は、岩のりを取ったり、貝をみつけたりしながら、父の背中のにのせてもらって、泳いだ記憶もあり、夏の海を満喫していた。

今はもう父も母も他界してしまっただが、白黒の映像のように、心に残っている。

わたの花の吟行で行った休暇村の加太の海の景色が忘れられずに、昔馴染の友達六人で再び足を運んだ。みんな一斉に「わあー、すごい、最高の海の眺めね」と声が弾む。海の幸に舌つつみをうち、露天風呂から、目の前

の蒼い波しづかに夢ごこち。夕映えは、さぞかしと思ひ、後髪を引かれるが、夫の待ちくたびれた顔がふつと浮かび、慌ててしまふ。友達六人の内、三人のご主人が亡くなり、一人は食道癌で手術は成功したが、流動食。私ともう一人の友達の方が健在で、団塊の世代としては、ご主人が亡くなるのが、少し早い気もするが、天命というか、寿命だけはどうしようもない。

今年も六人とも元気で、加太にての再会を楽しみにしている。言いたいことを言い合える仲間がいることが、何よりの幸せと思う。

加太から、五十分ほど車を走らすと、和歌浦に着く。父の仕事の関係で、和歌浦に住んだことがある。

その頃は、和歌山のマリーナシティもなく、雑賀崎から新和歌、片男波と海岸を通っていく眺めは、海好きな人間に限らず、ここからの日の出、日の入りは、多くの人を魅了した。迷いやしんどさから、逃れたい時には、新和歌浦から片男波の砂浜を歩いた。

自分ともう一人の自分との対話をするのには絶好の場所でもあり、私に新たな気力を授けて貰えるオアシスでもある。

川柳から、自分の弱さ、甘さも学べる。新和歌浦おおきに言える母の海

枚方市文化協賛
第17回 枚方市民川柳大会

日時 平成19年10月28日(日) 午後1時半開場
場所 枚方市立枚方公園青少年センター3F
(京阪枚方公園駅下車西へ徒歩3分)

お話 年金について 濱田 良知 氏
宿題 「狂 う」 辻 翠子 選
「熱 」 西森 絹子 選
「ややこしい」 西山春日子 選
「リズム」 高田 博泉 選
「裁 く」 前田 咲二 選
「その時」 本庄 東兵 選

席題なし 各題2句 しめきり午後2時

参加費 1,000円(発表誌呈)

欠席投句拝辞

賞 市長賞・市教育委員長賞・市議会議長賞

主催 くらわんか川柳会

後援 枚方市・枚方市教育委員会

午前中は「鍵屋資料館」でお楽しみ下さい。
(会場の近くです)

連絡先 〒573-0081 枚方市釈尊寺町28-4-301
足立 淑子 TEL(072)853-8153

第58回 西宮市民文化祭
川柳大会

とき 平成19年10月28日(日) 開場 12時
締切 13時

ところ 西宮市民会館(市役所南隣)4階 中会議室
会費 1,000円(呈 作品集 郵送)

題・選者 (各題2句)

「席題」(当日発表)

「箱」 石井 冬魚 選
「顔」 赤松ますみ 選
「揺れる」 松下比ろ志 選
「悪」 瀬川 幸子 選
「鏡」 奥山 晴生 選
「忘れる」 梶原サナエ 選
佐藤 純一 選

賞 各題 秀句 呈

交通案内・阪神西宮駅 市役所口(東出口)を
北へ1分 右側
・JR西宮駅 南側下車 国道2号線
を西へ約13分 市役所南隣

懇親会 会費 4000円 当日受付

共催 西宮北口川柳会 西宮川柳会

瓦木川柳勉強会 甲子園川柳会

連絡先 〒661-0014 尼崎市上の島町2-2-26-206
中岡千代美 電話 06-6426-1991

* 今大会は10月の甲子園川柳社の例会を兼ねます
甲子園川柳社

第41回 東大阪市文化祭参加
第35回 市民川柳会

日時 10月21日(日) 11時30分開場
会場 東大阪市社会教育センター 3階
(☎06-6789-4100)

ビデオ放映「国宝探訪」

宿題(各題2句・出席者のみ) 出句締切り 1時

「曲(きょく)字結び可」 油谷 克己 選
「薬」 池 森子 選
「たつぷり」 岩田 明子 選
「窓」 久保田元紀 選
「投げる」 竹森 雀舎 選
「慌てる」 前田 咲二 選
「いし」 米田 恭昌 選

各題秀句に市長賞・佳作賞・特別賞・
参加賞・軽食・発表誌呈

会費 1,500円

懇親会 4,000円(希望者当日受付)

お問い合わせ 片岡 湖風 (072-965-1341)

主催 東大阪市文化連盟・東大阪市川柳同好会
わかば川柳会

後援会 東大阪市教育委員会

平成19年 尼崎ザ川柳

とき 11月3日(土・祝) 午後1時開場

ところ 尼崎市総合文化センター
7階第2会議室(阪神尼崎駅より
立体遊歩道にて5分)

会費 1,000円

締切 午後2時

挨拶 尼崎川柳協会会長 長浜 美龍

宿題と選者 各題2句 席題なし

「余裕」 南 全彦 選
「笑う」 堀 正和 選
「鼻」 佐藤 純一 選
「溶ける」 赤松ますみ 選
「おでん」 有田 一央 選
「街」 長浜 美龍 選

お話 奥田みつ子(川柳塔社副主幹)

懇親会 2階レストラン

男性 3,500円 女性 2,500円

主催 尼崎川柳協会

連絡先 尼崎川柳協会事務局

山田耕治 TEL 06-6491-1612

わが家

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

ローズ川柳会

山崎

君子報

すぐ年齢を言うのはやり欲しいらし

星影のワルツしんみり聴く夜更け

続編は地震で人生くつがえる

昔のこと言えば話の合う二人

眩しさの夕日の中で今日も無事

孫誕生続く生命に感喜する

影ふたつ星を数える夜の道

星芽えてお伽話がしたくなる

恋の迷い子星がしつかり見とどける

無事平穏続き時々出る欠伸

ない無い尽しの中で咲かせた恋椿

山頂で星と語ればこころ舞う

根気よくリハビリ続く今日も雨

和歌山三幸川柳会

喜田

准一報

天も地も揺らして出来た逆上がり

人間が動くく地球汚される

登美代
純子

叩いたら少しは動く僕の脳

深く息吸ってドミノの駒を押す

万燈会万の命が揺れ動く

よく動く元氣な手足だったのに

電池切れするまで人間も動く

カミオカンデ百年先にある答

議定書へすでに答えている氷河

健診の答え待ってる旅仕度

答え方ひとつで切れる蜘蛛の糸

尽すだけ答えてくれる土が好き

過去呼べばよくぞ耐えたという答

答えない答さがして米を研ぐ

黒白の答えを出せぬ席に居る

ニイタカヤマノボレがわかる戦中派

みどり児の答えはいつも大欠伸

即答でお受けしました名譽職

肝つ玉だけは母似のスリール

骨太のサイズ明治の味な母

恰幅といわれたこともあるメタボ

ガリバーが来たかと思う孫の靴

しサイズ揺れる干場へ日本晴れ

ししのサイズ持たいたい志

指切りげんまんビッグサイズの陽が沈む

老いてなお西瓜のサイズひつかかる

結び目を解いてふわりと風に乗る

ふわふわとせぬよう一夜干しにする

職安でふかす煙草は輪にならぬ

昇 碧

川柳塔おとし

福田

登美報

ホイツから飛び出してきたキュービッド

石だけは出来たが刻む句ができぬ

時刻む速き老いの背押ししてくる

面影を胸に刻んでいる未練

縁側に酒あり友と花火みる

嘶家はカラダで花火打ち上げる

バツと咲く花火いっぱい海さわぐ

親子して線香花火顔と顔

夕顔の花うきうきと月に咲く

約束の日ばうきうきと服選ぶ

うきうきと暮らす時もあろうと汗流す

ほろ酔いで心うきうき笑いこけ

断ち切れぬ思慕の深さの遠花火

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

切れぎれの想い出つなぐ故郷の道

ドン底の暮し支えた細い腕

おちよこからコップになって出る本音

ストレスを捨てて来たのがよく笑う

夢一つ叶って今宵は高いびき

地下足袋を知らぬ子供が農を継ぐ

人生は泣いて笑ってまだ続く

ありがとうこんな言葉で丸く棲む

湯上りの一杯が胃を貰いた

来る人が皆上を見るエレベーター

美枝子

由多香

道子

艶子

雄々

真一

小生

清子

螢

風花

以和万津

ヒロ子

登美

賢

八重子

ひかり

はつ恵

寿々女

あきら

よしみ

いさむ

弘

放任

一芸で思わぬ人氣一人占め

岸和田川柳会

土橋 房枝報

貞 月

東大阪市川柳同好会 森下

愛論報

佳句地十選

(9月号から)

川久保 睦 子

広告を背負ったようなシャツの文字

その朝もきつと雀は鳴くでしよう

すつきりとお礼が言えた日の笑顔

どうでもいいことは不思議に思えない

生き様に拍手をしたいお葬式

釣り草に疲れた命ぶら下げて

つまずいた道で拾った知恵ひとつ

喧騒を嫌って森の奥で咲く

沈む日に私溺れたことがある

冗句サラサラいい人なんだこの人は

や え

ある時は河童になって群を出る

河童でも漫画になれば美男美女

温暖化河童の皿も水を乞う

河童にも環境汚染耐えられぬ

ユニークな河童の姿見てみたい

泳ぎにも自信なくした老い河童

体内の血も沸点になる暑さ

川柳塔唐津

仁部 四郎報

五十年借りたる土地よさようなら

ハンドルの遊びと大器酔うている

休肝日また先延ばし後がない

年金の生活にマンゴー手が出ない

修羅越えて心静かな茶を入れる

一服のお茶から朝の顔になる

雨もよし今日は一人の茶が甘い

限度たと言うが益いつも空

国民の忍耐力にある限度

限度です老老介護が肩に来て

戦後史の踏み絵に残るコッペパン

入院で朝食パンの癖がつき

脱脂乳戦後を生きたコッペパン

捨てたはずふる里未だ夢に出る

ロボットにやがて人間捨てられる

神を捨てる私に怖いものはない

使い捨て日本のきしむ音がする

六月の雨とむかしを振り返る

背かれて雨降りつづくはの胸

こぬか雨止んで私の虹がたつ

松露川柳会

小西

雄々報

暑くても四季があるから夢もある

温暖化地球暑いと悲鳴あぜ

長梅雨に暑中見舞を出しそげれ

口にする言葉であり暑さ増す

暑いなど言っではおれぬ庭の草

交通事故で河童の死んだ記事がない

夕立に河童の皿も活気する

朝 子

太 郎

光 枝

ダン 吉

賢 子

シマ 子

柳 弘

美 子

克 己

敏 子

秀 夫

雅 文

三重 子

湖 風

美弥 子

愛 論

興

美 明

澄 枝

ち え

美 穂

鈴 枝

公美 枝

睦 子

美 枝子

はるみ

靖 子

求 芽

見 清

明 子

一 風

扶美 代

蘭

や え

智恵 子

信 雄

久 子

弘 子

和 代

静 江

雄 々

實

勝 視

蜂 朗

高 明

貞 月

房枝報

浅 子

和 美

ダン 吉

弘 子

幸 子

ふみよ

植 代

淳 子

俊 昭

仁 緑

岩 夫

昭

泰 弘

淳 風

珠 子

房 枝

笑 司

けい子

香 代

守

東 吉

義 泰

蛙 城

蟻の列汗と涙の二等兵
侮った蟻から貰う土砂崩れ
補助金にたかる白蟻駆除できず
一匹の蟻逆風に帆を上げる
晴れ男最後は雨にたたられる
お洒落して飛び出す朝の雨に泣く
この雨が酒だと樽に貯めるのに
手術中ランブ見つめて祈るだけ
祈ります愚痴も願ひもひつくるめ
幸せを祈る気持が仇となる
巢立つ子の鞆へそっと守り札
神妙に祈り帰りは嫁の愚痴
駅名で合格祈願する旅行
健康を折って今日もタバコ吸う
人生の節目祈りで気を静め
祈りつつ邪心もたげる腹の虫
私利私欲折った後の自己嫌悪
失恋の彼女に祝辞頼まれる
うらめしい饅頭ひとつ夢が醒め
頭から信じ騙されうらめしい
借金で建てた豪邸羨まれ
おしゃべりが過ぎて料理を下げられる
付けないではしいキムチに消費税
クッキング飽きてちよつぱりキムチなど

引力の意味をリングに論される
大臣にやしうがないは禁句なり
歳時記が異常気象に意見する
妻留守に河童の酌で今日を酔い

川柳ふうもん吟社

夏目

一粋報

四郎 輝夫 晴翠 水笑

自爆テロ神の出番はないらしい
合掌をすれどまだまだ生臭い
神仏に頼んで上がる手術台
身内からの嫁はその後が難しい
仲人はガセネタばかり整理する
身内の寄った祭りの里も今は過疎
やさしさをつばい詰めてみすゞの詩
時どきは子のガセネタに母も乗り
真夜中に泣いて蜂わら何だいや
身内みな無事らしいから沙汰がない
優くて力強いと知るいのち
蜂わらも母は両手で包みこむ
美人ゆえいつもガセネタつきまとう
偉いのが身内に居ない平和です
ガセネタも活字になればしたり貌
蜂わらの若かった日があつたつけ
年金の橋がまだまだ揺れ続け
オモチャ箱蜂わらにして疲れ果て
我が身内メダカばかりで仲が良い
蜂わらをおこななければ良い人だ
身内とは仲良くなれぬ遺産分け

洋々 一瑞 かをる 孝男 衛

菊香 主一郎 毅 蟹郎 善夫 美恵子 金祥 無限 志げ緒 良子 稔 雅女 節子 春名 あしび 茂登子

追いつけぬ自分まだまだ未熟だな
身内には政治家いない農を継ぐ
まだまだと忘れた頃に百回誌
まだまだと隠居させない子にあずる
まだまだとたくつて見せる力こぶ
身内には心の隅をみな明かす
立ち読みマンガ昨日の続き見当たらぬ
架空経費身内がうまく利用され
蜂わらも静まり咽う赤とんぼ

竹原川柳会

時広

一路報

はつ江 喜美子 行男 房江 昌鼓 菖子 益子 由美子 一粋

恋をしているとても小さな弁当よ
弁当の蓋を開ければ母の笑み
弁当の重さよ愛よ児が光る
黒焦げの弁当箱が鳴咽する
母の愛ずしと重く手弁当
駅弁を動く景色と共に食べ
おかげさま無事に米寿の駅に着き
森の駅トトロの傘が待っている
子等巣立ち夫婦を試す始発駅
乗換のここで結んだ赤い糸
風と乗る瀬戸の単線無人駅
年金の迷路語らぬお役人
あつてなく指を零れた愛の砂
円を書く心にトゲが出ぬように
自己主張しつかりできるブチトマト
もう少し下さい大人になるヒント

蘭幸 節生 厚子 静風 千代美 慶子 房子 輝恵 汎美 敬子 民恵 節夫 幸子 太虚 比呂子 千秋

新しい出会いでパパとママになる
自転車でしまなみ海道飛ばしたい
二十年乗れば自転車捨てられず
ペダル踏み私は元氣らしく見え
自転車へやがては愛をのせる孫
島めぐり自転車という手があつた
天の川渡る自転車磨いてる
自転車で来たんですかと医者が訊く
自転車で5分大好きな海がある
千の風の一つと出合うかもペダル
鏡見るたびに足し算繰り返す
終点に届き自分の顔になる
過去のことを捨てて息づく水中花
一言が重くて飛べぬ水たまり
すべて書き終えペンを置く重い音
黒髪を切つてさっぱり過去を捨て
いたいたややさしさ少し重荷です
祝退院キツネうどんが届く朝
年金の目減り親父の座が寒い
さっぱりと忘れたはずの過去と逢う
神にもらつた時だ大事に食べ尽す
広辞苑漬物石になつてきた
時々夫忘れに行くツアー
声かけるチャンス逃したわだかまり
公務員重い責務をつい忘れ

高槻川柳サークル卯の花 釜野 公子報

史子 規代 笹舟 貞子 栄恵 笑子 淑子 力 あゆみ 一路

郁郎 郁夫 稲子 恵美子 一央 活恵 かずお (敬きよし) 牛延 孝作 幸雀 宏章 佐代子 昭二 治三郎

足取りの重さを風に救われる
寄り合つて長屋の屋根が生きている
鬼瓦りのジイジは息災か

時空超えて故郷へ帰つてくる螢
リハビリの窓の明かりを信じよう

昨日より今日の画を描く腕時計
スケッチブック片手に藁葺き屋根の村

幸せの時は秒針など見ない
仕事辞めさつぱりしたと見栄を張る

北斗星いっぱい分の夢届く
財布の底はたきさつぱりした気分

重責に耐えた男の深い目だ
屋根裏にまだ蛇の住む里の家

旅立ちのはほえみだつたのか螢
追伸の許すに耳が溶けてゆく

川柳クラブわたの花

山本

宏至報

ごむ紐がのびてしまった夫婦仲

童謡のリズムで雨の音を聞く

熱燗が治してくれる父の風邪

ロケットに育てられてる化学の芽

油より酒を欲しがらうちの口ポ

もろもろの夢を描いて歩く道

ふるさとの海は唱歌がよく似合う

長寿国介護ロケット急がねば

どうすれば苛め自殺をなくせるか

子猫来て何やかやよう動く妻

節子

つね湖

直人

晴生

比呂志

萬的

美義

守

美智子

泰雄

葉子

義一

律子

ろっば

優しさを葉書に詰めて来る便り

イチローが歴史に刻む MVP

かあちゃんとうまくバランスとるが勝ち

一枚のカードを抱いて旅に出る

先が見え自己探点が甘くなり

手書きの便りハートぶんわり桜色

飼い主似散歩の犬も肥満体

日没を真っ赤に燃えるラストラブ

いにしへのロマン探しに来た日傘

出口ない二人芝居で今日も暮れ

訛りからするり打解け盃進み

食べ放題時間短い急ぐ箸

ロケットに甘んじ妻に逆らわず

生き甲斐を見つけ仕事に粘り出る

田植機へやつと出番の梅雨の朝

年ごとに足が段差に拒まれる

白地図を埋める旅行がしたいのよ

ルーブルのモナリザやはり威厳あり

父の日にせめてリボンで紙おむつ

幸せを探す夫婦の未来地図

敬老の日だけは孫が電話くれ

敬つてました二の宮金次郎

百歳になれば敬いたてまつる

別嬪に最敬礼をしてみよう

それぞれの良さを尊敬して暮らす

俊子

たえこ

正春

浩三

幸枝

晴美

宏

朝子

美はる

欣子

ふりこ

義明

いつみ

宏至

はじむ

妙子

克美

愛子

孝子

一風

尊敬をしておりますとくすぐられ

敬礼をして袖の下握らせる

母さんの敬語波乱の前ぶれだ

愛嬌を真っ赤に出したトマトです

失敬と笑つて言える友がいる

今日だけの座布団重ね敬老日

握り飯半分にして仲直り

現ナメで叩くと答すぐに出る

大掃除畳を叩く家もない

リラックスせよと背中を叩かれる

蚊一ぴき叩くわたしの凄顔

底辺で尻叩かれる事ばかり

弱点を叩かれ疼く胸がある

喉仏納めて千の風を待つ

おしやれには金に糸目はつけません

八十路過ぎおしやれの父が自慢です

外出のおしやれは妻の許可がいる

おしやれた今日は財布に五万円

どうおしやれさせても犬は喜ばぬ

恋ころおしやれ心はまだ続く

乱れ髪おしやれ帽子で隠してる

最高のおしやれは笑顔だと思ふ

荷造りの手が弾んでる子の自立

あれもこれも考えすぎて荷が重い

悲しみは被爆と差別の重荷負う

一瑠

蟹郎

節子

菖子

幸安

雅女

螢

忠良

よしえ

睦子

きみ子

かつみ

公子

茶子

圭一郎

稔

重忠

公乃

たぬ

幸枝

和子

美恵子

烈

能子

香住

岩美川柳会

石谷美恵子報

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

片手杖りんごふたつをよたよたと
生きている証と思う荷の重さ

慶子
加津子

熱中症にならねばいいが母出好き
熱しやすく冷めやすい聲である

シマ子
弘直

熱さめてみればつまらぬセール物
平熱に戻りご飯の味になる

あずき
ますみ

高熱の夢に金魚の裏がえり

喜美子

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

雲海を見おろし天下とったよう

純

湧き上る入道雲が威張っている

宏一

脱ぎ捨てて小川に集う子等の声

幸子

ロボットの手人間は負けている

久子

無器用な細工を笑う竹トンボ

武庫坊

控えめな顔で器用に風を読む

東園

病んで知る人の温もり今更に

道子

豆を煮る日々好日の音を聞く

寛之

メロドラマにとさめく臓器もつ八十路

和子

病床の窓から句材探してる

ゆき子

寺の娘は念仏唱え恋成就

守弘

育児放棄か赤ちゃんポストある時世

年代

孫と話す世間話の周波数

昭三

マックイン大脱走で男上げ

矢薫

夏休み孫達来るやにぎやかに

忠

川柳塔わかやま吟社

牛尾 緑良報

過労死に注意と書いてない社訓

保州

やるだけはやった諦めの日を括る
てのひらに八月の風重く乗る

富美子
登美代

ブリーングをアンコールだという総理

大輪

あの日から八月の雨黒いまま

英子

両親も亡夫も揃う盆の客

あきこ

八月の慙愧を猫が死んでいる

豊太

広島の鐘八月で目を覚ます

小雪

袖口にため息触れる盆踊り

紀久子

生と死よ八月と言うドラマ

さち子

わだつみの声が八月眠らせぬ

克子

八月の無口一物抱えている

准一

八月は周平が呼ぶ蟬しぐれ

順子

日の丸を見ると八月疼きだす

裕美

諦める月日の中の躁と鬱

翠子

目のうろこ落ち諦めるのは止める

佐一

諦めず付いてきたのは影法師

泰女

諦めずあせらず生きているゴールまで

輝子

諦めかけた夢がふつつつ燃えている

三男

こてんぱんにやられ諦めつきました

和香

諦める心を癒す千の風

利治

もう二度と逢えぬ読経に諦める

三喜夫

注意力散漫やる気ないらしい

夕胡

アンコールしても貴方は振り向かぬ

紀子

素晴らしい一日でしたアンコール

稚代

冥土まで届けと師へのアンコール

よしこ

川柳ささやま

遠山 可住報

珍らしい病氣と張切る担当医

章

珍らしい花に会いたい回り道

純子

むかしの君訪ね来るのか風が吹く

美緒子

珍らしくスーツを着たら肩が凝り

二英

年輪の数だけ生きた足の跡

文子

開店を祝う花輪にある序列

美紗子

珍らしい友の電話は選挙戦

靖子

村中が輪につつま込む嫁御寮

多美子

まだロマンあつて寿命を延ばしたい

かほる

幾山河越えてロマンをぬくめ合う

つや子

珍らしくはない手が出る母の味

富美

胸の傷癒しに故郷の輪に戻る

哲男

珍客にされ借金を言い出せず

可住

長柳会

村上 直樹報

寅さんと見た良き日本日本人

直樹

思い出は映画のような恋をして

光弘

播いた種刈らねばならぬ不始末の

武男

晩婚で見事射とめた赤い薔薇

靖博

銀幕の悲恋の二人美男美女

不二雄

播くうわさ風に吹かれて何処へ飛ぶ

明子

夢の中映画のような恋をする

輝子

友達を定期を借りて行くデート

正博

野の花は種播かぬのにたくましい

もこ

アスファルト割って健気に草芽吹く

史

靴音で家族見分ける妻の勘
寅さんにあこがれ孫と柴又に
靴音を合わせ二人は恋最中
淋しさは映画帰りの一人酒
歩き初め可愛い靴をプレゼント
その昔穂高知ってる登山靴
面接にすっかり締めた靴の紐
いい人と言われ履いてるキツイ靴
釣鐘を打って日頃の鬱放つ
名優は後ろ姿も演技する
靴ひもを結び直して二度の職
この種が実をつける日をふと思う
教養を振り播き過ぎた副作用
耐えること誇りに生きた母の靴
子に軍靴はかせぬ誓い八月忌

大原川柳社

山本

玉惠報

子の心引き寄せる縄縋うてます
坂道を避けて夫婦の縄電車
泥縄の受験に先ずは神だのみ
愛つなく縄を二人で纏うてます
縄電車孫が我が家の運転手
縄尻を掴まれているあわて様
途中まで上げた拳の置きどころ
困炬裏はた縄なう過去にある思い
うさ晴らし丁度と思う縄のれん
縄張りを競っている選挙カー

たけし 正一 敬二 よしお 靖子 正子 マサ 芳野 美代子 正美 けい子 幸雄 和子 英美 富美子 玉惠報 さちこ 敏夫 地佳平 南花 辰江 妻 子 悦子 喜美 巴子 美佐子

縄のれんくぐればみんな良い仲間
酒を断つ決意がゆらぐ縄のれん
縄張りを守って鮎が昇天す
どん底で登るしかない縄梯子
縄のれん肩の力を抜いて飲む
縄のれんへ夫むかえに行つた日も
メ縄に亡夫偲んで纏うてみる
縄張りも人間だけではないらしい
縄とひも電車ごっこもした昔
人生の裏と表をつなぐ縄
鹿狩りの思案に暮れて縄をなう
命がけで縄ない合うて来た二人

京都塔の会

都倉 求芽報

経験の豊かさ裏り風祈る
せいいつぱい土をこじ開けほら新芽
午後の陽へ朝顔少しウツになる
朝顔よりゴーヤを植えるリアリスト
朝顔の巻で源氏に音を上上げる
あのやんちゃお茶もお花も知っている
腕白のボス案外にお人好し
やんちゃなどしないいい子の裏の顔
熱らしい無口になったやんちゃくれ
背かない盲導犬の目がやさし
背いた分みっちり親の墓洗う
火柱が立つた親に背く恋
背徳の書に十代の心揺れ

みさえ たつ子 真 あすなろ はし芽 絹子 己吉子 エミ子 とめの 文代 恵潮 玉恵 輝美 ふりこ 求芽 啓子 尚士 篤子 萬的 宏子 昌乃 高栄 満子 欣之 英旺

西宮北口川柳会

黒田 能子報

母の教え背いてからの小宇宙
すき焼を大人の味にするお葱
生野菜欠かさぬように言うカルテ
ミニトマト庭で作つた三回忌
京野菜 京で育ててこそその味
朝市の野菜作者の顔で買う
捨てられた野菜拾つていいですか
裏庭に愛が不足のナス キュウリ
折り鶴の翔ぶ天空は晴だらう
天覧に話題残したホームラン
天性の明るさ運を掴みとる
夫です天地無用に願います
天と地に守られながら今日も無事
有頂天しばし揺れてよイヤリング
おだてられ天まで昇る奴風
お天道さ値打ちない汗かかせない
身の内にひまわり黄がパツと咲く
人生の岐路かハートに黄が点る
大阪のおばちゃん黄でも走り出す
黄の海でひまわりでも溺れない
赤と黄で食べくらべしたかき氷
方向音痴バスが来てからうろたえる
バス通り裏は昔の風が抜け
曇る日も干さねばならぬ沢山
曇り空膝の痛みで明日は雨

葉子 則彦 庸佑 とし子 綾子 美義 福子 益子 孝一 奮水 美龍 正和 悦子 わこ 朋月 哲男 紀乃 遠野 晴美 求芽 耕治 忠 章子 五月 直

この一手曇る基盤に光さず

ケイタイが一日鳴らない日の曇り

陰りない瞳曇らせてはならぬ

千の風曇る心を吹きとばす

虚像かも知れぬ眼鏡の曇りとする

曇り後晴れリベンジなつた美味い酒

長生きは嬉しけれど気を遣い

お気楽な姑で仏は嫁まかせ

悪友の苦言が胸を締めつける

氷なら我が家は自給自足です

8・6・9 怒り滲ます原爆忌

顔見えぬサンバイザーは変なもの

図々しく嘘もまじえたマニフェスト

川柳塔なら

坊農

柳弘報

鮎釣りのおごる心は初夏を盛る

大盛りを二杯食べても太らない

割り勘と聞いてのれんが盛り上がる

盛り上がる気分ていついて来ず

数よんで盛り分けているサクランボ

かたつむり雨のリズムで足馴らす

五十年やつとリズムの合う二人

絶望の日も心臓のリズムミカル

草笛のリズムが残る耳の底

恋をするメトロノームが狂いだす

ほどほどに妻のリズムへ歩を合わせ

母としてデンと分母にいるリズム

松煙

千代美

能子

江美

宏一

比ろ志

曙蝶

キヨ美

光久

りこ

いたる

二英

萬的

クイズ狂腕が鳴つてる鉤括弧

反応に機敏な金魚から売れる

あの日から機敏さ欠けた脳と脚

盛りかごに秘めごと一つ紛れ込む

介護士の腕に委ねている五体

一服を盛りたい奴と呑んでいる

出直しのリズムに乗れぬ錆びた脳

手のひらへ盛る幸せがあなたのかい

機敏ではないが世渡りはうまい

座の空気素早く読める名幹事

隙見せたその瞬間をつく機敏

逢える日の鼓動ボレロになつてくる

送別のバラ団塊の腕ぞろい

ペイコマのリズム忘れた路地の風

少年のリズムで虹を追いかける

鈍感力そして男の腕子そば

再生の男の踏み出しが機敏

ケロイドの腕に昭和は終らない

川柳塔鹿野みか月

土橋

サービスに要らぬものまで買っちゃった

サービスがよくて扉を開かせる

漁火をサービスにして浜の宿

小咄をサービスエリアから拾う

サービスの言葉に弱い時もある

サービスと言われて高い買物し

看護師のさま様呼びはサービスか

恵美子

一風

寿美

美はる

美千子

利昭

和夫

朝子

弥生

隆盛

茂雄

理恵

道子

秋雄

辰雄

柳弘

洋子

良一

螢報

みどり

永子

彩子

ひろこ

八重

武彦

孔美子

サービスの腕さにかねる要介護

五割引きその上砂糖一袋

漁師根性蟹一匹を大サービス

サービスに疑似餌を撒いて人寄せる

サービス判ほどの余命を重んじる

亡き夫の愛年金で送られる

人生の実りの秋と知る七十路

七十年躰なきがまた踊る

ひまわりも太陽さんとうよう踊る

霧晴れておそ咲きへ花咲きました

躍ること下手な私は字が踊る

老兵は死なず踊つて去るがよい

小踊りをしている訳は秘密です

ウオーキング足が笑つて踊りだす

月が出た弾みぞうりの揃いぶみ

踊りたい人ばかり居る舞台裏

極楽のような気持ちで踊らせる

サービスの良い店ちよつと入ってみる

アラ不思議年金までが消えている

年かなあ腹も立たなくなってきた

朝霧に今日は晴れると期待する

踊つてもどうせ仏のたなごころ

うれしくなつて満月に踊りだす

川柳大阪

長井 善純報

ふる里へ流れる雲を見て飽かず

きみ子

和枝

節子

はるお

諷人

幸枝

弘子

和子

睦子

くに子

房子

菊乃

公子

実満

富久江

かおる

汲香

武子

みさ子

茶子

久枝

照彦

螢

朝子

九条のバツジをつけて背を伸ばす
スーダラ節そしてバブルの物語
分からんな円満離婚と言う言葉
健康は朝の散歩がバロメーター
殻やぶり人生一度悔いもなし
夢破れジャンボのくじは紙ぶき
実直の心で生きた半世紀
片想い抱えて古希の日は長し
二十歳で芽五十で薔古希実る
実際の歳はかくせぬ同窓会
実感税の重さと負担増
実際は上げるんでしよう消費税
惜しまない努力に実は従いてくる
実力は稽古の汗で作られる
あの話実はこうだと酌きにくる
政界の複雑説明浄水器
選挙戦なにか複雑つかめない
紅い糸絡む相手がややこしい
ややこしい話になろう奴が来た
複雑な山肌にある千枚田
二人共好きな夫婦が離婚する
複雑なところに人相まで変る
うな井は国産ですか舶来か
雑音の消えて写経の筆進む
複雑な気持ちのまままで仲直り
読めるけど書けない複雑な漢字

一歩 柳弘 功 隆司 信醉 花笑 洛醉 川童 和 彦太 勝弘 美花 東吉 鉄心 まつお 喜楽 福世 かよこ ダン吉 章久 修 笑風 紀雄 一風 柳昌 善純

川柳塔まつえ吟社 三島 沁丘報
ハンカチの匂い忘れぬ女も老い
ハンカチに汗と涙の過去がある
ハンカチは涙のワケを知っている
トランクに結ぶハンカチピンク色
ハンカチは白と決めてる頑固者
ハンカチの折り目の秘密鳩が出る
過去帳を順に繰って盆灯籠
五十音順番繰って探す文字
天変地異順番狂う事もある
順序よく開ける夫婦の玉手箱
人並に順よく育ちありがとう
三代を引き継ぐ愛の順送り
湧くものがある少年のハートモニカ
こんこんと湧いてた池が黙り込む
蝶が湧くあなたの手紙からいっぱい
山奥にちよろちよろ湧いて神の水
名水が湧いて故郷にみちしるべ
雲が湧く軽やかな嘘ひとつつく
究極ははらはら止めて無になろう
はらはらとさせてあの娘は嫁にゆく
はらはらもどきどきもあるまだ女
はらはらとさせた子供に支えられ
初舞台心はらはら待つ出番
はらはらと散る花びらを手に受ける

町紅 沁丘 知恵子 札子 長吉 多賀子 幸子 和歌子 すみこ 陽次 博子 スズコ 桂子 波留子 紫見 英子 蘭 畔 日出子 茂美 たけし 多喜 房子 みち子

六道湖の珍珠喉こし踊り食い
スカウトは来ない関取並に食う
屈託もなく三色箸はこぶ
おいしいね脇目もふらず西瓜食う
あちこちを見渡し一寸人を食う
うなぎさんごめん今年も丑の日だ

南大阪川柳会 吉川 寿美報
海軍仕込み階段一段ずつ登る
階段に笑われてる歳でんな
階段の数だけ溜息を漏らし
出世階段のぼり詰めたら孤独待つ
階段を前に拒絶の膝頭
一枚のハガキで結ぶ情けの輪
遺言状波紋投ずる家族不和
ひよつこの飯面で波紋ぐりぬけ
乙女らは探す四葉のクロローバー
青春の波紋が続く古稀の夢
用足りた後で見つける探しもの
ぬくもりを探し探して縄のれん
故郷へ帰って探す里の詩

ちえこ 柳歩 政子 静恵 幸 注湖 壽美報 修 太郎 ダン吉 楓楽 東吉 弘泰 弘子 憲太郎 克己 集一 和雄 修 章久 福世 弘風 直子 とし子 柳伸 柳弘

うっかりと仕舞い忘れていた尻尾
約束の時間メモしてまた忘れ

アメリカはちゃんと持つてる核兵器
エゴ捨てた仲間が集う良いチーム

献立は妻のエゴから作られる
エゴなどは一人も居ない蟻の列

自己顕示なれた道でもよく転ぶ
家計簿に夫のエゴの跡がある

我を折ってぼろぼろ棘を落しとく
自己主張味方の数が減ってゆく

辻褄を合わす糸口探してる

川柳茶ばしら

板山まみ子報

八時間良く歩いたね登山道

着くずれがファッションとなる若い町
何んと言う花が知らねど一休み

独り身にならないように今はどう
虫追いの行事に走る夏帽子

家中の汗を泡立て洗濯機
冷汗の連帯妻に突つかれる

手を焼かす孫はめられて汗を拭く

ほたる川柳同好会

水野

黒兎報

指切りのあとしまつに困ってる
仏壇に肩書き入りの子の名刺

消費税いるの三途の渡し賃
冤罪を生むてこずっている自白

寿美

ルイ子

昌紀

忠昭

柳右子

たもつ

千里

祥昭

重人

志華子

百合

文男

週行

秀水

幸子

かつ子

美千代

まみ子

勇治

祥風

干治

見清

親爺の一喝震えたのは昔
資格とは無縁に生きて来た月日

消費税後進国のままでよい
パーゲンで消費税分チャラにする

うしろ向きの肩震わせて名演技
資格など持っていないがプロの主婦

地が震え人を震わす核施設
タイガーはこゝ一番に震えない

消費税負けときますと先越され
高齢者資格あるのに無視をされ

税金のおつりが眠る貯金箱
消費税ない暮しても辛かった

六十二年前の夏の震えを忘れまい
てこずった悲餓鬼今や永久の友

翠洋会

谷口

義報

肋勝

契子

春代

長一

いさむ

良い日悪い日波があるから面白い
荒波にもまれ優しい石となる

さざ波も少しはあって良い夫婦
好不調波はあるけど根は元氣

火遊びの怖さを知った夏休み
才能の限界を知り背伸びせず

何ことも知ったかぶりの人がいる
いらいらも食べて咽えば遠ざかる

行く末は介護保険に頼る杖
指切りの固い約束たがえまい

夢の中彼に抱かれて助けられ

雪子

桂子

信男

久子

螢柳

美智代

黒兎

柳童

いさむ

長一

春代

契子

肋勝

義報

みつ子

志華子

昭春

尚士

げんい

照子

千梢

さと美

満作

義千歩

重風

一幸

蛙城

和香

川柳花の輪

妻谷 重風報

メモ忘れ頭のシワをかきわける
メモ持参買い過ぎ心引き締める

メモ一つ国を動かすこともある
悔やまれるもう覚えたと捨てたメモ

メモ残し指図あれこれ妻の留守
メモを見て料理するの今のうち

メモよりもメールとびかう子供たち
幼妻メモを頼りの市場籠

妻のメモ金釘流に悩まされ

岬川柳会

八十田洞庵報

あの声は女性上位とアマテラス
子に従う暮らしに慣れる今日の幸

老い二人強い絆で支え合う
子沢山天狗のメダル贈りたい
老いたてと汗は出ますと仲間入り
伸びる子を見守り支え夏休み
一行で終る日記の無意味な日
朝礼のフアイト従う未来の子
盲導犬けなげに主人支え生き
旧家の嫁因習守り幸遠く
出合いありそのつながりを温めて
釣り客の後の始末にうだる日々
カネで済む話が寒い熱帯夜
老いひとり呑気にこの世謳歌して
昔からいつもあなたの影法師
孫迎え手料理せんと妻元氣

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

新築の木の香ローンを忘れさせ
新しい意見さわつく会議室
新しい畳の上で大の字に
もう少し生きるつもり畳替え
バツと見は新しそうなお中元
新しい風よ嵐を呼んでくれ
がぶがぶと酒を呑みたい時もある
ひもじさをがぶがぶ水で満たした日
がぶがぶと水飲める事幸せさ
言い訳の恥ががぶがぶ水を飲む
深酒を親身に叱る聴診器

珠子 富美子 悦子 和美 年子 廣作 俣子 とみ 洋子 桜琴 重人 房枝 洞庵 東吉 志洋 庸佑 ちづる 泰子 光男 みつこ 敏 喜久子 真一 一知 重人

がぶがぶどうぞ森の水です神の水
がぶ飲み人の噂が胃に溜り
アロハきて夏を涼しくすごしてる
ハワイでの第一声はアローハ
やしの実がアロハアロハと流れ着き
アロハオエ歌えば腰が踊りだす
アロハ着た僕がふわふわして困る
若かえりハワイで買ったアロハシャツ
アロハ着たスターと出会うピアホール
長寿国横目に蟬は地にかえり
脱皮する蟬の力に教えられ
独り居へジャズを届けられる蟬
生きている証とばかり蟬時雨
思い切り鳴けよ限りある命
蟬の羽根担いだ蟻の列進む
蟬しぐれ今年も亡母に逢える夏

富柳会 池

天平の愁い含んだ阿修羅像
小遣いはカット誘いは増えてくる
目を見張る極彩色のサラダバー
通念が風化する少年の罪
カットした髪をだれも気がつかぬ
肉好きの野菜嫌いでメタボです
みつ豆の女王氣取りさくらんぼ
推敲の出来ない過去を句で飾り
ワンルーム自由淋しくサラダ買う

扶美代 美代子 保江 正子 惠勇 ヨシ枝 ダン吉 フジ 章司 りつえ 一壺 かつみ 久仁子 悦子 六点点 いさお 一慧 和子 淳司 隆彦 鐘造 いさお 千華 七朗 伸雄

森子報

騙し舟海へ続いているコント
晴天の昨日が見える逆上り
掛け損のまま三途の川も渡れまい
父母の重みで割れたシャボン玉
一滴大河とならん意地を持つ
雑音の真ん中蟻の小宇宙
若者に丸い心がノックする
腹割って話せた友は雲の上
奥行き狭い所に愚痴が棲み
恋文に含め沸き立つ心の絵
二三滴毒を含んで華の乱
虫食いのサラダに母の青信号
ボケットの中で醗酵待つ明日
あした切る乳房と話し込んでいる
紫陽花の青のジョークに酔っている
先着順わたしの前でカットされ
馬鈴薯をサラダにしよう元氣な日
どくだみの花情念が断ち切れぬ
朝食べるサラダの味に妻の愛
まごころの真んまん中もお美貌
何もかも含んで静かなる炎

むらくも川柳会 毛利

初盆の灯りに仏照れている
盆踊りなぜか太古の香りする
神伏せて初盆色濃く霊行事
盆踊り浴衣の足が白くみえ

佳子 よしみ 高鷺 恵子 ひろし 未知 淳子 寿之 彦次 武人 奏子 澄子 浩子 深雪 アキ あかり 田鶴子 扶美代 欣之 森子 幸報 定子 彰 美恵子 美保

盆迎え帰省ラッシュが動き出す
浅学の哀しみ辞書と共に住み
サングラスかけて鏡の自分見る
病床につく母の笑顔ですくわれる
また一つ忘れてそつとにが笑い
出雲弁わかつたような顔をする
長い梅雨雑草だけに悩まされ
つやつやの彩を無くした遺言書
世の中は親子のしつけ捨ててゆく
鎮魂の炎燃え立つ五山の火
顔ぶれが揃うと謡う安来節
名將は歩の使い道知っている
入学を陰で見送る祖母心
体重計もつと減食せよと言ひ

川柳塔みちのく

小寺

来年の開花契約お礼肥
瀬戸際の男のやさしさ蝶結び
手厚い介護いつもお返しくれる妻
朝の膳帖の塩焼き盛り付ける
散る花にまた来年と指切りし
持てなしの花は私の自信作
酒三合五合過ぎて宇宙人
嫁さんの手厚い料理お盆どき
嫁達の手厚い食事が楽しいね
準備完了法名写真遺言書
迎え火を乱され気付く亡母の風

花菱報

幸 喜美 信夫 英男 秀子 ます美 惠美子 秀夫 清子 愛子 瑞枝 俊子 久子 かずこ
きよし 和香子 夕香 あすなろ 美鈴 成柳 一呑 てる 隼人 順風 花匠

新盆のはの送り火あたたかい
娘の一生契約をするご婚約
金メダル見事輝く乱れ髪
平凡な人と指切りしています
札束を囲むと不整脈になる
完熟のトマト両手で受けとめる
契約書ないが死に水とると言う
一瞬の乱れ突かれた逆転打
この町のこの人情の温かさ
豊中もくせい川柳会 江見 見清報

雅城 愁女 井蛙 黙人 岳水 花峯 慕情 五楽庵 重人 庸佑 啓生 玲子 和子 郁子 寅次郎 タミ 宇乃子 幸雀 十八娘 求芽 寿美子 則彦 美義 千津子

競うこと教えないから柔になる
飢えたこと孫に教える敗戦忌
うつぶんを晴らす冷酒二日酔
気持ち込めハート一つのメール打つ
教えてもすぐに忘れる母の老い
ひらがなの気持ちになつていく老後
習うより盗めと師匠の手の動き
コッペパンアメリカさんの気持だった
怯む子に親の気持ちが追い討ちを
うまくいったが何か気持ちが落付かぬ
ストレスと二人三脚して元氣
逢える日の気持化粧は少し濃く
頭の中で自由に心遊ばせる
ひらめきが欲しくて風に触れてみる (A) 千代

倉吉川柳会

竹信

照彦報

一円も汗の結晶億となる
汗かきが日に三度目のお召し替え
恥かいた汗が滲んでいる額
落選に汗も涙も枯れ果てる
危機一髪ブレーキ踏んで冷汗だ
安倍総理冷汗三斗かいいたろう
汗かいた後のビールは格別だ
両親の示した道をそのままに
血統を示す毛並みと紋所
母思う緋に見入る展不会
先ずやって見せるそれから教えこむ
早人 勇治 知香子 巴子 尚士 洋 萬的 都代子 佳恵 肋骨 満寿巳 美智代 比ろ志 千代 康子 風露 螢 賀寿恵 日出子 みちる 泰輔 和子 萩江 喜美子 茶子

範示す親の態度がなつちよらん

テストの点示され親とよく似た子

堂々と示し合わせる天下り

辻地蔵浄土の道を手で示す

わたくしをギョッと絞ると酒が出る

気まぐれの私に似てる今朝の雨

私の信念なぜかからまわり

私小説自己満足の出来上り

私の知らぬ日本語増えてきた

酔っ払いわたし私でなくなつた

犬嫌い呼ばぬ私に寄つて来る

甲子園ただ暑い外野席

野球好き朝昼晩の飯忘れ

生涯に一本打ったホームラン

巨人負け爺の不機嫌隠せない

アメリカでハンカチ王子名を高め

声援が球児の汗をぶつ飛ばす

一番も九番もありナインなり

ロボットに振り回されている工場

城北川柳会

小谷 集一報

香港でも堂々大阪弁値切る

憧れた異国に遺影連れていく

ロスで聞く大阪弁が懐しい

忌が開けた妻成田発ラスベガス

底辺を流れた石のまんまるい

先の先読んで小石にけつまずく

悠子

由紀子

祐子

かつみ

完司

龍枝

玲坊

よしえ

きみ子

重忠

美津恵

瑞子

酔美蓉

鬼一

和枝

貞子

京子

次男

照彦

萬的

郁夫

和夫

章子

朝子

柳弘

どんな石なるのか夢は彬の碑

不器用でも石橋たたく人がよい

純なりにスポット浴びてみたい坂

あゝ命朝日を浴びて武者ぶるい

浴びるほど飲んで割勘とは愉快

被災地でやつと水浴び子の笑顔

浴びるほど飲めたらいいと思う下戸

七色のシャワーを浴びる遠花火

水しぶき浴びて瞬時の虹つかむ

喝采を浴びた花にも蔭がある

蝉しぐれ浴びて羅漢の無表情

少年の積木みるみる高くなる

孫が来てみるみる減っていくお米

可もなく不可もなく寝るありがたさ

理想郷この世にあつて日々笑顔

辛抱してお経を聞けば酒が出る

張りつめた命だくすくつてやろう

ビルが建ち祭り花火が遠くなる

肩の力抜いた所が着地点

あと少し付録の余生噛み締める

段ボールやないやろなこのウナギ

無茶を言う人だが金はすぐに出す

一番の味方の妻に言えぬ事

暑氣払い六甲おろし伍ビール

いずも川柳会

佐藤 治代報

瓜漬けの粕が酔わせて泣き上戸

一歩

勝弘

たよし

修

集一

麗

東吉

正

明子

とし子

志華子

典子

弘風

美智子

ルイ子

たもつ

恵子

福世

睦子

昭

倫子

利昭

はじめ

順三

徳子

絶品だ骨まで食べる魚の味

ローカルの空港で待つ海の幸

悔いている自分のミスを拭くタオル

湯上がりの宝受け取るバスタオル

ローカルの里に祈りの空がある

母の味茄子のあざやかな一夜漬け

トロツコの列車が風情を楽しませ

どつぷりとローカル色に染められる

ローカルの話題お金と嫁不足

まな板の魚の気持ち聞いてやる

バスタオルフラダンス調夫の腰

朝市の魚に残る海のいろ

宿タオル旅の想い出語り出す

涼風が掠っていった胸の傷

どつぷりと漬かり抜けなくなった足

塩漬けのメソメソ洗い陽に当てる

過労死はないか回遊魚の運命

泣いたこと笑ったことも漬ける壺

朝漬けも手を出ししる総入歯

人間の匂いを消して干すタオル

馬耳東風涼しい顔で嘘をつく

納涼を誘う湖畔の揚花火

薬漬けでもカラ元氣出している

退潮に委ねて魚逆らわず

小魚をいっぱい食った鯛です

ぬるま湯にとつぷり漬けた訳でなし

健柳

しげる

陽次

桂子

治代

多輝子

房緒

佳子

たえこ

祐次

佐余

孝売

敬子

多喜

寿美

玲子

ちえ

歌子

まこと

すみこ

幸

房子

蘭水

多賀子

茂美

美佐子

やわらかい鳥になろうとするタオル
梅干なめてお腹涼しくしています
魚でも鰯の右派と左派

川柳塔打吹

野口 節子報

古里に浴衣が集う盆踊り
里帰り部落総出の盆踊り
千の風万のたましい集う盆
この暑さ心まで届き煮え上り
心の芯くらく時の深呼吸
口喧嘩芯から冷える冬の海
芯のある川の流れば枯渇せぬ
へばりつきなかなか取れぬラップの芯
鉛筆の芯が尖りたがっている
蒟蒻の芯を探って粘り聞く
大工さん鉛筆の芯なめている
結婚してから芯が抜けていく
寄附集めの上手な人が役に付く
やじ馬になって集まる開店日
むつかしい事のひとつに人集め
マスコミの情報集め目に余る
琴光喜声援集め大関に
夏祭り苦勞の種は人集め
反戦の誓い集める八月忌
こなかりに大集合の仏さま
人集りたった一円安い店

章峰 文子 ちかし
美代子 勝憲 玲坊 滋 和子 紀美恵 照彦 京子 美ツ千 禎元 貴恵 芳光 みち子 龍枝 佳女 善江 隆一 公恵 美知江 やえ 石花菜

簡単に集まる酒を飲む仲間
サユリに化けたら抱いて上げましょう
熱帯夜枕を抱いてうとうと
絶ちきれぬ想いを抱いて五十年
千の罪抱いて浄土へゆくつもり
簾枕抱いて悶々熱帯夜
泣きにきた海を抱きたい抱かれたい
楽しむために苦しみ抱いている
やせ蛙まだ逆転の夢を抱く

サークル檸檬

吉田あずき報

いぶし銀などでござらぬ枯すき
サンダルの軽さ本音で生きている
貴賓席のサンダル足を組んでみせ
サンダルを背負って帰る盆踊り
サンダルでクールビズする炎天下
ひと夏の恋とサンダル知っている
焦るまい焦るまいサンダルがグネる
サンダルから覗くかかとに恋をした
夢のあるうちは迷わず生きたる
玄関のサンダル孫が来ているな
サンダルのサイズが足を選んでは
生きるとは半歩下がってまた歩く

すみよし川柳会

岩崎 公誠報

完司 重忠 たけ代 美美子 睦子 玲子 きみ子 螢 節子
あずき 希久子 たもつ 哲夫 遠野 楓楽 昌紀 美龍 みつ子 光久 義子 裕之

あの人の辛口批判気持ちいい
嫁からの辛口メール受け流す
辛口の酒を好んでいる余生
甘いもの辛い物まぜ味になる
老いたとて二人揃って激カレ
世知辛い世間を知った独り立ち
唐辛子辛み上手に腕ふるい
辛口の評価自分にはね返り
夏風邪で今夜も眠れぬ夜がくる
辛い点つける一票持つてます
火傷して初めて知った辛い恋
辛口でつかれビエロになっている
脳みそに七味ふりたい午後三時
ばあちゃん孫に甘くて子に辛い
採点の辛い先生忘れない
愛とむち今日は辛さをあやしとく
微笑めば唐辛子ささえ甘くなる
親よりも辛い意見を孫が言い

ローズ川柳会

山崎 君子報

小うるさい家族心中では頼り
辞書開きまたも自分の無知を知る
耳底に風鈴売りや金魚売り
肩車して風鈴を掛けさせる
汐風を受けて膚色健康美
午後太陽ひまわり今日も燃えている

ヒロ 明江 伸子 幸子 日の出 かりん 俊夫 萌 功子 桃花 遠野 篤子 りつえ 舞夢 定子 蕉子 昌紀 公誠 孝一

夜は猛暑朝は笑顔で会う鏡

ろうたけた姪たち揃ううら盆会

午後のテレビなぜか不倫をみています

涼を呼ぶ風鈴売りのしぶうちわ

堺川柳会

河内

月子報

武庫坊
年代
義子
君子

ドングリの輪が温かった谷の底
なまけ癖言訳さえも底をつく
底辺の暮しを知らぬ天下り
今が底底と自分に言い聞かせ
懐妊に泣いて喜ぶ旦那はん

潤子
萌
八千代
梓

血液型性格判断信じない
もう地下へ戻らぬセミがよく喋る
仰向けにやつとくつろぐ蟬むくろ
勘定の合わない誇りポランテア

二英
正和
哲夫
哲男

うぶみ川柳会

小谷美ツ千報

噂していたら背中をたたかれた

達人にも知り顔で話してた

女とや胸に底なし沼を抱く

乾杯を何度でもする大ジョッキ

どん底で夢に出て来るいい時代

酔い覚めてかばんの底を捜すくせ

底抜けの明るさ癌も寄りつけず

夫婦でも覗いてならぬ腹の底

借り物が気ますくなつて返せない

おしまい馬券に望みかけている

高望みするから神は横を向き

お願いだせめて一人は産んでくれ

底抜けに明るい嫁が来て気楽

胃袋が底なしになる伸び盛り

肚の底割った話で喧嘩する

うまいこと望みどおりに別れたが

どん底で手と手つないで来た絆

健康でちよつと小遣いあればよい

金で頼んで正論たまらせる

底抜けに明るい顔でまた離婚

昼寝からつづきあの世へ行けたなら

鈍感も土壇場に出る底力

海の底蛸と若布がダンスする

底辺でないとか飼う青テント

川柳さんだ

北野

哲男報

宵祭りピアガーデンに喉は鳴る

華やかに黄色い声のギャル神輿

出張を理由に戻る祭り好き

祭囃子客待ちうける鯖の寿司

金貸した時だけ生きて拜まれる

スタンドでひたすら拝むあと一球

満天の星空やはり神はいる

力こめ拜んでいます手術前

日日不変今朝も日の出に掌を合す

メーキャップ小野小町に化けてみる

活断層なだめなだめて夫婦仲

あの日へと戻ってみたい赤い靴

目と耳は弱くなったが鼻が効く

百円で誰が造ったこの眼鏡

半銭

冬虹

半銭

健吾

健吾

雅司

光久

キヨミ

美紗子

藤朗

忠

章子

歳子

好文

順子

茂山

宣子

聖也

一泉

雨音を数えて夢が消えてゆく

美しいビルの雨漏り見てしまふ

窮屈な動物園で人と会う

脚と胸ゴロンと出している自信

ペンとメモ横にゴロンと目をつむる

たまあには野原でゴロン空見たい

カイワレが窮屈そうに背伸びする

メタボリが窮屈にする胴回り

星雲たつぷり吸った野菜取る

天の川の雲に濡れる星二つ

身を守る天道虫はゴロンする

怠け者ゴロンとなると動かない

またゴロン影も用心深くなる

満ち足りて花の雲を掌に受ける

ゴロンゴロンもくってやった酔いたんば

いい雨だ夏の野菜に会いに行く

いのちにもこぼれる露のひと雫

芋の葉が銀の雫を弄ぶ

やがて海となる洗面器の雫

美ツ千

ひろこ

幸恵

芳江

天人

和子

京子

龍枝

きみ子

よしえ

かつみ

あづま

雄人

睦子

重忠

孔美子

螢

石花菜

宣子

第31回 寝屋川市民川柳大会

日時 11月3日(祝)

会場 正午開場 1時締切
寝屋川市立総合センター 4階
図書館研修室(京阪寝屋川市駅下車)
バス西口乗り場より・守口市駅行
太間公園行他)

兼題と選者

「慰める」 吉岡 修 選
「忠告」 藤村 亜成 選
「浮く」 鴨谷瑠美子 選
「歌う」 村上 玄也 選
「紅葉」 住田英比古 選
「テーマ」 木本 朱夏 選

席題 ありません

賞 各題とも二句

会費 1000円
各題秀句に賞状と記念品

10月29日必着(郵券4000円)
送り先 〒572-0063

寝屋川市春日町9の9

高田 博泉内

川柳ねやがわ

主催

後援

寝屋川市川柳協会
寝屋川市文化連盟
川柳ねやがわ

第79回 奈良県川柳大会

日時 10月21日(日) 12時開場

場所 生駒市コミュニティセンター
文化ホール(生駒セイセイビル内)

宿題と選者

「化ける」 前年度優勝者 阪本 高士 選
「鼻」 川柳塔なら 大内 朝子 選
「爽やか」 やまと番傘 中山恵美子 選
「駅」 生駒番傘 萩原三四郎 選
「みどり」 川柳平城の会 藤井 義子 選
「あこがれ」 あかね・若鮎 南 芳枝 選
「譲る」 奈良番傘 山田 順啓 選

出句締切 13時半 各題2句 席題なし

参加費 1500円(大会発表誌呈)

欠席投句 定額小為替1000円同封。

10月10日までに郵送。

〒630-0247 生駒市光陽台184

吉川 卓宛

TEL 0743-7416019

FAX 0743-7416099

☆昼食は済ませてお越し下さい。

駐車場はありません。

主催

後援

奈良県川柳連盟
奈良県・生駒市・日川協 他

出雲総合芸術文化祭

川柳大会」案内

日時 11月17日(土) 11時開場

会場 パルメイトホール 4階

兼題(各題2句) 席題1題

締め切り 1時

「ロボット」 但見石花菜 選
「身」 佐々木 裕 選
「支える」 金築 雨学 選
「ぎりぎり」 長谷川博子 選
「現」 辺 安子 選
「築く」 安黒登貴枝 選

会費 1500円(昼食費含む)

賞 市長賞、教育長賞ほか

欠席投句の方は、参加料1000円

(現金または小為替)を添え、10月

31日までに〒693-0052出雲

市松寄下町284 吉岡きみえ宛お送

り下さい。

主催

出雲市・出雲市教育委員会

出雲総合芸術文化祭実行委員会

出雲市川柳連盟

柳界展望

○第11回川柳展望全国大会は8月3日、ホテルアウィーナ大阪にて153名の出席により開催された。同人天位。

新しい皿にも映える古い知恵 高瀬 霜石
逃亡中は笑わぬように気をつける 寺川 弘一
バックスの神は許さぬ自爆テロ 高瀬 霜石
青春にレモン還暦にもレモン 高瀬 霜石
わたくしの責任である世の乱れ 新家 完司
水泳の通信教育受けている 谷口 義
買ってから一度も研がぬ花鉢 寺川 弘一
○第54回八尾市民川柳大会は8月26日、八尾文化会館にて開催、出席163名。同人の秀句は次の通り。

虫へんが好きなやさしい子の日記 宮西 弥生
旅がえり妻の土産のようしゃべる 吉村 一風
世界の目に今大阪は夏の陣 河内 月子
八月を罵るように蟬の声 太田扶美代

身から出た錆を真水で洗わねば 高田美代子
○第15回和歌山県川柳大会は、9月2日212名の参加を得て和歌山JJA会館で開催。本社同人の秀句は次の通り。
和歌山市長賞

私を濃縮すると蟻になる 三宅 保州
○第59回西日本川柳大会は9月2日久米南町文化センターに於て開催、出席者274名同人天位。

美しい日本語つかうおばあちゃん 河内 月子
○北方領土川柳社（札幌市）誌上大会、応募616句中、本社同人の次の句が特選に選ばれた。

美容院出て一本の薔薇になる 米田 水昇

▽出 版△

はたる川柳同好会（水野黒兎会長）は創立十五周年記念合同句集（第三句集）川柳「はたる」B6版97頁を発刊、23名の句を掲載。

▼計 報▲

瀧本きよし氏（同人、川柳サークル卯の花会長）9月6日逝去、9月9日の葬儀には同人多数が参列した。75歳。追悼文は次号。

▽同人動向△

○9月2日西日本川柳大会に出席のため天笑主幹他4名岡山県久米南町行。
○第22回国民文化祭とくしま2007の準備のため9月2日、3日西出楓楽理事長は徳島行。
○政岡日枝子さん（理事・米子氏）は川柳「番傘」誌8月号「リレー放論」欄に執筆、「山陰も明るい」と題して地元の川柳勉強会の

新同人紹介

なか 中 井 井
—天笑・みつこ・遠野推薦 萌—

様子を語った。

▽訂正とお詫び△

○8月号88頁下段16行目、くに子→くにこ。

○9月号90頁中段2行目、高島敬子→高島啓子

▽新誌友紹介（7、8月）

犬山市	飯田 秀水	紹介者	飯田 秀水
鳥取県	早川 遡行	紹介者	早川 遡行
鳥取県	田口 清帆	紹介者	田口 清帆
高槻市	北村 稔	紹介者	北村 稔
高槻市	安倍 和子	紹介者	安倍 和子
鳥取県	大塚美代子	紹介者	大塚美代子
鳥取県	岩崎 和子	紹介者	岩崎 和子
寝屋川市	和田 寅幸	紹介者	和田 寅幸
紹介者	富山ルイ子	紹介者	富山ルイ子
和歌山市	福井 菜摘	紹介者	福井 菜摘
紹介者	木本 朱夏	紹介者	木本 朱夏
大阪市	山崎 珠生	紹介者	山崎 珠生

常任理事会は9月7日（金）、出席者18名①第13回川柳塔まつりについて②18年度会計決算報告について③高野山合祀④六賞選考について⑤19年度役員選出について⑥定例確認事項⑦各部報告事項⑧その他。同人1名承認。次回は9月26日（火）1時30分

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
もくせい 川 柳 会	15日(月)午後1時半締切り 使う・秘密・もっと・自由吟	エトレ豊中5F 阪急豊中駅すぐ 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川 柳 さ ん だ	16日(火) 吟 行 会 財布・鉢・遠い・自由吟	新三田駅 午前10時集合 〒669-1515 三田市大原1553-12 北野哲男
高槻川柳 サークル 卵 の 花	18日(木)午後1時半締切り 軽い・留守・うっかり・虫 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-0826 高槻市寿町3-28-13 神野節子
川 柳 藤 井 寺	21日(日)午後2時15分締切り 銀行・エプロン	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
川 柳 ねやがわ	21日(日)午後1時半締切り 餌・テレビ・感謝・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	21日(日)午後1時半締切り 境遇・短い・裏方	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
東大阪市 川 柳 同 好 会	21日(日) 市 民 川 柳 大 会	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
岸 和 田 川 柳 会	21日(日) 第57回 市 民 川 柳 大 会	岸和田市福祉センター 南海線岸和田駅徒歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
南 大 阪 川 柳 会	22日(月)午後6時から 雑音・あっさり・こぼす 自由吟	住まい情報センター(大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪府中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川 柳 塔 みぞくち	22日(月)午後7時半締切り リーダー・縁談・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳クラブ わたの花	26日(金)午前9時半から 太っ腹・看板・ゲーム・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
和 歌 山 三 川 柳 会	27日(土)午後1時から 気楽・カード・息	勤労者総合センター 4F会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
川 柳 ふうもん社 吟	28日(日)午後2時締切り サイズ・もちろん・三度目	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0824 鳥取市行徳2-632 田中かをる
はびきの 市 民 川 柳 会	28日(日)午後2時締切り 開く・ゆさゆさ・ジャム 「目」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
京 都 塔 の 会	29日(月)午後2時締切り めっきり・匂う・健康	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

10月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
西宮北口 川柳会	1日(月)午後1時から (開催日及び開催場所変更) 果実・耳・渡る・自由吟	エビータの森ビル 2階 TEL 0798-64-5381 阪急西宮北口駅下車 北へ徒歩5分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
川柳塔 な	4日(木)午後1時から 分ける・毒・面子	奈良市立中部公民館4F (近鉄奈良駅④出口徒歩5分) 〒639-0251 香芝市逢坂2-720-20 大内朝子
尼崎 いくしま	5日(金)午後2時締切り 似る・音・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
倉吉 川柳会	6日(土)午後2時締切り 一人・味覚・いやらしい	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
富柳会	6日(土)午後2時締切り 絶・空間・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
城北 川柳会	6日(土)午後1時開場 役・吹く・しみじみ・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄千林大宮駅3番出口左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
川柳塔 唐津	9日(火)午後1時半から 走る・荷物・ゴミ	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
尼崎 尾浜 川柳会	9日(火)午後2時締切り 空港・テーマ・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
ほたる 川柳 同好会	9日(火)午後1時から 風呂・敬う・豊か	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール 蛸池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
堺川柳会	堺まつり 秋の誌上大会 投句締切り 10月10日	(9月号 P.76参照) 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 打吹	13日(土)午後2時締切り 柱・粘る・堂々	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川柳塔 まつえ	13日(土)午後2時締切り 茶どころ・鍋・緩む・くよくよ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島淑丘
川柳塔 みちのく	13日(土)午後5時半締切り 一瞬・進む・たやすい	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
八尾市民 川柳会	14日(日)午後1時から 地球・あっさり・燃える・雑詠	八尾文化会館5F 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔 わかやま	14日(日)午後2時締切り 誘惑・歪む・ストップ 「ほどく、く(ぐ)らい、ばかり(程度)の助詞」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良

編集後記

☆今年も六賞受賞者が厳しい選考の末決定をみました。受賞されました10名の方々に心からお祝いを申し上げます。

惜しくも選に洩れた方、次年度にご期待下さい。まず応募をお忘れなきよう、挑戦のチャンス逃さぬようなさして下さい。

☆新しく誌友になられた方思い切って毎月投句を始めてください。初めは少し勇気がいるかもしれませんが、習慣にしてみましょうと案外楽で、自分の句が活字になると励みになります。

☆今月号から新誌友の方、紹介者の方のお名前を柳界展望に掲載することになりました。7月以降、新しく誌友になっていただいた方です。これからよろしく

お願い致します。

☆思い切って何かを実行することを清水の舞台から飛び降りると言います。有名なこの舞台とは、高さ12メートルのところに崖造りに張り出している京都清水寺の舞台のことですが、この舞台は何に使われているのか疑問に思っていました。

☆「京都の不思議」(黒田正子著)によると「清水の舞台は観音様に舞楽を奉納するための舞台である。清水寺は北法相宗、奈良東大寺や薬師寺と同じで特別な法会に舞楽奉納を行う。山岳にある清水寺は置き舞台を造るスペースがなく崖に張り出す形となった。巨大な能舞台ともいべきもので橋懸りも演奏楽舎もあるが観客席はない。観るのは千手観音さまだけ」とあり、疑問もとけた次第。(希)

ひとこと

この間、私は読売テレビの所ジョージさんの「笑ってこらえて」という番組にほんの僅かですが出演する機会を得ました。

全国ネットでPM7時頃であったせいか、早速旧友、知人、親戚から「見たよ、面白かった!」との電話やEメールをたくさん頂き、チョッピリ嬉しいような恥ずかしいような気分でした。

「テレビに出演」

それにしても今更テレビの伝播力の大きさに感心しました。

近頃ラジオ、テレビでも川柳の時間が増えて来ましたが、私は川柳の大衆化では大いに結構な事ですが、川柳の本質から見てやや弱い感じがしてなりません。

今年は柄井川柳が川柳を始めて八月二十五日が、ちょうど二百五十年目に当たります。これを銘記して、電波を通じた本格的な川柳の宣伝、普及を痛感する次第です。(小島笑司)

★秋風に傷なきものはなかりけり 薫風

★今夏の暑さはことのほか身にしみた。八月二十四日薫風先生の親友・寺尾俊平先生の未亡人・明子さんがなくなられたという。森中恵美子先生からのお電話で知らされた私は、絶句した。

★一月十七日、岡山市西大寺のご自宅をお訪ねした。薫風先生が「善魔堂」と名付けられた書斎は、俊平先

生在りし日のままのたたずまい。山崎方代と並んだ大きな写真が壁にかけられて

いる。二人ともに真ん丸い顔いっぱいの笑顔の、とても良い写真である。放浪の歌人・方代と、どこでどのような接点があったのか、想像力をかきたてられる。

★七月末、天王寺の青蓮寺で岸本吟一さんの納骨式にお参りさせて頂いた。吟一さんには二度お目にかかっ

ている。平成七年福岡の川柳大会と二年前の秋「川柳塔のぞみ」の勉強会である。

映画人らしくお洒落でインパクトの強い方であった。★「岸本水府之墓」と吟一さんの個性的な文字が刻まれたお墓にお骨は納められた。吟一句集「川柳的履歴書」によれば、父と子にはそれなりの軋轢もあったようだが、逝ってしまった今は風……。合掌。(朱)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(12月号)

地名

都府道市
県
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「サイン」 (10月15日締切)

12月号発表

西口いわゑ 選 — 共選 — 鈴木 公弘 選

B

A

B

A

地名

市都
県道府

姓
雅号

地名

市都
県道府

姓
雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



作品募集

川柳塔(8句)	河内天笑選	西出楓楽選	新家完司選	鈴木公弘共選	檸檬抄「サイン」(2句)	一路集(3句)	倉益一瑤選	牧渕富喜子選	「走る」 「荷物」 「ゴミ」	初期教室「十二月」(3句)	三宅保州担当
---------	-------	-------	-------	--------	--------------	---------	-------	--------	----------------------	---------------	--------

1月号

檸檬抄 「これから」
一路集 「白」「願う」
「着物」
初歩教室 「絵馬」

第59回 大阪川柳大会

日時	11月18日(日) 13時開場
場所	アビオ大阪 ☎(06)6941-6332 大阪市中央区森ノ宮中央1-17-5 JR大阪環状線・地下鉄中央線 森ノ宮駅下車西へすぐ
会費	1,000円(発表誌呈)
宿題	「電車」岩田 明子選(番傘川柳本社) 「籠」長浜 美籠選(川柳塔社) 「誘う」坊農 柳弘選(川柳塔社) 「仲間」筒井 祥文選(川柳天守閣) 「温暖化を詠む」(詠み込み不可) 前田 咲二選(川柳瓦版の会) 「しぶしぶ」嶋澤喜八郎選(川柳文学コロキウム) 「磨く」田中 新一選(番傘川柳本社)
出句	各題2句 席題なし 締め切り 14時
賞	各題の秀句に大阪市長賞贈呈
主催	番傘川柳本社・川柳塔社・川柳文学コロキウム 川柳天守閣・川柳瓦版の会
後援	大阪市

本社 11 月 旬 会

7日(水) 午後5時半から

兼題「煩わしい」「底」「キャンセル」
「座」「う」「退」「屈」

第26年度 夜市川柳募集

第5回「パス」北野哲男選
ハガキに3句 10月末日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

定價 八百円(送料84円)
 半年分 五千円(送料共)
 一年分 九千八百円(同)
 二〇〇七年(平成十九年)十月一日発行
 発行人 河内 權治
 編集人 山本 希久子
 印刷所 美研アー卜
 大阪市天王寺区大道一―四―一七
 花野ビル201号室
 電話(〇六)六七九一三四九〇番
 振替〇〇九八〇四―二九八四七九番
 発行所 川柳塔社

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限り集ます。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

オニザキの

すりごま

自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工・販売
から50年。

オニザキでは、手作りの
風味にこだわり、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ TEL 0120-30-5050
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) 6771-4861(代)